

博士論文

クライアントの主観的体験から見た心理面接のプロセス
-面接内と面接間の双方に注目して-

高山 由貴

目 次

はじめに	11
本研究の目指すもの	11
第 I 部 クライエントの主観的視点から心理面接のプロセスを理解する試み -面接内と面接間の双方に焦点を当てて-	12
第 1 章 心理面接のプロセスを理解するための 3 つの観点	13
第 1 節：クライエントの主観的体験からの理解	13
第 2 節：面接初期段階への注目	13
第 3 節：面接内／面接間双方への注目	14
第 2 章 先行研究の概観と本研究の目的	15
第 1 節：国外における先行研究	15
1-1) クライエントの主観的体験に関する研究	15
1-2) 面接初期段階に関する研究	16
1-3) 面接内と面接間の双方に着目した研究	16
第 2 節：国内における先行研究	18
2-1) クライエントの主観的体験に関する研究	18
2-2) 面接初期段階に関する研究	19
2-3) 面接内と面接間の双方に着目した研究	20
第 3 節：先行研究の問題点	20
第 4 節：本研究の目的	21
第 3 章 心理面接プロセスを理解するための手法	23
第 1 節：研究法・データ収集法・分析法の選択	23
第 2 節：プロセス研究	23
2-1) プロセス研究の特徴	23
2-2) 質的方法によるプロセス研究の特徴	23
第 3 節：IPR インタビュー	24
3-1) IPR インタビューとは	24

3-2) IPR インタビューの利点と限界.....	25
第 4 節：研究者（筆者）のバックグラウンド.....	26
第 4 章 本研究の構成.....	27
第 II 部 面接内におけるクライアントの主観的体験.....	29
第 5 章 試行カウンセリングで話すとは -クライアントの主観的体験から-（研究 1）	30
第 1 節：問題と目的.....	30
1-1) はじめに.....	30
1-2) 研究 1 の目的.....	30
第 2 節：方法.....	31
2-1) 分析法の選択.....	31
2-2) ロールプレイ・試行カウンセリング.....	31
2-3) 協力者.....	32
2-4) データ収集：IPR インタビュー.....	33
第 3 節：データ分析.....	34
3-1) ステップ 1：初期カテゴリの生成.....	34
(1)《話が進む》.....	34
(1)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋.....	35
(1)-2 《話が進む》の発言例.....	35
(2)《話が滞る》.....	35
(2)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋.....	36
(2)-2 《話が滞る》の発言例.....	36
(3)《話を合わせる》.....	36
(3)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋.....	37
(3)-2 《話を合わせる》の発言例.....	37
(4)《話を避ける》.....	38
(4)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋.....	38
(4)-2 《話を避ける》の発言例.....	39
3-2) ステップ 2：カテゴリの精緻化.....	39

(1)《面接の場の理解の進展》	39
(1)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋	40
(1)-2 《面接の場の理解の進展》の発言例	40
(2)《カウンセラー・クライアント関係の進展》	40
(2)-1 面接場面の抜粋と IPR インタビュー	41
(2)-2 《カウンセラー・クライアント関係の進展》の発言例	42
3-3) ステップ 3：カテゴリの整理・再編	42
第 4 節：考察	43
4-1) 先行研究との関係	43
4-2) 非臨床群で得られた知見の臨床群への適応について	45
4-3) 研究 1 の意義	46
第 6 章 試行カウンセリングで話が深まるプロセス -深まらない場合との比較から- (研究 2)	48
第 1 節：問題と目的	48
1-1) はじめに	48
1-2) 研究 2 の目的	49
第 2 節：方法	49
2-1) 分析データ	49
2-2) 分析法の選択	50
(1) ケース・マトリックス	50
(2) 事例比較法	51
第 3 節：データ分析	51
3-1) 分析のステップ	51
3-2) クライアントの分類	51
3-3) データ分析の過程：ステップ 1	52
(1) カテゴリの共通点・相違点の比較	52
(1)-1 4 つのカテゴリの共通点・相違点の比較	53
(1)-2 《話が進む》と《話を避ける》の共通点の比較	54
(1)-3 《話が進む》と《話を避ける》の相違点の比較	55

(2) ステップ 1 での分析のまとめ.....	55
3-4) データ分析の過程：ステップ 2ーステップ 1 分析結果の発展.....	56
(1) 分析対象の追加.....	56
(2) カテゴリの共通点・相違点の比較.....	57
(2)-1 《カウンセラー・クライアント関係の進展》と《話が進む》・《話が滞る》 の関係の検討.....	57
(2)-2 《面接の場の理解の進展》と《話が進む》・《話が滞る》の関係の検討.	58
(3) 面接初期のプロセスに関するカテゴリ関連図.....	58
第 4 節：考察.....	60
4-1) 面接初期において話が深まるプロセスの特徴.....	60
(1) 話が深まるプロセスの特徴.....	60
(2) 話が深まる場合と深まらない場合の違い.....	61
4-2) 研究 2 の意義.....	63
4-3) 研究 1・研究 2 の限界.....	63
第Ⅲ部 面接内と面接間の双方におけるクライアントの主観的体験.....	65
第 7 章 短期試行カウンセリングに関する体験・ナラティブ指向事例研究 -同居の兄を避 けていた女子大学生の事例から- (研究 3).....	66
第 1 節：問題と目的.....	66
1-1) はじめに.....	66
1-2) 研究 3 の目的.....	66
第 2 節：方法.....	67
2-1) 採用した研究法：体験・ナラティブ指向事例研究.....	67
2-2) 事例研究としてエビデンスの質を高めるための対応.....	68
(1) セラピスト・研究者に関する情報.....	68
(2) 治療関係に関する情報.....	68
(3) 倫理的配慮等に関する情報.....	68
(4) クライアントの視点の取り入れ.....	68
(5) 背景情報（環境，条件等）の提示.....	69

(6) スーパービジョンの有無.....	69
(7) 変化の測定.....	69
(8) 面接プロセスの記述.....	69
2-3) IPR インタビュー.....	69
第3節：事例とインタビュー内容の提示.....	70
3-1) 提示する事例.....	70
3-2) 1回目面接：同居の兄と口をきかない.....	70
(1) 面接概要.....	70
(2) 面接場面の抜粋と IPR インタビュー.....	70
(2) -1 カウンセリングって何をするのか.....	71
(2) -2 状況をうまく説明できない.....	71
(2) -3 面接中は感情的にならずに話せることに気づく.....	72
(3) 1回目の IPR インタビューから読み取れること.....	72
3-3) 2回目面接：兄にお土産を渡す.....	73
(1) 面接概要.....	73
(2) 面接の抜粋と IPR インタビュー.....	73
(2) -1 カウンセラーに伝えることを日常生活でも意識する.....	73
(2) -2 カウンセラーに分かってもらいたい.....	74
(2) -3 面接がなければ状況は違っていた.....	74
(3) 2回目の IPR インタビューから読み取れること.....	75
3-4) 3回目面接：生活が楽になる.....	75
(1) 面接概要.....	75
(2) 面接の抜粋と IPR インタビュー.....	76
(2) -1 話す前からカウンセラーが分かっていると思いでいた.....	76
(2) -2 カウンセラーとだからこそ共有できる.....	77
(2) -3 特殊な会い方をした.....	78
(3) 3回目の IPR インタビューから読み取れること.....	78
第4節：考察.....	79
第8章 短期試行カウンセリングにおけるクライアントの主観的体験 -面接内と面接間の	

双方に焦点を当てて- (研究 4)	82
第 1 節：問題と目的	82
第 2 節：方法	82
2-1) 分析法の選択	82
2-2) 短期試行カウンセリングと尺度評価の実施	83
2-3) IPR インタビュー	84
2-4) 分析の過程	85
(1) 分析テーマの設定	85
(2) 分析ワークシートを用いた概念の生成	86
(3) 概念生成過程の例示	86
第 3 節：結果と考察	92
3-1) 生成された概念とカテゴリ	92
(1) 《話すことで何かを得る過程》	92
(2) 《面接の場だからこそその関係を認識する過程》	93
(3) 《面接を自分なりに使えるようになる過程》	94
(4) 《面接間に変化の兆しが現れる過程》	94
3-2) 概念間の関係	98
(1) 《話すことで何かを得る過程》に関する概念間の関係	98
(2) 《面接の場だからこそその関係を認識する過程》に関する概念間の関係	99
(3) 《面接を自分なりに使えるようになる過程》に関する概念間の関係	99
(4) 《面接間に変化の兆しが現れる過程》に関する概念間の関係	100
3-3) カテゴリ間の関係	101
3-4) 結果図	103
第 4 節：総合考察	106
4-1) 面接内と面接間におけるクライアントの体験及びそれらの相互作用	106
4-2) 研究 4 の意義	108
(1) 面接内プロセスと変化との関連	108
(2) 面接内／面接間プロセスと変化との関連	111

第Ⅳ部 クライエントの主観的体験に焦点を当てた臨床事例研究 -面接内と面接間の双方に焦点を当てて-	113
第9章 短期臨床事例の検討 -原因不明の身体症状を抱えた女性の事例から- (研究5)	114
第1節：問題と目的	114
1-1) はじめに	114
1-2) 目的	114
1-3) 取り上げた事例	114
第2節：方法：インタビュー調査	115
2-1) 事例Aの協力者及びその概要	115
2-2) インタビューの実施	116
(1) 事例の担当者及びインタビュアー	116
(2) インタビューデータの収集と分析	116
第3節：事例Aの面接経過とインタビュー	117
3-1) 事例Aの概要	118
3-2) インタビューと面接経過	118
(1) 来談前～インテーク～インテーク後	118
(1) -1 インタビューと面接記録	118
(1) -2 インタビューと面接記録の対比から読み取れること	120
(2) 1回目面接～1回目面接後	121
(2) -1 インタビューと面接記録	121
(2) -2 インタビューと面接記録の対比から読み取れること	122
(3) 2回目面接～2回目面接後	123
(3) -1 インタビューと面接記録	123
(3) -2 インタビューと面接記録の対比から読み取れること	124
(4) 3回目面接～3回目面接後	125
(4) -1 インタビューと面接記録	125
(4) -2 インタビューと面接記録の対比から読み取れること	126
(5) 4回目(最終回)面接～終結後	126

(5) -1 インタビューと面接記録	126
(5) -2 インタビューから読み取れること	128
第 4 節：考察	128
4-1) 《話すことで何かを得る過程》について	129
4-2) 《面接の場だからこそその関係を認識する過程》について	129
4-3) 《面接を自分なりに使えるようになる過程》について	130
4-4) 《面接間に変化の兆しが現れる過程》について	131
4-5) 事例 A の結果図	131
4-6) 研究 5 のまとめと課題	134
第 10 章 長期臨床事例の検討 -不登校をきっかけに来談した事例から- (研究 6) .	135
第 1 節：問題と目的	135
1-1) はじめに	135
1-2) 目的	135
第 2 節：方法：インタビュー調査	135
2-1) 協力者及びその事例	135
2-2) インタビューの実施	136
(1) 事例の担当者及びインタビュアー	136
(2) インタビューデータの収集と分析	137
第 3 節：事例 B の面接経過	137
3-1) 事例 B の概要	138
3-2) 面接経過	138
(1) 第 1 期：まずは家で自分の気持ちを話せるように試す時期	140
(1) -1 第 1 期の面接経過	140
(1) -2 第 1 期のまとめ	142
(2) 第 2 期：父親に思いをぶつけ始める時期	142
(2) -1 第 2 期の面接経過	142
(2) -2 第 2 期のまとめ	143
(3) 第 3 期：家庭内に滞ったエネルギーが社会への憤りに転じた時期	143
(3) -1 第 3 期の面接経過	143

(3) -2 第3期のまとめ	144
(4) 第4期：一時的に父親との対話が深まる時期	145
(4) -1 第4期の面接経過	145
(4) -2 第4期のまとめ	145
(5) 第5期：父親や姉と自分を切り離そうと葛藤する時期	146
(5) -1 第5期の面接経過	146
(5) -2 第5期のまとめ	147
(6) 第6期：父親や姉とは距離をおき前に進み出す時期	147
(6) -1 第6期の面接経過	147
(6) -2 第6期のまとめ	148
(7) 第7期：フリースクールへの入学から、その後のフォローアップの時期	148
(7) -1 第7期の面接経過	148
(7) -2 第7期のまとめ	150
第4節：クライアント／母親の主観的体験から見た面接経過	151
4-1) 《話すことで何かを得る過程》について	151
(1) 本人	151
(2) 母親	152
4-2) 《面接の場だからこそその関係を認識する過程》について	153
(1) 本人	153
(2) 母親	154
4-3) 《面接を自分なりに使えるようになる過程》について	155
(1) 本人	156
(2) 母親	157
4-4) 《面接間に変化の兆しが現れる過程》について	159
(1) 本人	159
(2) 母親	160
第5節：研究6の考察と今後の課題	161
5-1) クライアント／母親の主観的体験から見た面接経過とは	161
(1) 母親の面接経過	161

(2) クライエントの面接経過.....	163
5-2) 事例 B の結果図	165
5-3) 研究 6 のまとめと今後の課題	169
第 V 部 クライエントの主観的体験から見た心理面接のプロセスとは	171
第 11 章 本研究のまとめ	172
第 1 節：本研究で明らかにしたこと	172
1-1) 面接内におけるクライエントの主観的体験	172
1-2) 面接内と面接間の双方におけるクライエントの主観的体験	174
第 2 節：臨床的示唆	177
第 3 節：先行研究との関係	179
3-1) クライエントの主観的体験に関する先行研究との関係	179
3-2) 面接初期段階に注目した先行研究との関係	180
3-3) 面接内／面接間の双方へ注目した先行研究との関係.....	180
第 4 節：本研究の特徴	181
第 12 章 本研究の限界と今後の展望	183
引用文献	184

はじめに

本研究の目指すもの

本研究は、心理面接を受けるクライアントの主観的体験に関する研究である。日本の心理臨床実践研究においては、クライアントに意見を聞くということは、ほとんど行われてこなかった。多くの研究は、カウンセラーや研究者の視点から行われていた。一方、サービス業においては、サービス向上のためにモニター調査が行われることがある。心理面接を受ける利用者も、クライアント＝お客である。もっと、その声に耳を傾けてもよいのではないかという素朴な問題意識が、研究の背景にある。そのきっかけとなったのが、筆者が修士学生時代に体験した試行カウンセリングである。これは心理臨床面接の実習の一つとして、実習生が、カウンセラー役とクライアント役の双方を担い行う。当時は、他大学の実習生のカウンセリングを受けると、そこで感じた不満を言うために自校の院生控室に戻ってくるというルートができていた。筆者自身は、試行カウンセリングで話すことに意義を見出していたために、それが不思議に思えた。特に疑問に思ったのは、クライアントが自分の感じたこと、考えたことを表明していい場であるはずの面接で、なぜ、そのような不満が表明されないのかという点である。本研究では、この間を出発点に、クライアントとともに、より良い心理面接を作っていくことを目指した。

第 I 部 クライエントの主観的視点から心理面接のプロセスを理解する 試み -面接内と面接間の双方に焦点を当てて-

第 I 部の目的と構成

第 I 部は、心理面接のプロセスを理解するという本研究の目的と方法に関する部である。第 I 部は 4 章立ての構成となっている。まず、第 1 章では、心理面接のプロセスについて理解するための観点として次の 3 点挙げ、その意義や重要性について述べた。第 1 にクライエントの主観的体験からの理解、第 2 に面接初期段階への注目、第 3 が面接の時間（以下、面接内と記す）と面接と次の面接の間の時間（以下、面接間と記す）の双方への注目である。次に、第 2 章では、それらに関する先行研究を概観したうえで、本研究の目的について説明した。第 3 章では、本研究で用いた方法論について、その採用理由や手順を述べた。最後に、第 4 章において、本研究の構成を示した。

第1章 心理面接のプロセスを理解するための3つの観点

第1節：クライアントの主観的体験からの理解

臨床心理学的援助の1つに心理面接を通じた援助がある。心理療法の理論において、個人の主観的世界を「心」として理解しようとしたのがクライアント中心療法である(下山, 2007)。クライアント中心療法は、従来の指示的な心理療法に対するアンチテーゼとして、クライアントの価値や意義を認め尊重するという非指示的立場を取った(横溝, 1983)。このようなクライアントの主観的立場を尊重することの意義は、近年様々な研究からも明らかになっている。Bohart & Tallman (1999) のレビューによれば、心理面接の効果に関連する変数として、クライアントの関与の程度や、モチベーションなどがある。また効果の点だけでなく、クライアントとカウンセラーとの間の不均衡を見直すためにも、クライアントの視点に立つことの重要性が指摘されている。Anderson & Goolishian (1992 野口・野村訳 1997) は、「クライアントこそ専門家である—セラピーにおける無知のアプローチ」を提唱した。同著では、カウンセラーはクライアントに教えてもらう立場であり、面接における理解のための努力は相互協力的なものである。それゆえ、クライアントの世界観、意味、理解がなにより重要だと述べられている。

第2節：面接初期段階への注目

クライアントの視点から面接過程を眺めるに当たり、どの段階に注目すべきであろうか。心理面接による援助過程は、問題解決に向けて段階的に進んでいく。面接は数回で終結するものもあれば、何年にも渡って継続されるものもある。いずれであっても、初期段階からスタートし、問題解決のために、心理面接が一定期間継続されなければならない点で共通する。そして、継続されることは、理論・学派などにかかわらず、重要な効果の1つである(岩壁, 2005)。何回までを初期とするかは厳密な決まりはないが、この継続の判断をクライアントが行うのは、初期の1, 2回目であることが多い(葛西, 2006)。カウンセリングの継続という視点からだけでなく、治療効果の観点からも、カウンセリングの初期段階の重要性が明らかにされている。Klee & Abeles & Muller (1990) によると、カウンセリングの初期段階における協働関係は、その後の関係の維持に関係する。また、治療関係は、その後の介入の効果を予測する可能性があるとする(Harvath & Greenberg,

1989)。しかし、初期段階において、治療関係や面接の進展に関するクライアントとカウンセラーの見方は必ずしも一致しないことが明らかにされている(Horvath & Symonds, 1991)。以上をまとめると、面接初期とは、その後の過程をも予測しうる重要な段階である。それにもかかわらず、クライアントとカウンセラーのズレといった問題点も存在する。よって、面接過程を検討するにあたり、まず初期段階に注目することは意義があると思われる。では、初期段階とはどのような変容過程であるのだろうか。カウンセリングの理論は変容の理論であり、何らかの変化を起こすことを目的とする(岩壁, 2003)。カウンセリングの初期段階については、複数のモデルによる定義がある。Eagan(1990 鳴澤他訳 1998)は、カウンセリングの初期段階を、①問題状況の経緯を話す、②焦点化する、③新しい展望を持つという3つのことが目指される段階であるとする。岩壁(2007)は、複数のモデルを統合し、カウンセリングの初期段階を、関わり作りと探索の段階であるとした。これらをまとめると、カウンセリング初期段階における変容過程とは、クライアントとカウンセラーと共に問題を探索する中で、問題が徐々に明確化し、新たな展望を得るに至る過程であると言える。また、同時にカウンセラーとの関係形成の過程でもあるとも言えよう。

第3節：面接内／面接間双方への注目

前述の通り、面接過程に関してはカウンセラーや研究者の視点から論じられることが多かった。その問題点として、さらに加えるとすると、面接内に関してのみ扱っている点が挙げられる。しかし、クライアントの変化には面接内での変化と、面接間における変化の双方がある。面接内での関わりを基本とし、その中での変化を目指すのか、それとも積極的に面接間に働きかけるかは、カウンセラーの理論的背景や、活動領域等により異なり、どちらのスタイルにも利点がある。例えばトラウマ的体験を例に取ってみると、クライアントが語るにはまず、面接室の閉鎖性がもたらす安全、安心な環境が欠かせない。しかし、日常でのQOLを上げるためには、回避している場所や状況へのエクスポージャーなど、面接間での取り組みも必要となるかもしれない。このように面接内での援助も面接間での援助もそれぞれに必要なものであり、境界も曖昧である。よって、面接過程を面接内と面接間の双方から理解することが重要である。岩壁(2008)は、クライアントが変容過程の担い手であることを考えると、クライアントが面接と生活をどのようにしてつなぎ、面接の効果を浸透させているのか調べる研究が、今後さらに必要となってくると述べている。

第2章 先行研究の概観と本研究の目的

第1章では、心理面接のプロセスについて理解するために注目すべきポイントとして、①クライアントの主観的体験からの理解、②面接初期段階への注目、③面接内／面接間双方への注目の3点を挙げた。続く第2章では、これら3点に関する先行研究について、国外／国内に分けて概観する。

第1節：国外における先行研究

1-1) クライアントの主観的体験に関する研究

心理面接のプロセスをクライアントの主観的体験から検討する研究として、面接を進展／停滞させる要素として「何が」あるのかに関する問いがある (Elliott, 2008)。先行研究では、この「何が」に当たる部分を重要な出来事 (significant events) であるとし、それらに焦点を当てている。この重要な出来事を明らかにするための手法のひとつが、半構造化面接によりクライアントの体験を語ってもらう回想法的研究である。Bedi et al. (2005) は、現在心理面接を利用中の者、および終了した者に対しインタビューを行った。その結果、面接において重要だと思われる出来事として、技法行為や非言語コミュニケーションなど25のカテゴリを抽出している。

クライアントにとって重要な出来事は、有益なものだけではない。Elliott (1986) は、研究協力者を対象に、20分1回の試行面接を行った。それにより、クライアントにとって役に立った出来事だけでなく、役に立たなかった出来事を特定している。役に立った出来事としては、新しい観点を得るなど「課題」に関するクラスターと、理解されるなど「対人関係」に関するクラスターが見出された。また、「誤解」や「否定的なカウンセラーの反応」など6種類の役に立たない出来事が同定された。この結果から Elliott (1986) は、役に立った／立たなかった出来事の分類は、カウンセラーの訓練やスーパーヴィジョンに用いることができると指摘している。また、同じような観点から、心理面接の中でクライアントがどのように困難に対処しているか、その声にならない声を明らかにしたのが Rennie (1994a, 1994b) である。Rennie (1994a, 1994b) は、面接を継続中のクライアントを対象にインタビューを行い、クライアントの側から分析した。その結果、「追従」 (Rennie 1994a)、「抵抗」 (Rennie 1994b) といっ

た概念を提唱した。まず「追従」とは、クライアントがカウンセラーの専門性に基づく技術や知識を認め、カウンセラーにの考えに従うことである。次の「抵抗」とは、クライアントが面接において期待と疑問といったアンビバレントな感情を抱き、そのため何らかの抵抗を示すというものである。Rennie (1994a, 1994b) は、クライアントの抱く懸念や批判、抵抗の気持ちは、表明されないか、されても間接的なものであるとする。そのため、面接の過程において、クライアントがこのような気持ちを抱くことがあるということをカウンセラーが知っていることが、面接におけるカウンセラーの感受性を高めると指摘している。

以上に述べたクライアントにとって重要な出来事に関する研究については、いくつかの共通する知見がある (Elliott, 2008)。まず、クライアントにとって役立つものとして、治療関係、傾聴・共感・肯定などのカウンセラーの態度、問題解決のための具体的な手段の提供などがある。一方、妨げとなるものとして、カウンセラーによる考えの押し付けや、決めつけ、価値の否定などがある。そしてこれらの知見は、属性の異なるクライアント群を対象とした研究であっても一貫性があることも指摘されている。

1-2) 面接初期段階に関する研究

前述のとおり、面接初期というのは効果等と関連した重要な段階である。しかし、クライアントとカウンセラー間のズレが存在することも明らかにされている。例えば、Swift & Callahan(2009)は、面接初期におけるクライアントとカウンセラーとの間の意見の一致度を検証した。治療関係や効果に関しクライアントとカウンセラーの双方に評点を求めたところ、中程度の相関が見られた。しかし、カウンセラーの評点はクライアントよりも有意に低かった。また、治療目標や課題に関する一致を、クライアントとカウンセラー双方の発言から質的に評定した結果、3割程度の一致に留まることも明らかになった。

1-3) 面接内と面接間の双方に着目した研究

面接過程がどのように進展していくかについては、いくつかの理論が提唱されている。例えば Egan(1990 鳴澤他訳 1998)は、問題の明確化→目標の設定→実行という3つのステージに分ける。このように多くの段階理論では、面接内で定めた目標に基づき、面

面接間における具体的行動を促すというプロセスが、カウンセラーの役割から示される。ただし、あくまでもそれを実行するのはクライアントである。面接間においても、カウンセラーが伺い知ることのできないクライアント独自の動きがあることが想定される。そして、それらはカウンセラーの意図とは異なるがゆえに面接内では報告されないかもしれない。このようなカウンセラーとクライアント間のギャップを埋め面接過程を理解する必要がある。

面接内のクライアントの主観的体験に焦点を当てることで、間接的に面接間での様子も垣間見た研究がある。例えば Levitt, Butler & Hill(2006)は、カウンセリング経験者を対象に、カウンセリングを受けて重要だった経験や場면을語ってもらった。その結果、「治療的關係」、「セラピスト（カウンセラーと同義。原文に合わせた。以降も同様とする）の人格」など面接内に関する5つのクラスターを得た。それに加え、6つ目のクラスターとして、面接間に関するクラスター「セッション外での整理」も見出した。それによれば、クライアントは、面接間の時間に、セルフヘルプに関する本を読んだり、内省を深めたりしていた。そして、そのような面接間に行われる整理が重要であったとクライアントは感じていた。また、Perren, Godfrey & Rowland(2009)は、心理療法の長期的効果についてクライアントの視点から調査した。その結果、クライアントは面接内だけでなく面接間においても積極的に問題に取り組んでいることが明らかになった。そして、このような過程を経て得たスキルは、面接終了後も効果が維持されるために欠かせないものであった。また、Mackrill (2007) は、クライアントの日記を通し、面接内と面接間の体験を読み解いた。それによると、面接は状況を改善するための唯一の手段ではなく、クライアントは面接以外にも複数の試みを行っていた。加えて、クライアントは面接を受け始める前から、変化のための独自の方略を持ち合わせており、それが面接の効果にとって重要であった (Mackrill, 2008)。ここから、Mackrill (2008) は、従来の研究が、介入と結果の関係のみで構成されており、クライアント独自の方略を見過ごしてきたと指摘する。そのため、クライアントが独自に面接に持ち込む治療的要因を理解することが、面接の過程と結果を検討する上で重要であると述べている。

以上のように面接過程を明らかにするにあたり、面接間にまで着目した研究は増えつつある。しかし、それらはクライアントの面接間の動きをカテゴリとして抽出すること

や、効果との関連に留まっている。そのため、面接内と面接間が互いにどのような影響を与えているかについては明らかでない。この点について内在化という概念に焦点を絞って明らかにしたのが Knox, Goldberg, Woodhouse & Hill (1999)である。Knoxら(1999)は、クライアントに対するインタビューから、面接が進展するにつれ、セラピストがクライアントの中に表象として内在化されることを示した。そして、クライアントが内在化された表象を用いて、面接内と面接間をつなげることを明らかにした。内在化は、カウンセラーや面接のイメージをクライアントが取り込むという一方向の現象を示す。それに対し、カウンセラー・クライアントが双方向的に面接のイメージを形成する概念として「自然に形成される治療構造」(小此木, 2004)がある。小此木(2004)は、クライアントの中で形成された面接に対する枠組みが、クライアント・カウンセラーの交流のあり方に影響を与えることを指摘した。そして、治療構造は面接内と面接間を橋渡し(北山, 1990)する機能も持つ。この面接内/間における、クライアントのカウンセラーや面接イメージの定着を測定する尺度が Intersession Experience Questionnaire (IEQ) (Hartmann, Orlinsky, Weber, Sandholz & Zeech, 2010)である。Hartmannら(2010)は、過食症の治療結果と面接内/面接間の経験との関連を複数の尺度を用い調査した。その結果、IEQはその他の尺度と比べ結果をよりよく予測した。

第2節：国内における先行研究

2-1) クライアントの主観的体験に関する研究

日本におけるクライアントの体験に関する研究は、間接的にクライアントの体験にアプローチするという手法に端を発する。それは、クライアントに直接尋ねるのではなく、研究協力者に対し、クライアントの心理状態に自分の心を重ね合わせ、間接的にクライアントの体験を評定してもらう方法である。山本(1996)は、対人関係の問題による不登校に関する相談場面を実験的に設定した。そして、その一部を録音したオーディオテープを研究協力者に聞かせ、自分がクライアントならどのような気持ちになるかを評定するよう求めた。その結果、クライアントがカウンセラーの意見を受け入れる状態にあることが、カウンセラーの解釈が効果的に機能する重要な要因であることが明らかにされている。また、島本(1996)は、友人関係の相談をする面接場面を実験的に設定した。

そこからカウンセラーの応答様式の異なる4つの場面を取り出し、研究協力者にその録音・逐語を視聴させ、クライアントの満足度について評定を求めた。その結果、問題のため感情的になっているクライアントの場合は、非指示的なカウンセラーの応答に対する満足度が高いことが示された。逆に具体的な解決策を求めるクライアントの場合は、指示的なカウンセラーの応答に対する満足度が高いことが明らかにされた。

その後2000年代に入り、クライアント自身に直接アプローチする研究が出てくる。そのひとつが、クライアントによるカウンセラー・クライアント関係（以下、治療関係と表記）の評定である。葛西（2006）は、日本において、面接過程に関する実証的な研究が少ないという問題意識から、治療同盟尺度（Working Alliance Inventory：WAI（Horvath et al., 1989）の日本語版を作成した。治療同盟尺度はHorvath et al.（1989）によって開発された36項目の質問紙で、「目標の一致」、「課題の一致」、「治療者とクライアントの情緒的絆」の3つの下位尺度から構成されている。治療関係を測る尺度として現在もっとも広く使われているものの1つである（岩壁, 2008）。葛西（2006）はこの尺度を用い、面接の回数を重ねるにつれ、治療関係が強化されることを明らかにした。また、面接の構造を意図的にクライアントに伝えることと、治療関係形成の間に関連があることを指摘した。よって、面接の初期段階においては、面接の目標・方法・枠組み等を説明することが、治療関係形成に肯定的に作用すると述べている。

2-2) 面接初期段階に関する研究

面接初期は、カウンセラーが事例を見立てるとともに、クライアントが面接の継続を判断する重要な時期である。国内の研究では、訓練中のカウンセラーの初回面接における困難（村井・岩壁・杉岡, 2013）など、カウンセラーの立場から、面接初期を扱う研究が中心である。しかし、数少ないものの、クライアントに対し直接インタビューを行い、初回面接における体験を明らかにする研究も行われている。岩壁（2005, 2007, 2008）は、初回の面接の直後にクライアントに対しインタビューを行った。そして、そのインタビューデータについて、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Strauss & Corbin, 1998 操・盛岡訳 2004）（以下、GTAと記す）による分析を行った。その結果、＜心力回復の一步＞と＜保留＞というカテゴリを抽出した。＜心力回復の一步＞は、話すことを通して希望を取り戻すとともに、問題に取り組むための一步を踏み出すという体験で

ある。この<心力回復の一步>は，【話すことの治癒力】，【希望の芽生え】，【自己再確認】，【出会い】の4つの下位カテゴリからなる。<保留>は，クライアントの予想していたカウンセラー像や対応と実際のそれが異なり，来談継続の意思決定を保留するという体験である。<保留>は，【これが私のセラピスト？】，【不履行】の2つの下位カテゴリからなる。以上からは，初回面接がクライアントにとって，第一歩を踏み出すものともなれば，逆に留まることともなりうる相反する体験であることが分かる。

2-3) 面接内と面接間の双方に着目した研究

国内の研究において，面接内と面接間の双方に着目した研究はほとんどない。ただし，面接内を主たるテーマとしつつも，結果的に面接間の出来事を含むこととなった研究はいくつかある。例えば，青木（2013）は，3回の試行面接を実施し，協力者の問題に対するとらえ方がどのように変化するかを明らかにすることを試みた。その結果，個人は<面接で得られた気づき>だけでなく，<気づきにつながる日常体験>から<視点の転換>を体験し，それが【問題イメージの再構成】へとつながることを明らかにした。つまり，問題イメージの再構成は，面接によってのみもたらされるのではなく，それに関わる日常体験も影響を与えることを示唆した。また，日笠（2011）は，面接過程をセラピストの面接記録から検討した。その際，セラピストの介入を「面接内での介入」「面接外への介入」「本人の工夫」の3つのカテゴリに分類した。そして，各カテゴリについて，クライアントのフィードバックを受けた。その結果，クライアントは「面接内での介入」だけでなく，「面接外への介入」についても肯定的に受け止めていることが明らかになった。

第3節：先行研究の問題点

以上に概観した先行研究についてまとめると，まず，国外の研究に関しては，クライアントの主観的体験について多くの質的研究がなされている。それらは面接内の出来事のみ焦点を当てたものが中心である。面接間にも焦点を当てた研究は増えつつあるものの，課題が残されている。それは，先行研究では，面接間におけるクライアントの体験をカテゴリとして抽出することや，効果との関連に留まっている点である。そのため，面接内と面接間の相互作用については，セラピストの内在化という観点からしか明らかになってい

ない。しかし、クライアントの面接間の動きに着目した先行研究をふまえると、内在化以外にも、多くの要素が相互作用に関わっていることが想定される。

また、国内の研究に目を転じると、主流はカウンセラーの立場から行なわれる事例報告／研究であり、クライアントの主観的体験に基づく研究は増えつつあるとはいえ十分ではない。対象となるクライアントも、非臨床群である場合が多く、実際の臨床場面での検証は十分でない。また、研究の比重は面接内に置かれており、面接間については補足的に言及されるに留まっている。よって、面接過程全体における面接間の位置づけを明らかに示すには不十分である。

第4節：本研究の目的

以上をまとめると、面接過程において、その初期段階は効果を予測しうる重要な段階である。しかし、面接の進展に関するクライアントとカウンセラーの理解は必ずしも一致しない。そのようなギャップは面接内に留まらず、面接間にも及んでいる場合もあるだろう。例えば、面接間においても、カウンセラーが伺い知ることのできないクライアント独自の取り組みがある（Mackrill, 2008）。それらはカウンセラーの意図とは異なるがゆえに面接内では報告されないかもしれない。そこで、面接初期段階におけるプロセスを、面接内と面接間の双方から、クライアントの主観に基づき検討することは、面接初期において見られるクライアントとカウンセラーのギャップを埋めていく手段の1つとなるのではないかと考えられる。

しかしながら、クライアントの主観的体験から、面接初期のプロセスを、面接間も含めた一連の流れの中で明らかにした研究は充分でない。双方に焦点を当て、その相互作用から面接過程を理解する意義として、次の3つを挙げることができる。第1に、面接内での体験をクライアントの視点から明らかにできる。第2に、クライアントが、面接内での出来事と、面接間の出来事をどのように結びつけ、次の面接に臨んでいるかを明らかにすることができる。また第3に、面接を重ねる過程で、面接間における時間が、クライアントの問題に対する取り組みや、カウンセラーとの関係にどのような影響を与えるかを見ることができる。

以上を明らかにすることは、面接内と面接間の相互作用を高め、クライアントのより肯定的な変化を促すことへとつながる可能性がある。そこで本研究は、面接初期におけるク

クライアントの主観的体験を，面接内と面接間の双方から探索的に明らかにすることを目的とする。それにより，面接における臨床的示唆を得ることを目指す。そのための研究の構成は下記の通りである。

- ① 面接内にクライアントはどのような体験をしているのか。（研究 1, 2）
- ② 面接内・面接間にクライアントはどのような体験をしているのか。また，面接内と面接間はどのように相互作用するのか。（研究 3, 4）
- ③ 研究 1～4 で非臨床群を対象に得られた知見は，臨床群においても同様に見られるのか。（研究 5, 6）

なお，各研究の問題・目的については，それぞれの研究の冒頭にて述べることとする。

第3章 心理面接プロセスを理解するための手法

第1節：研究法・データ収集法・分析法の選択

本研究は、面接過程におけるクライアントの主観的体験を探索的に理解するという目的に適した、研究法・データ収集法・分析法の選択を行った。

研究法には、質的方法を用いたプロセス研究を採用した。データ収集法には、対人プロセス想起法（Interpersonal Process Recall (IPR); Kagan & Schauble, 1969）を援用したインタビューを用いた。なお、上記方法以外にも、研究に合わせ、いくつかの分析法・研究法を採用した。それについては各研究の中で言及する。

次項では、各方法の特徴を踏まえ、採用の理由について述べる。

第2節：プロセス研究

2-1) プロセス研究の特徴

プロセス研究とは、面接のプロセス（過程）において起こるクライアントとカウンセラーのやりとりを研究するものである（岩壁, 2008）。Greenberg（1986）は、プロセス研究を次のように定義している。

「プロセス研究とは患者－セラピストシステム間の相互作用の研究である。プロセス研究の目的は、このシステム間の相互作用における変化の過程を同定することである。プロセス研究はこのシステム間の行動や体験、セッション内外の行動や体験、変化の過程に関係する行動や体験の全てを網羅する」

この定義によれば、プロセス研究の特徴として、面接の結果ではなく、その過程における相互作用や変化を中心に扱う研究であるということが挙げられる。その点においてプロセス研究は、面接の効果を中心に扱う効果研究と異なる（岩壁, 2007）。このようなプロセス研究の特徴は、面接過程においてクライアントがどのような体験をしているのかを詳細に追っていくのに適した方法であると考えられる。そのため、本研究の目的に合致した適切な方法であると考えた。

2-2) 質的方法によるプロセス研究の特徴

プロセス研究の手法には、尺度を使ってクライアントの行動や発話を分類するものや、

会話内容を質的に分類するものなど多岐に渡る（岩壁, 2007）。本研究では、質的方法を採用することとした。質的方法とは、「具体的な事例を重視し、それを文化・社会・時間的文脈の中でとらえようとし、人々自身の行為や語りを、その人々が生きているフィールドの中で理解しようとする」ものである（無藤, 2004）。能智（2005）は、その方法論的特徴として、言葉や振る舞いを通して、「主観的」な経験に注目することを挙げている。本研究では、このような方法論的特徴が、クライアントの主観的体験を理解する上で適していると考え、質的方法によるプロセス研究を採用することとした。

第3節：IPR インタビュー

3-1) IPR インタビューとは

本研究では、クライアントに面接での体験をインタビューするにあたり、その手法として対人プロセス想起法（Interpersonal Process Recall (IPR: Kagan & Schauble, 1969)を用いた IPR インタビューを援用した。IPR インタビューとは、対人関係における相互作用に関する記憶を喚起するために、面接の録音・録画再生を用いる方法である。その手順は、まずカウンセラーとクライアントが面接をし、その模様が録音・録画される。面接終了後に、研究者（＝筆者（注）カウンセラーとは別人物）とクライアントで、録音・録画した面接を視聴する。視聴しながら、研究者とクライアントは、いつでも好きな時に再生を停止し、クライアントの想起した感情などについて話し合う（図 3-1）。この手法は、元々はカウンセラーの教育・訓練に用いられていたものである。近年では、面接のプロセス研究に用いられるようになってきている（Rennie, 1994a, 1994b など）。

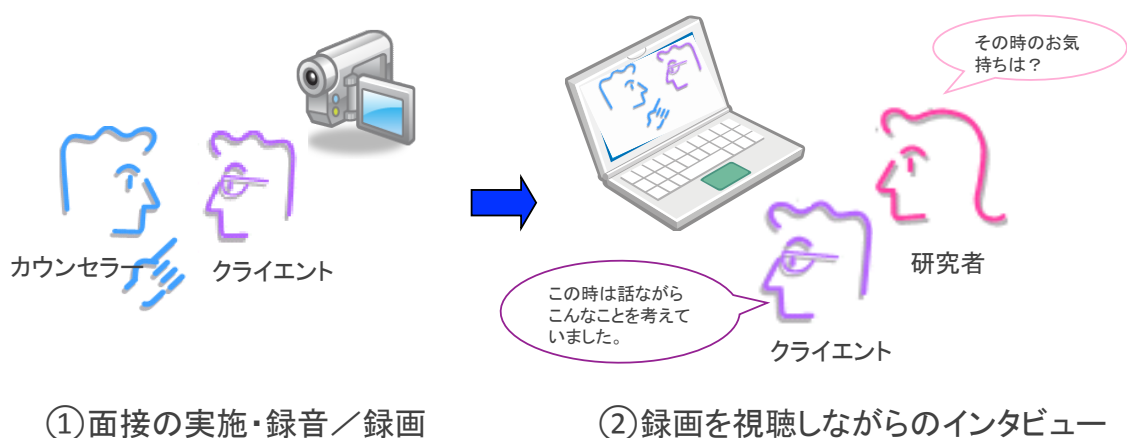


図 3-1 IPR インタビュー

3-2) IPR インタビューの利点と限界

IPR インタビューの利点としては、次の3点が挙げられる（高山，2013）。第1に、面接の録音・録画がインタビューイの記憶を喚起するため、記憶が想起されやすいことである。面接内における重要な出来事に焦点を当てた研究の多くは、面接終了後のクライアントに、その主観的体験を尋ねる回想法と呼ばれる手法が取られる。その場合、体験の質や、ニュアンスなどの記憶が薄れてしまったり、変容してしまったりする可能性があることが指摘されている（Rhodes, Hill, Thompson & Elliott, 1994）。IPR インタビューは、その問題を面接の録音・録画により緩和する。第2に、面接の録音・録画に基づき特定の場面に焦点を当てることができることである。実際、筆者の行ったIPR インタビューにおいても、クライアントが思わず涙した面接場面を振り返ることがあった。この状況を一時停止した画面を共に振り返ることは、クライアントのその時の体験を共有する強い助けとなった。そして、第3が、研究者がクライアントと共に面接の全過程を振り返ることができることである。クライアントの面接での語りを理解するためには、そこに至るまでの文脈を理解することが不可欠である。IPR インタビューはそのような情報も提供する。下記にインタビューを例示する。

試行カウンセリングの映像：カウンセラーがクライアントに対し「もう少し細かく教えてもらってもいいですか」と尋ねた場面

C1.2 : すみません（録画を）流しながらで結構なんですけど、さっきのこの、一番上の、もうちょっと細かく教えていただいてもいいんですかっていう所で、これまで話してきて、でなんか、これ以上話すのが嫌だなあっていうのは、全然なくて、こんなことがありましたって、何か言ったことで、新たな視点が提供してもらえるのかなあっていう考えがあったのかなあっていう気がします、この辺りは。

研究者：細かく教えてもらうというお願いによって、話す側にとっては、新たな視点が提供される感じ。

C1.2 : それでまた何か細かく話をすると、今日、私なんか、面接の最中もその話をしってしまったんですけど、何か、セラピストの方から色々言葉を返していただいて、そこで自分自身が気づくってというのがあった。

IPR インタビューの限界としては次の2点が挙げられる。第1に、クライアントの話が、面接の時点で思ったことなのか、それとも今録音を聞いて思ったことなのか完全に切り分けることが難しいことである。そこで、本手法を用いるにあたっては、この限界

に留意して以下のような教示を行った。

「録音を聞いて、その時思ったこと、感じたことが何か心に浮かんだ場合には、録音を止めてその内容をお話してください。ただし振り返ってみての感想や考えでなく、話している時にどうであったかでお話下さい」

この教示によって、面接場面での体験に焦点を当てるようクライアントに意識づけを働きかけた。

限界の2点目は、面接過程にカウンセラー・クライアント以外の第三者が関与することで、面接の方向性に影響を与える可能性も考えられることである。しかし、岩壁(2010)は、IPRインタビューを通し、クライアントが面接プロセスについての理解を深めた先行研究などを例に、面接過程に研究者が踏み込むことは必ずしも有害ではなく、クライアント、カウンセラー双方にとっての学習体験につながると述べている。

第4節：研究者（筆者）のバックグラウンド

以上、本研究の手法について述べた。最後に研究を進めるうえで、研究者（筆者）のバックグラウンドを示しておきたい。それは、心理面接の研究の結果には、研究者の支持する心理療法やバックグラウンドが影響する（野田，2015）ためである。筆者は現在、臨床歴8年目に入る。主な臨床現場は学校や私設心理相談機関である。心理面接における訓練は、大学院において、特定の理論的枠組みによらない基礎的な訓練を受けた。個人的関心の基礎には、クライアントの主体性に重きを置くヒューマニスティックアプローチがある。最近の実践では、そこに認知行動療法などを加えた統合的アプローチをとっている。

第4章 本研究の構成

ここまで述べてきたように、本研究では面接初期におけるクライアントの主観的体験を明らかにすることを試みた。その際、面接内だけでなく、面接間にも焦点を当てた。そのための研究の構成を図4-1に示す。まず、第Ⅱ部で1回の試行カウンセリングを例に、面接内でのクライアントの主観的体験を検討した（研究1，研究2）。続く第Ⅲ部では、面接内と面接間の双方に焦点を当てた。研究3において、3回の短期試行カウンセリングの1ケースに関する事例研究を行った。研究4では、さらに3ケースを加え、クライアントの面接内と面接間の主観的体験を検討した。ここまで（研究1～4）は、非臨床群を対象としたものであった。そこで、第Ⅳ部の研究5，研究6においては、臨床群を対象に、第Ⅲ部で得られた知見が、事例展開の理解をどのように助けるかを検討した。最後に第Ⅴ部で、第Ⅱ部～第Ⅳ部をもとに、クライアントと共により良い面接を作り上げていくためには何が必要かについて考察した。なお、本論文における研究は、以下の公刊論文、学会発表を再構成し掲載した。

高山 由貴(2010). クライアントの主観的体験に関するプロセス研究-試行面接における話の深まりに注目して- 臨床心理学, 11(2)

高山 由貴(2013). クライアントの主観的体験から見たカウンセリング初期のプロセス-試行カウンセリングにおける話の深まりに注目して- 臨床心理学, 13(5)

高山由貴(2013).短期試行面接におけるクライアントの変容-面接内/面接間の双方に焦点を当てたプロセス研究- 日本心理臨床学会第32回大会 “大会シンポジウム（調査研究）【SB2-02-01】”

高山 由貴(2015). 面接内と面接間の相互作用に関するプロセス研究-短期試行面接におけるクライアントの主観的体験から- 臨床心理学, 15(3)

高山 由貴(2017). 短期試行面接に関する体験・ナラティブ指向事例研究 心理臨床学研究, 35(2)

クライアントの主観的体験から見た心理面接のプロセス
-面接内と面接間の双方に注目して-

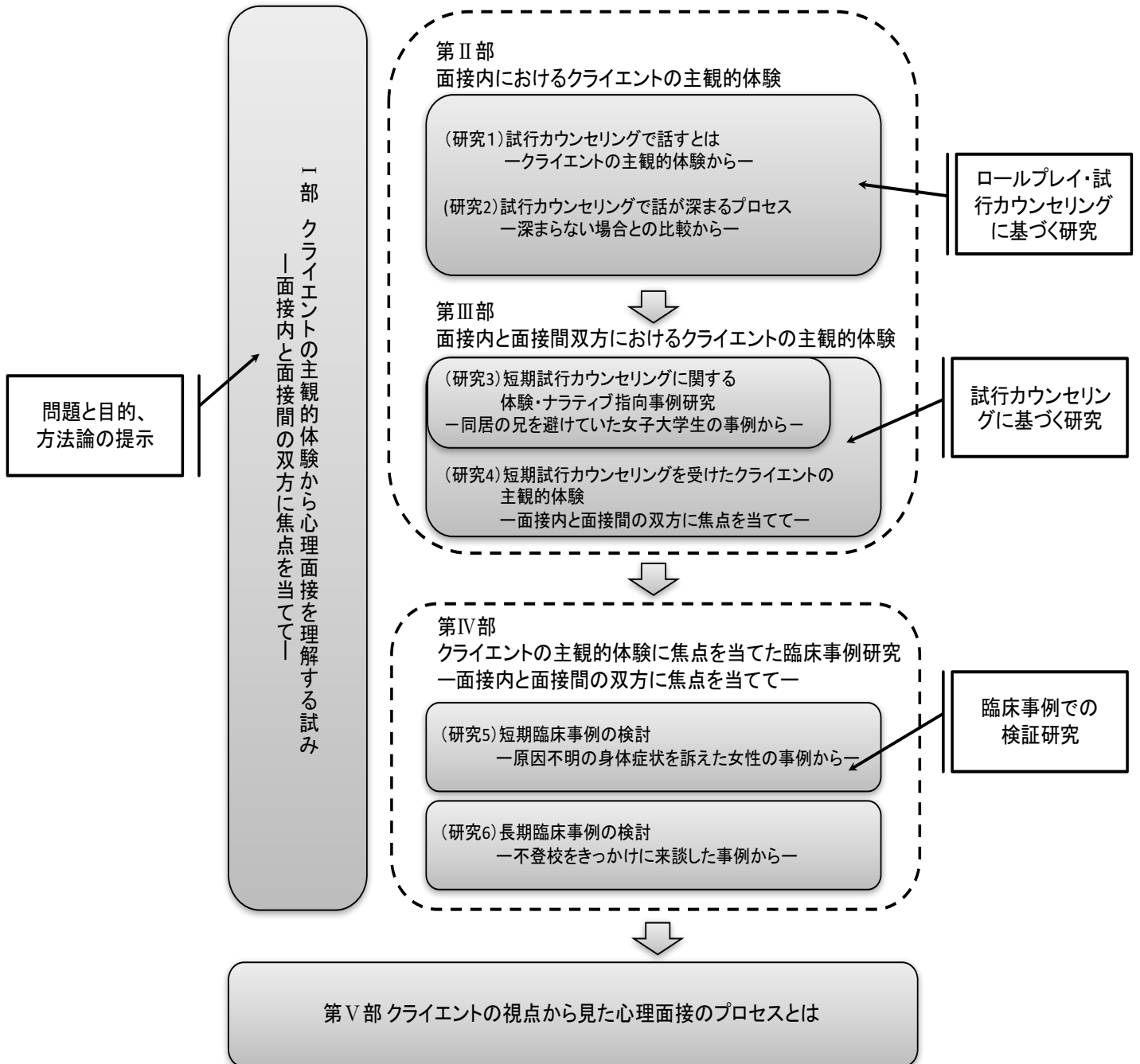


図 4-1 本研究の構成

第Ⅱ部 面接内におけるクライアントの主観的体験

第Ⅱ部の目的と構成

第Ⅱ部では、面接内におけるクライアントの体験を探索的に明らかにすることを試みた。第Ⅱ部は2章立ての構成となっている。まず、第5章では、1回のロールプレイ／試行カウンセリングを受けたクライアントに対し、IPRインタビューを行った。そのデータを、GTAを援用し分析を行った。これにより、面接で話すということは、クライアントにとってどのような体験であるかを明らかにすることを目指した。続く第6章では、同様のデータを、ケース・マトリックス、事例比較法を援用し分析した。これにより、面接内においてクライアントの話が深まるプロセスを、話が深まらない場合との比較から明らかにした。

第5章 試行カウンセリングで話すとは－クライアントの主観的体験から－（研究1）

第1節：問題と目的

1-1) はじめに

面接による援助過程は、問題解決に向けて段階的に進んでいく。面接の初期段階については、複数のモデルによる定義がある。岩壁(2008)はそれらを概観し、面接の初期段階を「探索の段階」とした。そこでクライアントはカウンセラーとの良好な関係に支えられながら、自らの問題にまつわる出来事や感情についての話が深まっていく。面接の主要アプローチは、このようにクライアントの話が深まっていく過程自体に治療的効果があると考えられる。面接が談話療法(Wachtel, 1993 杉原訳 2004)とされるゆえんである。例えば、精神力動的アプローチでは自由連想により頭に浮かんだことはどんなことでも話すように奨励される。それが抑圧された欲求や葛藤を意識化することにつながるためである。また、来談者中心アプローチでは、クライアントの内的体験に関する話が深まっていくことを重視する。それにより自己概念と内的経験の不一致を解消し、やがて自己実現に至ると考えるためである。認知的アプローチにおいては、クライアントの問題の背景には何らかの歪んだ認知があると考えられる。よって、クライアントの話が深まる中で、認知の偏りを明らかにし、より適応的な認知へと見直しを図ることを目指す。以上を踏まえると、面接の初期段階においてクライアントの話が深まっていく過程に注目することは、理論・学派によらず重要であると言える。

1-2) 研究1の目的

面接過程に注目するにあたり欠かせないのが、クライアントの主観的体験を通じた理解である。Elliott(1991)は、クライアントの体験から面接過程を見る視点として、①行動や体験、②話す内容、③非言語コミュニケーション、④介入効果の4つの側面があるとしている。研究1では、クライアントの面接内での体験を、「話す内容」に焦点を当てて、明らかにすることを目指した。具体的には、クライアントの話す内容がどのように深まるかに注目することとした。ただし、話が深まることを前提とすることのないよう、話が深まらない場合にも注目した。面接において話す内容はクライアントによっ

て再構成されている（下山，2000）。従って，その内容は，クライアントの主観が反映されたものである。また面接は話すという行為と密接に結びついたクライアントの変容過程であると言えよう。そこで本研究では話の深まり／深まりのなさを「カウンセリングで話すという行為及び話す内容が，クライアントの主観的に意味あるものに変容する／変容しない過程」と定義し，探索的に研究を進めることとした。

第 2 節：方法

2-1) 分析法の選択

上記の目的を踏まえ，質的方法を用いたプロセス研究（Greenberg & Pinsof, 1986）を採用した。その詳細については，第 3 章第 2 節に述べた通りである。分析方法には GTA を用いた。GTA はデータに根ざした理論を生成するための手法である（Strauss & Corbin, 1998 操・盛岡訳 2004）。岩壁（2010）は複数の質的研究の特徴を比較することを通し，GTA が適するリサーチクエスチョンとして次を挙げている。「体験やプロセスに関する問題。体験にはどのような段階や通過点があり，それらがどのような順序で進んでいくか」という問いである。Strauss & Corbin（1998 操・盛岡訳 2004）は，感じ方・思考のプロセス・感情といった，特に複雑に入り組んでいるようなものであっても，十分にすくい取ることが可能であると述べている。以上のような特性を踏まえると，GTA は，複雑に入り組んでいるであろうクライアントの主観的体験を捉えるのに適した分析方法であると考えられる。また GTA は，そこから得られた知見を，面接実践へとつなげうる方法とも言える。そこで，研究 1 では分析方法の基本的な枠組みとして本手法を援用することとした。

2-2) ロールプレイ・試行カウンセリング

面接過程におけるクライアントの主観的体験を検討するにあたり，考慮したのが研究協力者を臨床群とするか否かである。各々の利点と限界は以下のとおりである。まず，臨床群の場合，実際のクライアントの体験を最も反映するという利点がある。一方，進行中の面接過程に影響を与える可能性も否定できず，倫理的な問題が残る。これに対し非臨床群の場合，想定される倫理的な問題が臨床群と比較し少ない。加えて，臨床群に対して行うには負担が比較的大きな面接直後のインタビュー等も可能（岩壁 2008）であ

る。一方、臨床の状況からは乖離するという限界がある。これらを総合的に勘案し、本研究では非臨床群を研究協力者とした。協力者は2つに大別される。まず1つは、大学院の臨床心理面接に関する授業において、実習の一貫として行ったロールプレイにクライアント役として参加した大学院生である。もう1つは、研究協力依頼に応募した一般の大学生である（協力者の詳細は2-3）に示す）。クライアントの体験を探るという研究テーマを明示したうえで、面接での体験を話すことに同意する者を協力者とした。話すテーマは、いずれの協力者もクライアントが実際に気になっていることであった。よって、ロールプレイであっても他者を演じる役割演技とは異なる。これにより架空の状況を設定する場合と比べ、実際の面接により近い設定となった。面接の枠組みを表5-1に示す。なお、クライアントが実際の状況を話す点に配慮し、中断・中止の自由などのインフォームドコンセントに努めた。

表 5-1 ロールプレイ・試行カウンセリングの枠組

回数（時間）		1回（約20～30分／回）
面接場所		都内大学内の個室となる面接室
設定	クライアント	クライアントが日常で少し気になることをカウンセラーに聞いてもらうことを目的とした。
	カウンセラー	クライアントの話を共感的に聴くことを基本とした。変化を促すことを目的とした意図的介入等は行わないこととした。

2-3) 協力者

本研究におけるクライアントの属性は、ロールプレイに参加した大学院生6名と、試行カウンセリングに参加した大学学部生4名の計10名であった。そのうち大学院生であるC1.1～C1.6は臨床心理学を専攻し面接に関する専門的訓練を受けている。大学生であるC1.7～C1.10は専門的訓練を受けたことがない。専門的訓練を受けた経験のある協力者の場合、実際のクライアントの主観的体験の質とは異なる可能性がある。しかしながら、カウンセラーとしての訓練には、クライアントに同一化しその心の動きを意識化することが含まれている（鏞，1970）。よってクライアントとしての体験をモニ

ターし、その心の動きを表現する上で適した協力者であると考えた。

カウンセラーは、面接の訓練を受けている臨床心理学専攻の大学院生が担当した。10人のクライアントに対し、カウンセラーは9名で、Co.3は2名のクライアントを担当した。ロールプレイ・試行カウンセリングのいずれを担当したカウンセラーにも、研究の趣旨を説明のうえ、協力の同意を得た。表5-2に協力者（クライアント・カウンセラー）とその属性を示す。なお、カウンセラーとクライアントの組み合わせは、性別や年齢等を考慮せずランダムに行なわれた。

表 5-2 協力者とその属性

クライアント			カウンセラー			
No.	性別	属性	No.	性別	属性	
C1.1	女性	修士1年	Co.1	女性	修士1年	ロールプレイ
C1.2	男性	修士1年	Co.2	男性	修士1年	
C1.3	女性	修士1年	Co.3	男性	修士1年	
C1.4	男性	修士1年	Co.4	女性	修士1年	
C1.5	男性	修士1年	Co.5	女性	修士1年	
C1.6	女性	修士1年	Co.6	女性	修士1年	
C1.7	男性	大学4年生	Co.7	男性	博士課程	試行カウンセリング
C1.8	女性	大学3年生	Co.8	男性	博士課程	
C1.9	女性	大学3年生	Co.9	女性	博士課程	
C1.10	女性	大学4年生	Co.3	女性	修士1年	

2-4) データ収集：IPR インタビュー

研究1では、1回目のロールプレイ・試行カウンセリング終了後に実施したインタビューのデータを分析対象とした。インタビューの手法としては、前述のIPRインタビューを援用した。試行カウンセリングの録音／録画を使用し、筆者がこれをクライアントと共に振り返りながらインタビューを行った。

第3節：データ分析

分析には次の3つのステップを踏んだ。最初にステップ1として、ロールプレイにおいてクライアントが体験する内容を、初期カテゴリとしてまとめた。次ぐステップ2では、理論サンプリング (Strauss & Corbin, 1998 操・盛岡訳 2004) として、試行カウンセリングのクライアントを追加し、カテゴリの精緻化を行った。最後にステップ3として、再度カテゴリを見直し整理・再編を行った。

3-1) ステップ1：初期カテゴリの生成

ステップ1では、臨床心理学を専攻する大学院生のクライアント6名 (C1.1~6) を対象とした。インタビュー結果を逐語化し、それを意味のつながりごとに切片化し、文章内容を端的に表すラベル名を付けていった。ラベル付けの後、ラベル同士の共通性や類似点に注目し下位カテゴリとしてまとめた。さらにそれらを、より抽象度の高い上位カテゴリへと統合していった。その結果、《話が進む》・《話が滞る》・《話を合わせる》・《話を避ける》という4つの上位カテゴリが生成された。以下、各カテゴリについて説明する。なお、データ分析の対象としたのは、IPRインタビューのデータのみで、面接の内容については分析の対象外としている。しかし、インタビューで発言や分析の理解を助ける目的で、面接場面も例示する。

なお文章中、上位カテゴリを《 》、下位カテゴリを< >で示した。また、インタビュー発言からの引用を「」で示した。また、面接場面とIPRインタビューの抜粋に関しては、カウンセラーの発言をC₀、クライアントの発言をC₁、インタビュアー（筆者）の質問をQ、筆者の補足を（ ）で示す。

(1) 《話が進む》

《話が進む》は、<伝わっている感じがする>や<自発的に話す>などの下位カテゴリからなる。面接において、自分の問題に関する話が進展したというクライアントの主観的な感覚を示すカテゴリである。それは次のような一連の流れである。まず、クライアントは自分の発言がカウンセラーに伝わっているという感覚を得た。その結果、さらに個人的な内容を自発的に話すようになった。以下に具体例を引用する。クライアントの語りからは、カウンセラーの応答が「ぴたっとくる言葉」であったため、さらなる自

己開示が促されていたことが読み取れる。

(1)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋

卒業後、仲の良かった友達と会えなくなって、今頃になって寂しいなって思うようになったとクライアントが話し始めた場面。

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1：そうなんですよね，何か振り返って寂しい感じがしちゃって，今まではバタバタしてた感じが，4月5月はしてたんですけど(中略) ああそういえばこの頃あんまり，仲良しの子に会っていないなあとか思うと。</p> <p>Co：ふと気が，気がつけば寂しいなあって。(中略)</p> <p>C1：気が付くと，ああなんか結構前はしゃべっていた気がするのに，なかなかしゃべってないじゃんって思っ。(中略) ああ，会えていないなあというのが，ちょっとこの頃積もっていて。</p> <p>Co：会えていないなあっていう気持が，ふと，こう思い返してみるというか，積もってきて，あれっという。</p> <p>C1：そうなんです，あれっという感じ。</p>	<p>C1：ここで，えーと，辛さまでは，辛いんじゃないなあ，いい言葉が見つからないときに，最初の言葉(寂しい)を持ってきてくれて，あ，ぴたっときたって思っ，自分で言っていたのに忘れて，言われて，そ，そ，それピッタリっという感じで，うーん，すごいなあっという感じなんですけど。でこの，あれっという感じなんですけど，自分が思っていた感じとやっぱりぴたっとくる言葉で。(後略)</p> <p>Q：ぴたっという言葉が来ると，話しやすさみたいのにも関係する？</p> <p>C1：そうですね，自分のこう，気持ちはあるけど，うまく言葉にできないことを，あ，そうそう，その言葉です，ってパッと言葉にできたことがまず嬉しくて，そうするとまたもっとこう話したくなって，ここはもっとこーんな感じなんですよって説明もしたくなって，プラスしてこういうこと，余裕と，慣れてきたらからっという，ここもこう付け加えてこう，言いたくなるというか。</p>

(1)-2 ≪話が進む≫の発言例

<p>「自分が思っていた感じとやっぱりぴたっとくる言葉で」<伝わっている感じがする></p> <p>「そうするとまたもっとこう話したくなって，ここはもっとこーんな感じなんですよって説明もしたくなって」<自発的に話す></p> <p>「自分がこんな状態だよってというのは見せてもいいような気持ちに」<自発的に話す></p>
--

(2) ≪話が滞る≫

≪話が滞る≫は，<うまく伝わらない感じがする>や<話ができなくなる>などの下位カテゴリからなる。面接において，自分の問題に関する話が進んでいかないという，

クライアントの主観的な困難を示すカテゴリである。カウンセラーの返す言葉は、外れてはいないものの、クライアントの気持ちを汲みとったものではなかった。そのため、クライアントは話ができなくなってしまった。「どうしたらいいんでしょうね？」という問いかけは、カウンセラーに答えを求めるといよりは、面接に対するあきらめや失望といった気持ちが表れていた。以下に具体例を引用する。

(2)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋

楽しみに授業を受けているにもかかわらず、集中力が持続せず、ウトウトしてしまうことがあるという話すクライアント。「辛いですね」と伝えるカウンセラーの言葉に、しばらく沈黙し、「どうしたらいいんでしょうね」と尋ねた場面。

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1：うーん、頑張ってるんですけども、ふっとこ、意識が飛んでしまって・・・うーん、・・・で一回なんか、そういう風に集中が切れると、あの、結構、先生の話が、途切れて、分かんなくなっちゃったりして、それで、何か余計に、もういいやっていう気分になってしまってる。</p> <p>Co：一回切れるともうその後は分かんないや、みたいなの。</p> <p>C1：そういう悪循環があつて。うん。</p> <p>Co：ちょっと辛いんですね。</p> <p>C1：そうです・・・・・・・・・・（沈黙）。どうしたらいいんでしょうね。</p>	<p>C1：何か色々言ったのに、「辛いですね」でまとめられてしまって。外れていないから、「そうですね」って言うんですよね、何かそっから話ができなくなってしまったのかなあと思います。</p>

(2)-2 <話が滞る>の発言例

<p>「何かそっから話ができなくなってしまったのかなあと思います」<話ができなくなる></p> <p>「たくさん会話したにもかかわらず感情が伝わったっていう感じはしていない」<うまく伝わらない感じがする></p> <p>「なんか、悔しいという表現を使われて、でも悔しいという感覚はあまりなくて、もったいないっていう感覚の方が強かったので、言い直した」<言い直す／話を戻す></p>
--

(3) <話を合わせる>

<話を合わせる>は、<話をつなごうと努力する>や<とりあえず肯定する>などの

下位カテゴリからなる。クライアントが、カウンセラーに話を合わせて話題を変えてしまうこと示すカテゴリである。まず、クライアントは話題が「興味の範囲から外に出ちゃった」と感じる。しかし、カウンセラーの言葉を否定することはない。自分の話に「どうやって戻そうか」と思案しながら、カウンセラーの問いかけに答えていた。以下にその具体例を引用する。

(3)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋

ロックに憧れバンドを組んだクライアント。しかし、年上のメンバーや、タバコの煙の充満するライブハウスに馴染めないでいると話す。その中で、クリーンな人はいないかとのカウンセラーの問いに、クライアントが答えながらも徐々に、沈黙する場面。

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1: そういうの(タバコ)を嫌う人は、うーん、あんまりそこ(バンド)でやってても、あんまり大成しないのかなーみたいな、そんな先入観をもったりもするんですね。まあ、タバコを吸えば、そんな(大成する)わけじゃないんですけど。</p> <p>Co: なんか、クリーンな人で、けれどもドラムがすごいまいとかっていう人はいないんですか？</p> <p>C1: あー、いることはいると思いますね。その、・・・どうなのでしょうね。タバコ吸うかどうかではあんまり、直接会わないと分からないんであれですけど、そういうものに手を出さない人は、それは・・・いっぱい、あ、多分、多数派だと思いますね。うん・・・(沈黙)・・・なんか(沈黙)・・・。</p>	<p>C1: ここは、何か話がそれちゃったなあっていう気がしました。どう戻そうかなあと思いながらしゃべっていた気がします。(後略)</p> <p>C1: タバコを吸わない人(が)、ドラマーとかだったり、タバコの煙を気にしないドラマーがいるかどうかは、僕が気にしない話とあまり関係ないじゃないですか、だから、そこで興味の範囲から外に出ちゃった感じがしました。</p>

(3)-2 <話を合わせる>の発言例

<p>「ここは、何か話がそれちゃったなあっていう気がしました。どう戻そうかなあと思いながらしゃべっていた気がします」<話をつなごうと努力する></p> <p>「まずカウンセラーの言葉を『うん』って言いながら、この人の言っていることはどういう意味なんだろう、(中略)って思いながら『うーん』って」<とりあえず肯定する></p> <p>「それを変えて、他の話にしたのに、結局その話につながってしまって、うーんって。あまり言いたくないんだけど、(話したために)最後にちょっと抵抗があった」<話をつなごうと努力する></p>
--

なお、《話が滞る》、《話を合わせる》体験をしたクライアントは、共にネガティブな感情を抱きつつ、面接を終えていた。それにもかかわらず、その感情がカウンセラーに表明されることはなかった。この点については、考察にて述べる。

(4) 《話を避ける》

《話を避ける》は、＜話すことに恐れを抱く＞や＜感情を回避的に抑制する＞などの下位カテゴリからなる。面接において、感情的な揺らぎをもたらすような話題を避けるというクライアントの主観的な体験を示すカテゴリである。以下に具体例を示しつつ述べる。面接の中でカウンセラーの返した言葉は「ばっちり」合っていた。あまりにも的確だったがゆえに、クライアントは、伝わった安心感よりも、伝わる「怖さ」を感じた。そこで感情的な安定を得るため、「具体的な話」から「抽象的な話」に回避をしていた。

(4)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋

最近、周りに失礼な言動を取ってしまうと語るクライアント。その例として、先輩に対する失言を挙げる。その場は、みんな笑ってくれたけれども、笑いの裏に何かあるのではと考えてしまうと述べた場面。

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1：何を言ったかっていいますと、まああの、向こうの先輩は、僕に対して、話を聞こうとしていたと言…ってくださったんですけど、僕は話を聞いていた「らしい」みたいな、本当に…、なんか、酷い、酷いっていうか、すごい無礼な、失礼なことを言ってしまって、その場はあの、みんなすごい笑ってたんですけど、今考えると、それを言った自分が本当に嫌で、たまらないんですね。</p> <p>Co：先輩が、話を聞いてくれようとしていて、自分はそのことに対して「らしい」を付けて返してしまった。その場はみんな笑ってくれたけど、自分で何で言ってしまっただろうと、後悔した。</p> <p>C1：こういうのなんか結構はたから見ると無礼失礼な言葉だと思うんですけど、みんなが笑っていたというのが、なんかその笑いの裏には、なんか違う思いがあるんじゃないかと思ったりして、それでさらに、なんか…本当に自分が嫌になってしまう感じでしたね。</p>	<p>C1：ここ（先輩との話）は、結構、核心というか、えぐっている、現在進行形のことです、すごいこう、ばっちし返してくれたんですけど、怖かった（中略）何か少しこら辺の怖さから、少しこう、逃げではないんですけど、（中略）何か、具体的な話をしたのに、具体的な（先輩との）話から、抽象的な（みんなが笑っていた裏には何か違う思いがあるのではという）話に逃げてるなって、今聞くとと思います。</p> <p>Q：振り返るということは、その時に意識したわけではない。</p> <p>C1：そうだと思います。わりとおどおどしたというか、感じの中で出てきた言葉なんですけど。</p>

(4)-2 《話を避ける》の発言例

「ばっちし返してくれたんですけど、怖かった」〈話すことに恐れを抱く〉

「具体的な話しかから、抽象的な話に逃げてるなって」〈感情を回避的に抑制する〉

「傷から離れて感情的な揺らぎがここら辺からなくなっている」〈感情を回避的に抑制する〉

「つかえつかえ話していた印象があるんですけどここは割とつらつらと」〈感情を回避的に抑制する〉

3-2) ステップ2：カテゴリの精緻化

ステップ1では臨床心理学を専攻し、実習としてロールプレイに参加した大学院生を協力者とした。このロールプレイはカウンセラーとしての訓練のために行うものである。クライアント役として話すことで、クライアントに同一化しその心の動きを意識化する（鏞，1970）ことを目指す。よって、カウンセリングスキルを向上させたいという意欲が、ロールプレイで話すことにおける主要な動機付けとなっていることが想定される。一方、一般のカウンセリングにおいては、問題解決・理解などを求める気持が、クライアントの話す気持を動機づける。このような違いを考慮し、ステップ2では、新たな分析対象として、試行カウンセリングのクライアント募集に応募した一般の学生（C1.7～10）をクライアントとして追加した。この理論サンプリングを通し、ステップ1で得られた初期カテゴリの精緻化を目指した。分析手順はステップ1と同様とした。その結果、《面接の場の理解の進展》・《カウンセラー・クライアント関係の進展》という2つの上位カテゴリが追加された。以下、各カテゴリについて説明する。

(1) 《面接の場の理解の進展》

《面接の場の理解の進展》は、〈面接の場での戸惑い〉と〈面接の場の理解〉という2つの下位カテゴリからなる。面接の場に馴染みのないクライアントが、自分なりに面接とはどのようなことをする場であるかを理解するようになるというクライアントの変化を示すカテゴリである。馴れない面接の場に、当初クライアントは何をどう話せばよいか戸惑う。しかし日常会話との比較などを通し、普段は話さない「つまんだ話」をする場であることなどにクライアントは気づいていく。提示する場面は、「負い目や

貸し借りがない」分、涙を遠慮なく流せるといった場の特徴をクライアントが理解した箇所である。

(1)-1 面接場面と IPR インタビューの抜粋

クライアントは、部活の試合が近いにもかかわらず、練習をしんどいと感じていた。それを周りには言えずにいたという話をするうちに涙が出てきた場面。

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1：そうですね、・・後は何か、試合って他の人にとっても大事なものなので、（練習を見てもらうことを）頼むのためらわれたり、あと何か、しんどくてできないんですってなかなか言いづらくって。</p> <p>Co：言いづらい。その言いづらさは、どうして言いづらいんでしょうねえ。</p> <p>C1：・・・そうですね、やっぱ何か、他の人がいっぱい指導を頼んだりしているのを見ると遠慮してしまう、ほぼ先輩は（自分の練習が）できなくなってしまうので。</p> <p>Co：先輩は4年生ですか</p> <p>C1：はい、うちは4年生までなので、珍しいんですけど（涙する）。</p>	<p>Q：あの、ここら辺で、すごくこう泣きたくても泣けなかったっていう話を、最後にもしてくれてたんだけど、そうですねえ、カウンセリングの場で、これまでそうだったのが、涙が出たというのはどんなことがあると思いますか？</p> <p>C1：多分、多分何か、泣いていいよって言われたのが、1個原因だと思うんですけど、何か、はい、多分なんか、何の負い目とか貸し借りとかない人なので、はい、泣いて迷惑をかけ（ない）・・・でもかかっているのかもしれないんですけど。</p> <p>Q：ああ、いやいや、そんなことない。</p>

(1)-2 <面接の場の理解の進展>の発言例

<p>「多分なんか、何の負い目とか貸し借りとかない人なので、泣いても迷惑かけ（ない）、でもかかっているのかもしれないんですけど」<面接の場の理解></p> <p>「最初の頃、面接を受けている序盤の時って何か、（中略）どう話したらいいのかなあっていう感じで、話してる感じだったんですけど」<面接の場での戸惑い></p> <p>「友達とかでなまじ知っている人よりも話はしやすくって」<面接の場の理解></p> <p>「友達同士の会話ならそんなつつこんだ話はしない」<面接の場の理解></p>

(2) <カウンセラー・クライアント関係の進展>

<カウンセラー・クライアント関係の進展>は、<カウンセラーとの心理的距離感>と<カウンセラーとの心理的距離の接近>という下位カテゴリからなる。面接を通し、クライアントとカウンセラーが、心理的に近づいていくというクライアントの変化を

表すカテゴリである。初対面のカウンセラーに対しても、「自分の心を開いて」いたとクライアントは感じていた。その理由として「雑談」が良かったと振り返っていた。一見、課題とは異なる周辺的なテーマであっても、それがカウンセラー・クライアント関係の進展させていた。それだけでなく、クライアントの意識下にあった課題を引き出すことにもつながっていた。以下に具体例を示す。

(2)-1 面接場面の抜粋と IPR インタビュー

カウンセラーに対しクライアントが話し始める。初めは「こんなことでいいんですか」と何を話せばいいか戸惑いつつも、徐々に自分の話したいことに近づいていく。それに伴い、カウンセラーに対し心を開いていたとクライアント感じた場面。

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1：卒業にも関わるテストがあるんですけど、その一方で、最後夏休みなのでちょっと好きなことやりたいなあとか（笑）でちょっと自転車旅行したりとか、結構自転車昔っから好きなので、そういうの充実していたなあかと思ってますよ。こんなこと（話）でもいいんですかね？カウンセリングとかは。</p> <p>Co：ほう、えっと、そうですね、カウンセリングっていうのは基本的に、多い場合、ま、そのクライアントさんというか、そのお話をしに来てくださる方が、まあ、取り組みたい、まあ課題であったりとか、そういうことを、まあこうやって取り組んでいくっていうのが一般的なんですよ、うん。</p> <p>C1：そんなかで言うと、結構僕は今、就職も決まって、安心、結構自分の中ではいい時期、いい時間だと思うんですけど、若干その不安なのが、その卒業できるのかっていうのと・・・</p> <p>Co：っていうのと・・・</p> <p>C1：っていうのと、就職先で、英語を頑張ってくださいって、結構英語を頑張らないといけないので、そういったプレッシャーみたいなを感じるっていうのが、自分の中の今一番大きな、何て言うんですかねえ、</p> <p>Co：卒業に関するプレッシャーと、就職に関するプレッシャーの2つが今・・・</p> <p>C1：そうですね、はい。現段階での。</p>	<p>C1：これも結構、何て言うか、やっと自分の考えている何か、心のとっかかりみたいのを話せている感じはありましたね。</p> <p>Q：そうですね、結構長めに話しをされていて、そうかなあと。</p> <p>C1：そうですね、あとこの時はまた、何となくというんですかね、ちゃんと自分の心を開いて話していたという感じがありますね。</p> <p>Q：えっと、どうしてかな？</p> <p>C1：どうしてですかね、最初は無駄話（自転車旅行の話）している時間があったと思うんですけど、その何か無駄話が意外と良かった気がして。最初僕、自分でもこういう話しをしようと思っていなかったんですけど、まあ、話しているうちに、何て言うか、自分でも、自分の中のプレッシャーって何なのかなって考えているうちに、卒業と就職って、〇〇さん、まとめてくれていたと思うんですけど、で、これに関して、卒業と就職って2つのワードが自分の中にあったときに、結構、振り返ってるんですよ、ちょっと、ちょっとだけ、その時に、あ、自分の中で大きかったなあって。</p>

(2)-2 《カウンセラー・クライアント関係の進展》の発言例

「ちゃんと自分の心を開いて話していたという感じがありますね」＜カウンセラーとの心理的距離の接近＞

「ちょっとびっくり，びっくりじゃないですけど，ドキドキしてしまって，その緊張を引きずって来ている感じ」＜カウンセラーとの心理的距離感＞

「ああ，カウンセラーの人ってこういう人なんだっていう感じでしたね，何かまあ，声色が優しい感じの人だなあと」＜カウンセラーとの心理的距離の接近＞

3-3) ステップ3：カテゴリの整理・再編

研究1における分析の観点には，面接においてクライアントの話がどのように深まる／深まらないのか，そのプロセスをクライアントの主観的体験から描き出すことであった。この観点から，得られたカテゴリを，話が深まる／深まらないという区分で見直し整理・再編した。最終的に，6つの上位カテゴリを得た。表5-3に，上位カテゴリと下位カテゴリの抜粋を示す。

表 5-3 ステップ 1~3 の分析で得られたカテゴリ

区分	上位カテゴリ	主な下位カテゴリ	内容
話が深まる	《話が進む》	<伝わっている感じがする> <自発的に話す> <受け入れられている感じがする>	カウンセラーとの良好な相互作用の中で、問題を整理することや、多面的に検討することを通し、問題理解が進むというクライアントの体験。
	《カウンセラー・クライアント関係の進展》	<カウンセラーとの心理的距離感> <カウンセラーとの心理的距離の接近>	初対面のカウンセラーに対し、面接で話す中で、徐々に心理的に近づいていくというクライアントの変化。
	《面接の場の理解の進展》	<面接の場での戸惑い> <面接の場の理解>	面接の場が、どのような所であるかを、クライアントが自分なりに理解するようになるというクライアントの変化。
話が深まらない	《話が滞る》	<うまく伝わらない感じがする> <言い直す/話を戻す>	カウンセラーに対しうまく自分の気持ちや感情が伝わらず、解決しないという気持ちを強めたまま、話がついてしまうというクライアントの体験。
	《話を合わせる》	<とりあえず肯定する> <話をつなごうと努力する>	カウンセラーに対する遠慮や気遣いから、話すテーマが、自分が話したいものとは変わってしまうというクライアントの体験。
	《話を避ける》	<感情を拾ってもらえない> <話すことに恐れを抱く> <感情を回避的に抑制する>	話すことに伴う感情の揺らぎに、脅かされるような感じを受けたために、自らその話題を避け、知的に処理しようとするクライアントの体験。

第 4 節：考察

研究 1 は、話の深まり／深まりのなさという観点から、面接内でのクライアントの主観的体験を明らかにすることを目的とした。この際、話の深まりに注目しつつも、話が深まることを前提にインタビューを行いクライアントの発言を誘導することのないよう配慮した。その結果、話の深まりだけでない幅広いクライアントの主観的体験を描き出すことができた。得られたカテゴリは、話が深まることに関するもの《話が進む》・《面接の場の理解の進展》・《カウンセラー・クライアント関係の進展》と、深まらないことに関するもの《話が滞る》・《話を合わせる》・《話を避ける》に分けられた。これらに関し、まず、先行研究との関係をまとめる。次に、非臨床群で得られた知見を臨床群にも適応可能かについて考察する。最後に研究 1 の意義について述べる。

4-1) 先行研究との関係

先行研究では、面接におけるクライアントの主観的体験を、クライアントにとって役

に立つ出来事という観点から明らかにしている。これは、研究1における観点の一つである話の深まりと類似の概念と言える。研究1では、話が深まることに関するカテゴリとして、《話が進む》・《面接の場の理解の進展》・《カウンセラー・クライアント関係の進展》を得た。一方、Elliott (1986) は役に立った出来事として、課題と対人関係という2つのクラスターを見出した。これらを比較分類すると、《話が進む》は、課題に関するクラスターに当たる。また、《カウンセラー・クライアント関係の進展》は、対人関係に関するクラスターに当たる。さらに、本研究では話の深まりに関するカテゴリだけでなく、話が深まらないことに関するカテゴリも得た。《話が滞る》・《話を合わせる》・《話を避ける》である。《話が滞る》とは、クライアントの話がカウンセラーに対しうまく伝わらず、あきらめの気持ちを抱くという体験に関するカテゴリであった。岩壁 (2005) は、初回面接を受けたクライアントの中には、カウンセラーに落胆や憤りを感じ、面接の継続を<保留>する者がいることが明らかにした。本研究でも同様にあきらめといったネガティブな感情を体験していることが明らかになった。しかし、先行研究と異なり憤りまでは見られなかった。その理由として以下の2つが考えられる。第1は、カウンセラーに対するネガティブな感情を表明することへのためらいである。そこには「カウンセラーを批判することの恐れ」(Rennie, 1994a) が関係している可能性がある。第2に、協力者が非臨床群であったため、面接に対する期待が、臨床群ほど高くなかった可能性も考えられる。しかし、このようなネガティブな感情体験が研究1でも見出された点は、臨床実践における示唆となりうるのではないだろうか。例えば、表明されない不満が存在する可能性を常に心に留め面接を行うことが、ドロップアウト防止などに役立つのではないかと考えられる。

次に《話を合わせる》は、カウンセラーに対する遠慮や気遣いから、カウンセラーに話を合わせるという内容を指す。ここには、カウンセラーにクライアントが従うという受動的関係が影響を与えていると考えられる。これに類似した概念として「追従」

(Rennie, 1994b) がある。追従関係にある場合、クライアントはカウンセラーに対し懸念や批判の気持ちを抱いた場合にも、表明されないか、されても間接的なものとなる(Rennie, 1994b)。研究1においても、クライアントの混乱や葛藤は、カウンセラーに対し直接的に表現されることはなかった。しかし、そのようなクライアントの「追従」を間接的に示すサインとして、<とりあえず肯定する>という反応があることが、研究

1により明らかになった。このカテゴリが意味するのは、クライアントの肯定の言葉が必ずしも同意の意思を示すものではないということである。むしろカウンセラーのずれた応答に対し、何とか再度自分の話へと戻そうとクライアントが考えを巡らす時間を得るために、生返事をする場合があることを示す。この点からは、クライアントとの間で「＜読み（仮説）＞の適切さ」を繰り返し確かめる（下山，2000）ことが重要であることが分かる。初心者のカウンセラーは、自分の言葉をクライアントが肯定してくれると、それだけで安心してしまうことも多いだろう。しかし、クライアントが肯定の返事をしたにもかかわらず、その後続く言葉がカウンセラーの発言を正すものではないかに注意を払う必要があることが、分析の結果から示唆された。それにより、表明されないクライアントとのズレを調整できる可能性があると考えられる。

最後に、《話を避ける》とは、話の抽象度を上げることで、自ら持ち出した話題を避けることを示すカテゴリである。クライアントは、＜感情を回避的に抑制する＞ことにより、話すことで生じた気持ちの揺らぎを知的に処理していた。しかし、そこにカウンセラーに対する批判的な感情は伴っていなかった。よって具体的な話をすることを避けてはいるものの、カウンセラーに対する「抵抗」（Rennie, 1994b）とは異なるものであると考えられる。その理由として、《話を避ける》には、クライアントにとってプラスの要素があることが挙げられる。それは、クライアントが自己開示を意図的に制限することで、感情的に楽になるという効果である。このことは、感情に直面する恐れから逃れたクライアントが、滑らかに話すようになったことから示された。これは防衛機制が適度に働いた結果と言える。適度な機制により、人は日常の精神的健康を維持している（玉瀬，2004）。一方、それは問題の現実的な解決をもたらすものではない（下田，2000）。分析の結果から、クライアントの語りが一見滑らかであっても、必ずしもそれが問題解決に向けた動きでない場合があることが示された。臨床実践においてもクライアントが話をするだけでなく、それが問題の焦点化へとつながっているか、継続的に評価しておく必要があると考えられる。

4-2) 非臨床群で得られた知見の臨床群への適応について

研究1では、カウンセラーの意図や文脈を推し量りながら、クライアントはどう反応するかを選択することが明らかになった。そこには、コミュニケーションにおけるメタ

的な意識が働いていた。それは研究対象となったクライアントが非臨床群であるから、すなわち、心理的に健康であるからこそ成立したものなのだろうか。次項 4-3)にて臨床的意義を述べる前に、非臨床群から得られた知見が、果たして臨床群にも当てはまるかについて考察したい。筆者は次のような例から、非臨床群で見られた上記メタコミュニケーションは、臨床群のクライアントにおいても起こりうると思う。例えば、うつ病患者の特性の1つとして、周囲に気づかい過ぎ、自分の気持ちを抑え込んでも他人に合わせようとするといったものがある。このような臨床群における心的特性は、非臨床群の《話を合わせる》の行き過ぎた状態であると言える。すなわち非臨床群の《話を合わせる》の連続線上に、臨床群の《話を合わせる》があることが想定される。また、社交不安障害は、対人場面での過度の不安や回避を特徴とする。このような特徴は、対人場面での恐怖や抑制から生じる《話を避ける》と類似している。よって、《話を避ける》についても、非臨床群だけでなく、臨床群にも当てはまると考えられる。このように、非臨床群で見られたメタコミュニケーションは臨床群でも起こりうるだろう。ただし、その程度が時に過度となることが、非臨床群との違いではないか。この点についてはさらなる検証が必要であるものの臨床群と重なる部分もあると考える。そこで事項に意義を述べることにする。

4-3) 研究1の意義

初回面接のプロセスについて、クライアントの視点から検討した研究の1意義は、①研究の視点と方法、②臨床的意義という2つの観点から述べることができる。

まず、①研究の視点と方法という観点からは次の2点を挙げることができる。第1に、面接において話が深まる過程を、クライアントの主観的体験から明らかにしたことである。クライアントは、面接の変容過程における主要な要因である。それにもかかわらず、国内において、面接における体験をクライアントのインタビューデータから明らかにした研究は少ない。研究1では、試行カウンセリングを受けたクライアントにインタビューをすることで、クライアントに直接尋ねなければ得ることのできない貴重なデータを得ることができた。ここから、クライアントがカウンセラーとの相互作用の中で、話が深まる場合と、深まらない場合があることを明らかにした。また、面接場面では直接カウンセラーに表明されることのない、クライアントの不満や戸惑いがあることも明らか

にした。これらは、カウンセラーや研究者の視点から面接過程を検討することによって得ることのできない知見であり、クライアントの視点から検討した本研究の意義であると言えるだろう。2点目は、IPR インタビューを用いたプロセス研究を採用した点である。本手法を用い、面接を録音／録画した場面をクライアントと研究者が共に振り返った。これにより単なる回想と比べ、よりその場の体験に近い語りをクライアントから得ることができた。次に②臨床的意義としては、初回面接における話の深まりのプロセスに、《カウンセラー・クライアント関係の進展》や、《面接の場の理解の進展》が寄与していることを明らかにしたことが挙げられる。臨床的意義を特に強調できるのは、《面接の場の理解の進展》に関してであろう。本研究の結果、クライアントが面接の場を理解することは、話が深まることに寄与していることが明らかになった。これは、臨床心理学の専門的知識を有しないクライアントから得られたカテゴリである。そのため、一般のクライアントの体験により近いものであると言える。研究1の結果から次の2つが示唆された。第1が、クライアントが面接の場をどのように理解しているのかに留意する必要性である。なぜならば、クライアントは面接で話す中で、その場がどのような特徴をもつのか自分なりの理解を形成する。そしてそれがクライアントの話が深まることに寄与していたためである。つまり面接にプラスに働いていたと考えられるためである。第2は、クライアントの理解をカウンセラーとの間で共有する必要性である。なぜならば、そのような理解は、クライアントの中で暗黙裏に作られ、それがカウンセラーと共有されることはない。それゆえ、カウンセラー・クライアント間で不一致が生じた場合にも、それが明らかになることはないままに、面接が進展していく可能性があるためである。つまり、面接にマイナスに働く可能性があるためである。例えば、カウンセラーは面接室で話を聞いてはくれるが、実際に困っている現場に出向いてはくれないという不満をクライアントが抱く場合などが考えられる。面接は、個人の内面を社会的コンテキストから切り離し扱うという閉鎖的構造（下山，2000）を持つ。しかしこのカウンセラーにとって自明の構造が、クライアントにとっては限界に見えるかもしれない。そしてこのような認識の不一致が、言葉にされないままに面接が中断する可能性が考えられる。従来、構造の重要性はカウンセラーの立場から、その設定・遵守といった観点で論じられることが多かった。それに対し、本研究はクライアントの主観的体験から、構造を共有することの重要性を見出した。この点も研究1の意義と言えるだろう。

第6章 試行カウンセリングで話が深まるプロセス –深まらない場合との比較から– (研究2)

第1節：問題と目的

1-1) はじめに

面接過程をクライアントの主観的体験から分析する観点には様々ある。その1つが話の内容に注目するものである (Elliott, 1991)。面接の主要アプローチは、クライアントの話が深まっていく過程自体に治療的効果があるとする。そこで第5章研究1では、試行カウンセリングにおいて話が深まるという出来事が、クライアントにとってどのような体験であるのかに注目した。ただし、話が深まることを前提とすることのないよう、話が深まらない場合にも注目した。その際、話の深まり／深まりのなさを「カウンセリングで話すという行為及び話す内容が、クライアントの主観的に意味あるものに変容する／変容しない過程」と定義した。そして、ロールプレイ／試行カウンセリングを受けたクライアントにインタビューを行い、その主観的体験を探索的に検討した。その結果、次のカテゴリが抽出された。まず、話が深まることに関するものとして、《話が進む》・《カウンセラー・クライアント関係の進展》・《面接の場の理解の進展》を得た。一方、深まらないことに関するものとして《話が滞る》・《話を合わせる》・《話を避ける》を得た。

このロールプレイ／試行カウンセリングは、下山 (2000) を参考に「クライアントの話を共感的に聴くことを基本とし、介入等を行わない」という設定で行なわれた。このように 共通の設定下で行なわれたにもかかわらず、話が深まったと感じるクライアントと、そうでないクライアントがいることが明らかになった。しかし、その違いがどこから生まれるものか、そのプロセスについては、研究1では十分に検討されていない。面接プロセスを検討するための問いとして Elliott (2008) は、「何が」と、「どのように」という観点を挙げる。これに当てはめると、クライアントの話が深まる／深まらない体験として「何が」あるかは、研究1によりカテゴリとして抽出された。しかし、それらのカテゴリが「どのように」関連しているのかは明らかでない。面接内において話が深まるというプロセスは、面接過程の段階問わずクライアントの問題解決にとって大切なものである。よって、そのプロセスを詳細に検討することは意義があると思われる。

1-2) 研究 2 の目的

以上を踏まえ、研究 2 では次の 2 点をクライアントの主観的体験から探索的に捉えることを目的とした。第 1 は、面接内においてクライアントの話がどのように深まるか、そのプロセスについてである。第 2 は、話が深まる場合と、深まらない場合との間にどのようなプロセスの違いがあるのかである。それにより臨床的示唆を得ることを目指した。

第 2 節：方法

2-1) 分析データ

話が深まる／深まらないに至るプロセス、話が深まる場合と深まらない場合の違いを明らかにするため、研究 2 では、研究 1 で行った試行カウンセリングから得られたカテゴリの関連に注目した。研究 2 の基礎となるものであるため、カテゴリとその説明を再掲する（表 6-1）。

表 6-1 研究 1 で得られたカテゴリ（再掲）

区分	上位カテゴリ	主な下位カテゴリ	内容
話が深まる	《話が進む》	<伝わっている感じがする> <自発的に話す> <受け入れられている感じがする>	カウンセラーとの良好な相互作用の中で、問題を整理することや、多面的に検討することを通し、問題理解が進むというクライアントの体験。
	《カウンセラー・クライアント関係の進展》	<カウンセラーとの心理的距離感> <カウンセラーとの心理的距離の接近>	初対面のカウンセラーに対し、面接で話す中で、徐々に心理的に近づいていくというクライアントの変化。
	《面接の場の理解の進展》	<面接の場での戸惑い> <面接の場の理解>	面接の場が、どのような所であるかを、クライアントが自分なりに理解するようになるというクライアントの変化。
話が深まらない	《話が滞る》	<うまく伝わらない感じがする> <言い直す／話を戻す>	カウンセラーに対しうまく自分の気持ちや感情が伝わらず、解決しないという気持ちを強めたまま、話がついてしまうというクライアントの体験。
	《話を合わせる》	<とりあえず肯定する> <話をつなごうと努力する>	カウンセラーに対する遠慮や気遣いから、話すテーマが、自分が話したいものとは変わってしまうというクライアントの体験。
	《話を避ける》	<感情を拾ってもらえない> <話すことに恐れを抱く> <感情を回避的に抑制する>	話すことに伴う感情の揺らぎに、脅かされるような感じを受けたために、自らその話題を避け、知的に処理しようとするクライアントの体験。

2-2) 分析法の選択

(1) ケース・マトリックス

分析は、まずカテゴリの関係を整理するためケース・マトリックス（佐藤，2008；岩壁，2010）を援用した。ケース・マトリックスとは、縦か横に事例を入れ、そしてもう一方に比較の軸を入れた表である（岩壁，2010）。研究2では、事例すなわちクライアントを横1行目に、カテゴリを縦1列目においた比較表を作成した。（図6-1）。このマトリックスを縦軸に分析することにより、個々のクライアントの特徴理解を目指した。同時に、横軸に分析することにより、クライアント間の共通点・相違点を明確化することを試みた。

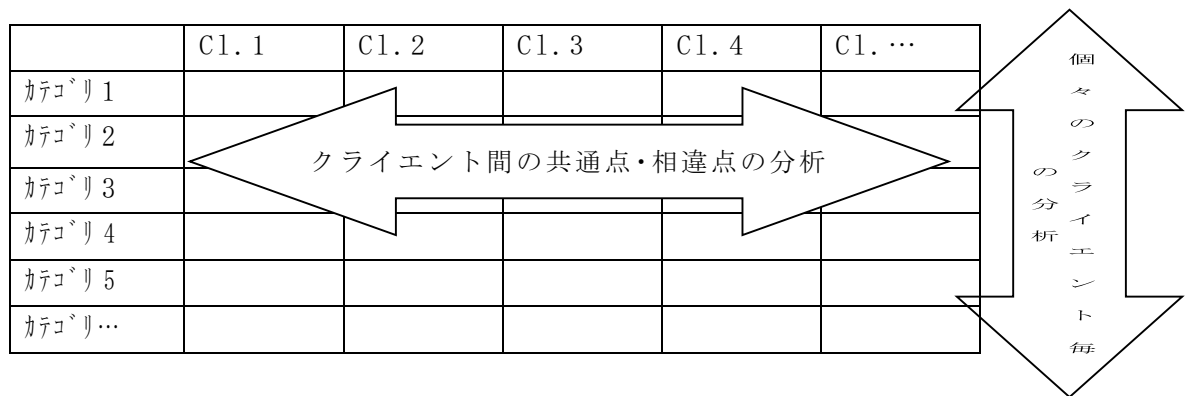


図 6-1 ケース・マトリックスに基づく分析のイメージ

(佐藤, 2008 を参考に作成)

(2) 事例比較法

また、事例比較法(The case Comparison method;Iwakabe, 2011)も参考にした。ケース比較法とは、同じような状況下で行なわれた事例の成功例と失敗例を比較評価するものである。それによりクライアントの変化に関して深く理解することが可能とされる(Iwakabe, 2011)。研究 2 では話が深まる場合と、深まらない場合とを比較した。

第 3 節：データ分析

3-1) 分析のステップ

データ分析は 2 つの段階を踏んだ。まずステップ 1 としてロールプレイに参加したクライアント (Cl. 1~6) 6 名を分析対象とした。続くステップ 2 でステップ 1 とは属性の異なるクライアント (Cl. 7~10) 4 名を追加し、分析結果の発展を試みた。文章中、クライアントの発言は「」で示す。また、カテゴリに関しては上位カテゴリを《 》、下位カテゴリを< >、サブカテゴリを [] で示す。

3-2) クライアントの分類

カテゴリの比較に先立ち、分析対象となったクライアント (Cl. 1~10) の体験が、《 話が進む 》・《 話が滞る 》・《 話を合わせる 》・《 話を避ける 》のどのカテゴリに近いかを検討し分類した。分類は次の 2 つの手順を踏んだ。まず第 1 に、ケース・マトリックス (佐藤 2008) を援用し、各クライアントと、得られたカテゴリの対応表 (以下、対応表と略記) を作成した。第 2 に、この対応表に基づきサブカテゴリの数や内容を検討し、《 話が進む 》・《 話が滞る 》・《 話を合わせる 》・《 話を避ける 》のいずれかに

クライアントを分類した。例えば、C1.1は《話を合わせる》に関わるサブカテゴリの数が多くみられたため、《話を合わせる》に分類した。C1.2, C1.4, C1.10は、《話が滞る》に関わるサブカテゴリの数が多かったが、《話を合わせる》に関わるサブカテゴリにもあった。そこで、面接内容やインタビューの発言に立ち戻った。その中に、「(Coの伝え返しが)外れていないから、そうですねって言うんですよね、(でも)何かそこから話ができなくなってしまったのかなあとと思います」という発言があった。そこからは、《話を合わせる》ものの、結局は話ができなくなったという体験が窺えた。これらを総合的に勘案したうえで、C1.2, C1.4, C1.10は《話が滞る》に分類した。同様の手順で、C1.5を《話を避ける》に分類した。また、C1.3, C1.6, C1.7, C1.8, C1.9を《話が進む》に分類した。分類と実際の面接における体験との間に乖離がないかについて、クライアントC1.1～C1.6に分類結果をフィードバックし、確認を受けた。

3-3) データ分析の過程：ステップ1

(1) カテゴリの共通点・相違点の比較

分析は対応表に基づき行った。対応表の中で特に注目した下位カテゴリとサブカテゴリを表6-2に抜粋した。表6-2の矢印は、分析にあたり注目したカテゴリを指し示す。矢印内の数字は、項目番号と対応している。例えば、3-3)(1)-1と記載された矢印は、「3-3)(1)-1 4つのカテゴリの共通点・相違点の比較」の項にて注目したカテゴリを指し示す。なお、表6-2には続くステップ2で注目するカテゴリも記載してある。

表 6-2 対応表によるカテゴリの共通点・相違点の比較（ステップ 1, 2）

＜上位カテゴリ＞	＜下位カテゴリ＞	（サブカテゴリ）	CI.1	CI.2	CI.4	CI.5	CI.3	CI.6	CI.7	CI.8	CI.9	CI.10	
			話を合わせる	話が滞る	話が滞る	話を避ける	話が進む	話が進む	話が進む	話が進む	話が進む	話が進む	話が滞る
話を合わせる	とりあえず肯定する	とりあえず肯定する	0	0	0								
	話をつなごうと努力する	話をつなげようとする努力	0	0	0		0						
		Coの言葉から連想する努力	0	0	0								
		伝えるための工夫	0	0								0	
話が滞る	うまく伝わらない感じがする	うまく伝わらない感	0	0		0			0			0	
		意に添わない伝	0	0	0						0	0	
		3-3) (1)-1											
	言い直す/話を戻す	言い直す/話を戻す		0	0								0
		話ができなくなる	話がつきる			0							
			話ができなくなる	0	0	0							
			話題を見失う		0								
Coの出方を待つ		0	0										
話が進む	伝わっている感じがする	伝わっている感じ				0	0	0		0			
		意に添った要約					0	0	0	0	0		
		じっくり伝える伝え返し	0			0	0	0			0		
	自発的に話す	積極的に話す				0	0	0	0	0	0	0	
		話に関するイメージの想起				0	0	0	0	0			
		具体的/詳細な語りへの変化				0	0	0		0			
		受け入れられている感じがする	Coの積極的関心の知覚					0					
	受け入れられているような態度		0				0			0			
	聞いてもらう体験		0				0	0	0	0			
話を避ける	感情を捨ててもらえない	感情を捨てられない体験		0		0							
		表面的なCoの返し				0							
	話すことに恐れを抱く	感情体験への恐れ				0							
		話すことへの恐れ				0							
		Coの反応を気にする				0							
		感情を回避的に抑制する	感情を回避的に抑制する				0						
カウンセラー・クライアント関係の進展	カウンセラーとの心理的距離感	初対面							0	0	0	0	
		戸惑い・不安・緊張							0	0	0		
	カウンセラーとの心理的距離の接近	Coの人となりを知る							0	0	0		
		雑談による関係形成							0	0	0		
		心を開く							0	0	0		
	信頼感みたいな感じ							0	0	0			
面接の場の理解の進展	面接の場での戸惑い	Coの質問に戸惑う							0	0	0		
		曖昧な目標共有									0	0	
		こんな話でいいのかわからない不安									0	0	
		何をするとどこか分からない									0	0	
		何をどう話せばよいか戸惑う							0	0	0	0	
		出だしの緊張							0	0	0	0	
		言語化することの難しさ							0	0	0	0	
	面接の場の理解	話し手としての役割の理解								0	0	0	
		自分の話が中心の場								0	0	0	
		知らない人に話すメリット								0	0	0	
		つつこんだ話をする場								0	0	0	
		曖昧にしている部分を明確にする場								0	0	0	
										0	0	0	

(1)-1 4つのカテゴリの共通点・相違点の比較

第1ステップとして、C1.1~7に関し、《話を合わせる》・《話が滞る》・《話が進む》・《話を避ける》の全てを比較した。その結果、《話を合わせる》、《話が滞る》に分類されたクライアント（C1.1, C1.2, C1.4）は、[意に添わない伝え返し]などによって、<うまく伝わらない感じがする>という体験していることが明らかになった。そのため<言い直す/話を戻す>ことを試み<話をつなごうと努力する>が、結果的に<話ができなくなる>クライアントもいた。以下にクライアントの発言例を引用する。

「自分の言ったことが理解されていないというか、分かりにくいかなあとと思って（C1.1）」<うまく伝わらない感じがする>

「もったいないっていう感覚の方が強かったので、言い直した（C1.4）」<言い直す/話を戻す>

「ここでは結局言葉に出来なかったんですね、感じた気持ちを（C1.2）」<話ができなくなる>

(1)-2 《話が進む》と《話を避ける》の共通点の比較

以上のように《話を合わせる》、《話が滞る》に分類されたクライアントは、話を進めていく上で何らかのネガティブな体験をしていた。それに対し、《話が進む》C1.3, 6と《話を避ける》C1.5は、そのような問題が比較的少なかった。そこで、C1.3, 6とC1.5の共通点に注目した。その結果、《話が進む》や《話を避ける》クライアントは、カウンセラーに自分の話が<伝わっている感じがする>という体験をしていた。《話が滞る》や《話を合わせる》クライアントが、伝わらないと感じているのとは対照的であった。また<自発的に話す>ことも共通した。ここからは<伝わっている感じがする>結果、<自発的に話す>気持ちが出てきたことが窺えた。

「自分が思っていた感じとやっぱりぴたっとくる言葉で（C1.3）」<伝わっている感じがする>

「今まではわりと、抽象的、ある程度距離をおいて話せていた感じがするんですけど、ここからわりとすごいこう、えぐるようなものをこう出して、自分の中で出していた（C1.5）」<自発的に話す>

(1)-3 《話が進む》と《話を避ける》の相違点の比較

以上のように《話が進む》、《話を避ける》とも、自分の話がカウンセラーに伝わっている感じを受け話が促されていた。しかし、一方はさらに話を進め、他方は話を避けるという大きな違いがあった。そこで両者の相違点に注目した。その結果、次のような違いが明らかになった。まず《話が進む》クライアントは、カウンセラーから＜受け入れられている感じがする＞ことを体験し、自発的に話すようになっていった。

「よく分かってくれてるっていう気持ちでいっぱいあたりです。すごかった。(Cl. 3)」
＜受け入れられていれる感じがする＞

「で、それを、もっと追加して説明したいという気持ちで。(Cl. 6)」＜自発的に話す＞

一方、《話を避ける》クライアントは、話が伝わっていると感じると同時に、理解されることに対する怖さを感じていた。それでも怖さを抑え話しを続けた。しかし、それがカウンセラーに＜受け入れられている感じがする＞ことはなく、むしろ＜感情を捨ててもらえない＞体験をした。そのため感情を抑制し《話を避ける》ようになることが分かった。

「ばっちし（伝え）返してくれたのだけど、理解される、されたことに対するちょっとした怖さみたいな(Cl. 5)」＜話すことに恐れを抱く＞

「なんて言うんでしょうかね、（自分の気持ちを）流さないでっていうのじゃないんですけど、もう少し肉のついてる話(Cl. 5)」＜感情を捨ててもらえない＞

「（心の）傷から離れて（話すことで）、感情的な揺らぎがここら辺からなくなっている(Cl. 5)」＜感情を回避的に抑制する＞

(2) ステップ1での分析のまとめ

ステップ1での分析の結果、面接初期において話が深まることは次のような流れであることが明らかになった。まず、クライアントは自分の話が＜伝わっている感じがする＞ことにより＜自発的に話す＞ようになった。しかし、それだけでは話が深まることはなかった。伝わることに加え、＜受け入れられている感じがする＞ことも必要であった。それにより、「自分の気持ちを出したとしても、受け取ってもらえる」という感覚をさ

らにクライアントは強めた。それが自発的に話すことへとつながった。すなわち＜自発的に話す＞ことと＜受け入れられている感じがする＞ことの間には相乗作用があった。

一方、面接において話が深まらないということは次のような流れであった。まず、自分の話が＜うまく伝わらない感じがする＞と思ったクライアントは、言い直したり話を戻したりした。しかし、結局伝わらず話ができなくなっていた。また、伝わったとしても話が深まらない時があった。それは、話が伝わることで自発的な話が促されるものの、それがカウンセラーに受け入れられている感じはせず、＜話すことに恐れを抱く＞場合であった。そのような体験をしたクライアントは、＜感情を回避的に抑制する＞ようになり、結果的に話は深まらなかった。そこには＜感情を捨ててもらえない＞という体験が関わっていた。

3-4) データ分析の過程：ステップ2ーステップ1 分析結果の発展

(1) 分析対象の追加

ステップ1では臨床心理学を専攻し、実習としてロールプレイに参加した学生を対象とした。カウンセラーとの面識があったため、初回面接における出会いの要素はない。また、カウンセラーの人となりに関する発言は、はばかられた可能性もある。よって、ステップ1の対象者のみでは、面接初期において重要な要素とされる治療関係の形成について十分に検討することはできない。そこで、ステップ2では、新たな分析対象として、試行カウンセリングのクライアント募集に応募した一般の学生(C1.7~10)をクライアントとして追加した。追加した対象から得たデータは、C1.1~6と比較し、次の2つの特徴が見られた。1つは、応答の正確さなど技法的な事柄に関する言及が比較的少なかった。2点目は、カウンセラーをどんな人と感じたかや、面接とはどのような場所と思ったかなど、C1.1~6からは得られなかった発言が得られた。研究1では同様に分析対象を追加することにより、《カウンセラー・クライアント関係の進展》・《面接の場の理解の進展》という新たなカテゴリを得た。これらの特徴は、C1.1~6と比べ、より一般のクライアントの体験を反映しているためと考えられる。このような分析対象を追加することで、ステップ1で得られた結果を発展させることを目指した。表6-2から、追加した対象者がステップ1の分析結果とも適合することを確認できた。そこで、《カウンセラー・クライアント関係の進展》・《面接の場の理解の進展》の下位カテゴ

りと、《話が進む》(C1.7~9)・《話をあわせる》(C1.10)の関係を検討した。分析は、ステップ1と同じく対応表に基づき行なった。

(2) カテゴリの共通点・相違点の比較

(2)-1 《カウンセラー・クライアント関係の進展》と《話が進む》・《話が滞る》の関係の検討

まず、《カウンセラー・クライアント関係の進展》の下位カテゴリ<カウンセラーとの心理的距離感>・<カウンセラーとの心理的距離の接近>に着目し、《話が進む》クライアントと《話が滞る》クライアントの共通点・相違点を検討した。まず、<カウンセラーとの心理的距離感>については、《話が進む》クライアントと、《話が滞る》クライアントとの間に大きな違いは見られなかった。いずれも、カウンセラーと心理的距離を感じていたことが、[初対面]ゆえの緊張を感じていた。

「最初に何て言うか、(中略)カウンセラーの方と会った時は、僕自身緊張してました(C1.9)」<カウンセラーとの心理的距離感>

「その、初対面の人と話をするっていう感覚の方が強かったんですけど(C1.10)」<カウンセラーとの心理的距離感>

一方、<カウンセラーとの心理的距離の接近>については、《話が進む》クライアントと、《話が滞る》クライアントとの間に違いが見られた。《話が進む》クライアントでは、話すうちに[心を開く]など、カウンセラーとの心理的距離が近づいていたことが以下の発言から窺えた。

「話している間に、信頼関係というか、この人は信頼できる人なのかなって思った(C1.7)」<カウンセラーとの心理的距離の接近>

「『涙ぐまれてますね』『大丈夫ですよ』って言われて、じゃあいいかあって(泣くことができた)(C1.9)」<カウンセラーとの心理的距離の接近>

それに対し、《話を合わせる》クライアントでは、<カウンセラーとの心理的距離の接近>を示すサブカテゴリが見られないという違いがあった。

(2)-2 《面接の場の理解の進展》と《話が進む》・《話が滞る》の関係の検討

次に、《面接の場の理解の進展》の下位カテゴリ〈面接の場での戸惑い〉・〈面接の場の理解〉に着目し、《話が進む》クライアントと《話が滞る》クライアントの共通点・相違点について検討した。その結果、まず〈面接の場での戸惑い〉については、《話が進む》クライアントと《話を合わせる》クライアントとの間に大きな違いが見られなかった。どちらも、面接という場で「何をどう話せばよいか戸惑う」という体験をしていたことが分かった。

「面接の場では、聞かれることが多いので、どう答えていけばいいのかなあと(Cl.8)」
〈面接の場での戸惑い〉

「何か、こんな感じでいいんですかっていうのは、あります。(Cl.10)」〈面接の場での戸惑い〉

一方、〈面接の場の理解〉については、違いが見られた。《話が進む》クライアントは、面接を「つまこんだ話をする場」や「曖昧にしている部分を明確にする場」であると認識していた。ここからは、日常会話よりも、踏み込んだやりとりがなされていたことが窺えた。

「多分なんか、(カウンセラーは)何の負い目とか貸し借りとかない人なので(Cl.9)」
〈面接の場の理解〉

「友達同士の会話ならそんなつまこんだ話はしない(Cl.8)」〈面接の場の理解〉

それに対し、《話が滞る》体験をしたクライアントでは、「知らない人に話すメリット」を感じつつも、「つまこんだ話をする場」のような面接への踏み込んだ関与を示すサブカテゴリは見られなかった。その点が《話が進む》クライアントと異なる特徴であった。

(3) 面接初期のプロセスに関するカテゴリ関連図

ステップ2での分析の結果、ステップ1での結果に加え、次のことが明らかになった。

まず「話が進む」ためには、＜カウンセラーとの心理的距離の接近＞が必要であった。ただし、クライアントとカウンセラーとの関係は、始めから良好であったわけではない。面接で話すことを通し、次第に〔初対面〕の緊張がほぐれた。そして徐々に心を開き話すことが、カウンセラーとの関係を近づけた。このように話が深まる過程と「カウンセラー・クライアント関係の進展」は、互いに高め合うことが示された。また「話が進む」ためには、「面接の場の理解の進展」も必要であった。当初クライアントは＜面接の場での戸惑い＞を感じていたが、話すことを通し「どう話したらいいか」という不安が薄れた。そして徐々に日常の会話とは異なることを理解し「つつこんだ話」をするようになった。また、さらに話をすることで、「何を説明しなきゃいけないか」に思い至るようになるなど、面接の場の理解がより進んだ。このように話が深まる過程と「面接の場の理解の進展」にも相乗効果が見られた。一方、＜カウンセラーとの心理的距離感＞を抱いたままの場合や、〔知らない人に話すメリット〕を感じつつも、〔曖昧にしている部分を明確にする場〕であるなどの認識が進まない場合には、クライアントの話は深まらないことも明らかになった。以上を基に、面接初期のプロセスに関するカテゴリ関連図を示す（図 6-2）。プロセスの特徴については、考察にて述べる。

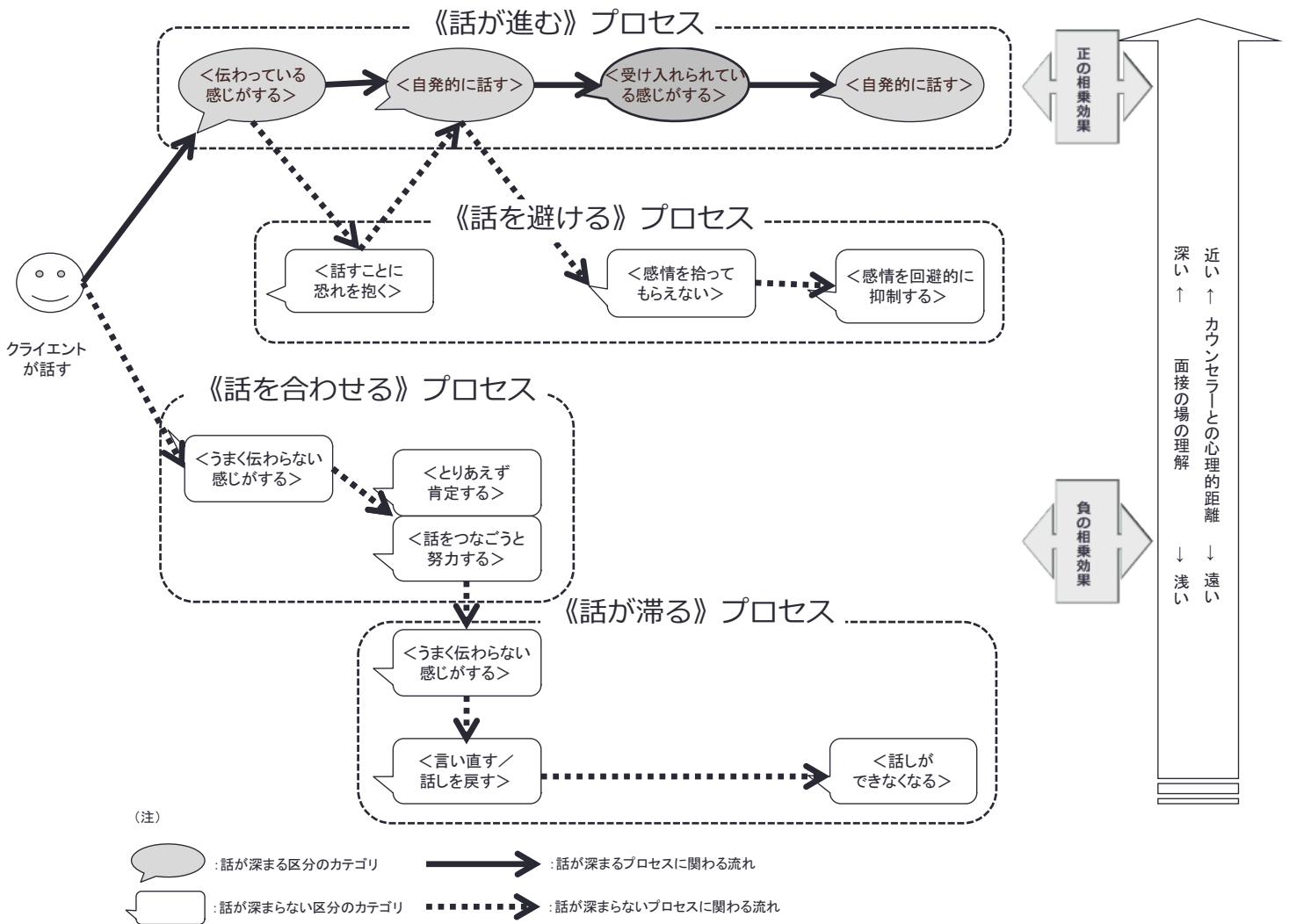


図 6-2 面接初期のプロセスに関するカテゴリ関連図

第 4 節：考察

本研究は、面接初期において話が深まるプロセスを、クライアントの主観的体験から探索的に検討することを目指した。その結果明らかになったプロセスの特徴と、話が深まる場合／深まらない場合との違いについて述べる。最後に本研究の意義、限界と今後の展望について述べる。

4-1) 面接初期において話が深まるプロセスの特徴

(1) 話が深まるプロセスの特徴

面接初期に話が深まるプロセスの特徴として次の 3 つが挙げられる。第 1 に、自分の

話がカウンセラーに伝わっているとクライアントが感じることに加え、それがカウンセラーに受け入れられているという感覚を持つことも必要であった。先行研究では、面接を促進する要素として傾聴や共感などのカウンセラーの態度があることが明らかにされている (Elliott, 2008)。研究2での分析の結果、これらの要素が単独で働くのではなく、合わせて体験されることで初めて促進的に働くことが明らかになった。

第2に、話が深まるためには、クライアントがカウンセラーとの心理的距離を徐々に近づけていくことが必要であった。また、カウンセラーとの関係が強まることは、クライアントの話が深まることへとつながっていた。治療関係は、治療期間の長短によらず、介入の効果を予測するとされる (Horvath & Symonds, 1991)。治療関係が効果へとつながる一端として、面接初期における関係進展と、話の深まりとの間に、相乗的に高め合うプロセスがあることが、研究2から示唆された。

第3に、話が深まるためには、面接への積極的関与を促すような、クライアントなりの面接に対するイメージが形成されること必要であった。そして、そのようなイメージと、話が深まることとの間には相乗効果が見られた。クライアントが面接に抱くイメージは、治療構造 (小此木, 1990) の一要素であり、内的構造と呼ばれる。先行研究によれば、面接における重要な出来事として、面接室の備品やカウンセラーの身なりなどの外的構造についてクライアントが言及することがある (Bedi et al., 2005)。研究2によればこのような外的なものだけでなく、クライアントの内的構造が、話しの深まりにおいては重要であった。

(2) 話が深まる場合と深まらない場合の違い

話が深まる場合に対し、話が深まらない場合には次の3点の特徴が見られた。第1に、クライアントは自分の話がカウンセラーに伝わっているという感覚を得られない場合、何とか話を伝えようと努力した。しかし、それでもうまくいかない場合には、話をするのをやめてしまうことがあった。〈言い直す／話を戻す〉のも、ある意味ではクライアントの自発的な語りである。カウンセラーがクライアントとのズレに気づかなければ、クライアントが多弁に語ってくれていると誤解するかもしれない。しかし、そこでのクライアントの体験は、話が深まる場合の〈自発的に話す〉とは質的に異なるものであることが、図6-1からも理解できた。

第2に、たとえ伝わったと感じたとしても、その体験がクライアントを脅かすようなものである場合、同じくクライアントは話をするのをやめてしまった。伝わった感じを得るという流れまでは、話が深まる場合と同様であった。ただし、そこから話が深まらない方向へと向かうクライアントの場合、自分のことを理解される怖さも感じていた。それでも、怖さを抑え＜自発的に話す＞が、＜感情を捨ててもらえない＞という体験に終わる。それは、話が深まるプロセスにおいて、クライアントが＜受け入れられている感じがする＞のとは対照的であった。このように＜伝わっている感じがする＞と＜受け入れられている感じがする＞の違いは、感情を受け入れられたという実感をクライアントが抱くか否かにある。＜伝わっている感じがする＞は、カウンセラーが自分の話した内容を正確に伝え返したことにより生じるクライアントの体験である。受け入れられたという感覚を得るまでには至っていない。それに対し、後者は、カウンセラーから共感的に理解されたと感じる体験である。Rice, et al. (1996 岩壁訳 2006)は、共感的理解を伝える反射を「クライアントが話したことに表される最も中心的な感情とその意味を読み取り、それを言葉にして返す反応」と述べる。ここからは話した内容を越え、背景にある感情や意味までもをカウンセラーから伝え返されて初めてクライアントは受け入れられたと感じることが分かる。さらに、研究2からは、カウンセラーが共感的理解を伝えることはもちろん必要であるが、それ以上にクライアントが共感されたと感じるかどうか重要であることが示唆された。共感されたと感じたクライアントは、さらに＜自発的に話す＞ことで、話を深めることが明らかになった。一方、話の内容として伝わってはいるものの、揺れ動きつつも表現した感情については受けて止めてもらえないと感じたクライアントは、やがて回避的に感情表現を控えた。それは、クライアントの話が深まらないことへとつながっていくことが図6-2から示された。

第3に、カウンセラーとの関係形成や、面接の場についての理解の仕方によっては、クライアントの話が深まらない場合があった。例えば、クライアントが知らない人に話すメリットを感じていたとしても、関係形成が充分でなければ、その話は一方通行に留まってしまう可能性がある。その場合、自分の話がカウンセラー相手にできたとしても、一方的なやりとりからは、新たなものは生まれない。そのため、話が深まらずに面接を終えることとなったのかもしれない。このように、カウンセラーに対し満足はしていないものの、それが直接的に表明されることはないような状態は、一般の面接でも起きう

る。カウンセラーとしては言葉のやり取りだけでなく、言葉にならないクライアントの思いや期待を丁寧に汲み取って行く必要があることが示唆された。

4-2) 研究 2 の意義

研究 2 の意義として、初期面接を進めるにあたっての、参考となりうるポイントを 2 点挙げる。クライアントの話をしっかりと聴き、面接を継続することを当面の目標とするカウンセラー初学者にとって特に有用であろう。第 1 に、研究 2 では、たとえ話が伝わったとしてもそれが受け入れられたと感じなければ、クライアントの話は深まらないことを明らかにした。これは、カウンセラー初学者が陥りがちな、おうむ返しや表面的理解といった対応の問題点を、クライアントの視点から明らかにしたと言える。また、第 2 に、研究 2 で示されたような話の深まりのなさへとつながるクライアントの細かい体験の積み重ねが、やがてドロップアウトへとつながる可能性も示唆された。そこには、やりとりのズレや、カウンセラーとの関係だけでなく、クライアントの面接に抱くイメージも関係していた。よって、カウンセラーは面接に関するクライアントのイメージが、実際の面接と異なる可能性も頭の片隅に置いておく必要がある。そして、機会があるごとにそのような認識の違いの有無をクライアントに確認することが、カウンセラー初学者が面接過程をモニタリングする上でのひとつのチェックポイントとなるだろう。

4-3) 研究 1・研究 2 の限界

第 II 部では、面接内におけるクライアントの体験を探索的に明らかにすることを試みた。まず、研究 1 では面接内のクライアントの体験をカテゴリとして抽出した。続く、研究 2 では、面接内においてクライアントの話が深まるプロセスを、話が深まらない場合との比較から明らかにした。第 III 部に移る前に、第 II 部研究 1・2 の限界について述べる。限界としては、次の 3 点が挙げられる。

第 1 に、一般のカウンセリングとの時間や回数などの枠組みの違いである。カウンセリングの多くは 50～60 分／回の面接が、複数回継続されることが一般的である。研究 1, 2 で扱った 1 回、20～30 分の面接の分析から明らかになったことが、そのまま適応できるわけではない。面接初期に起こるコミュニケーションに限定したものとして、理解することが適当だろう。面接を重ねる中で、話が深まる／深まらないという体験は次

にどのようなプロセスを引き起こすのか。それらはやがて問題の解決へとつながっていくのか。これらの点を明らかにすることが今後の課題となる。第2はカウンセラーの経験年数の違いである。カウンセラーには、修士課程の学生と、博士課程の学生がいた。前者はカウンセラーとしての訓練を始めたばかりであり、後者の学生とは約2年の経験の違いがある。クライアントの話が深まらないという体験は、そのようなカウンセラーの経験の違いゆえのものであるかもしれない。そうではあるものの、経験を積んだカウンセラーが行う一般の面接においても、クライアントとの間の話のズレや誤解は起こりうる。よって、クライアントの話が深まらないという体験は、一般の面接においても起こりうるプロセスであるかについてはさらなる研究が必要だろう。第3が、クライアントが非臨床群であるという点である。実際のクライアントを対象としなかったのは、面接直後にインタビューを行うことに伴う影響に配慮したためである。しかし臨床群と非臨床群とでは、健康度・話す問題の深刻度・面接に臨むモチベーションなど様々な点で違いがある。

以上から本研究の結果を、臨床群を対象とした継続面接におけるクライアントの体験として一般化することには限界がある。しかし岩壁(2008)は、より短期的に起こる変化という点においては、試行カウンセリングであっても、実際のものに近い変化が見られると述べている。また鑪(1970)も、試行カウンセリングには、ラポールの形成や問題の明確化が行われるなど、面接初期と同様の特徴があるとされる。更にElliott(1986)は、実際の面接を対象とした研究においても、臨床群を対象に行ったものと、一部違いはあるものの同様の知見が確認されたとする。これらの見解と今回の限界を総合すると、次のように言えるのではないか。研究1,2におけるクライアントの体験を一般化することは困難である。しかし前述のような限界を踏まえた上であれば、初回面接に見られるクライアントの体験の例として、他の事例を見る上での足がかりとなりうるのではないか。そして今後新たなデータを追加し検証していくことで、今回得られた結果の妥当性を高めていくことは可能であろう。

第Ⅲ部 面接内と面接間の双方におけるクライアントの主観的体験

第Ⅲ部の目的と構成

第Ⅲ部では、面接内と面接間の双方におけるクライアントの主観的体験を探索的に明らかにすることを試みた。3回の短期試行カウンセリングを受けた4人のクライアントに対し、IPRインタビューを行った。まず、第7章において、そのうちの1人のクライアントを対象に、面接内と面接間の双方におけるクライアントの主観的体験に関する事例研究を行った。続く第8章では、4人全てのクライアントに対するIPRインタビューデータを、M-GTAを用い分析し、次の2点を検討した。第1が、面接内と面接間におけるクライアントの主観的体験である。第2が、面接内と面接間の相互作用である。

第7章 短期試行カウンセリングに関する体験・ナラティブ指向事例研究 –同居の兄を避けていた女子大学生の事例から– (研究3)

第1節：問題と目的

1-1) はじめに

心理面接におけるクライアントの変化には、面接内での変化と、面接間における変化の双方がある。研究1, 2では、クライアントの面接内での体験に焦点を当てた。その結果、クライアントの話が深まるためには、自分の話がカウンセラーに伝わったという感じるだけでなく、それを受け止めてもらえたという感覚を得ることが必要であることが明らかになった。そのような感覚を得たクライアントは、カウンセラーとの良好な相互作用の中で、問題を整理することなどを通し、問題理解を進めていた。このような面接内でのクライアントの体験は、肯定的変化であると言える。

ところで、研究1, 2は1回の面接を対象としたが、シングルセッションセラピー(Talmon, 1990 青木訳 2001)を除き、心理面接は何回か回数を重ねるのが一般的である。では、上記のような面接内で生じた肯定的変化を、クライアントはどのように日常生活へと浸透させていくのであろうか。また、面接間での体験は、面接内でのクライアントの体験にどのような影響を与えるのであろうか。そこで、研究1, 2に参加した4人(C1.7～C1.10)のクライアントの、その後の2回を含めた全3回の面接過程を検討することとした。

1-2) 研究3の目的

研究3, 4では、上記4人のクライアントにIPRインタビューを行い、面接内と面接間の双方における、クライアントの主観的体験を明らかにすることを目指した。そこで、まず研究3で、1つの事例の詳細な経過とインタビューデータを合わせた事例研究を行った。それにより、クライアントの視点から、面接内と面接間の双方における体験がどのようなものであるかを明らかにすることを試みた。続く、研究4では、さらに3事例を加え、面接内と面接間の双方におけるクライアントの主観的体験の概念化を目指した。

第2節：方法

2-1) 採用した研究法：体験・ナラティブ指向事例研究

事例研究は日本の臨床心理学研究の主要な研究法の1つである。しかし、事例研究には主観とバイアスの問題、一般化可能性の問題などの限界がある。野田（2015）は、これらの批判を受け発展した系統的な事例研究について概観した。それによると、系統性とは観察、記述、評定をある一定の規則や基準に従って行うことを意味する。そして、系統的な事例研究の原則として、①リサーチクエスチョンが明確に設定され、事例報告ではないこと。②一定の原則に従い、量的データと質的データの両方が収集され、分析されることの2点を挙げている。さらに野田（2015）は、目的別に主要な4つの系統的な事例研究法を紹介した。その1つが体験・ナラティブ指向事例研究（Experiential or narrative case studies）である。体験・ナラティブ指向事例研究とは、ある事例における、クライアントもしくはカウンセラーの主観的体験の質と意味を扱う事例研究法である（岩壁，2013；野田，2015）。よって、国内で多く行われている事例研究のようにカウンセラーの視点からクライアントの体験を描くのではない。クライアントの視点からクライアントの体験を明らかにすることを目指す。このような特徴と目的は、面接経過を、クライアントの視点から理解しようとする研究3に適したものである。そこで、体験・ナラティブ指向事例研究を研究法として採用した。

表 7-1 事例研究の4つの形態（岩壁（2013），野田（2015）を元に筆者が作成）

	リサーチクエスチョン	代表的研究法
①効果事例研究 (outcome-oriented case studies)	<ul style="list-style-type: none"> ある事例における心理療法の効果は？ クライアントの変化における心理療法の貢献度は？ 	<ul style="list-style-type: none"> 事例研究法 単一事例研究法 解釈学的単一事例研究法
②理論指向事例研究 (theory-oriented case studies)	ある事例データをもとに <ul style="list-style-type: none"> 新たな理論的枠組を生成するには？ 既存の理論や概念をいかに説明／改良するか？ 	<ul style="list-style-type: none"> 事例比較法
③実践的事例研究 (pragmatic case studies)	<ul style="list-style-type: none"> 特定の事例に対し実施した、アプローチはどのようなプロセスであったか？ 	<ul style="list-style-type: none"> 量・質双方のデータを扱う標準的フォーマットを用いた事例研究
④体験・ナラティブ指向事例研究 (Experiential or narrative case studies)	<ul style="list-style-type: none"> ある事例における、クライアントもしくはカウンセラーの主観的体験の質と意味とは？ 	<ul style="list-style-type: none"> クライアントやカウンセラーの自伝 ナラティブ事例研究

研究3で採用

2-2) 事例研究としてエビデンスの質を高めるための対応

岩壁（2013）は、事例研究をエビデンスとしての価値を高める8つのポイントを示した（下記(1)～(8)）。本研究では、それらに関し、次のように対応し、エビデンスとしての質的向上を目指した。

(1) セラピスト・研究者に関する情報

事例を担当したカウンセラーは、臨床心理面接について訓練中の修士課程の女性であった。訓練は特定の学派に寄らない基礎的なものであり、面接当時においては特段のオリエンテーションはない。筆者に関する情報は第I部第2章で述べた通りである。

(2) 治療関係に関する情報

面接終了後に、治療同盟尺度（Working Alliance Inventory (WAI: Horvath & Greenberg, 1989) クライアント版を実施した。WAIはHorvath & Greenberg (1989)によって作成された尺度である。治療関係を、①目標に関する合意（例「私にとってよい変化は何か、私たちはよく理解するようになった」）、②カウンセラーとクライアントの絆（例「___さん（カウンセラーの名前）と私は、お互いを信頼している」）、③課題に関する合意（例「私がカウンセリングですべきことについて、私たちは合意している」）の3つの側面から測定する36項目からなる尺度である。評定は「全くない」～「いつもそうである」の7段階で行い、高得点が良好な治療関係を示す。以下の3点の理由から本尺度を採用した。第1に、治療関係は、効果と最も安定した相関を示す指標のひとつである（岩壁, 2007）こと。第2に、これまでの研究でもっともよく使われてきた（葛西, 2006）こと。第3に、日本での妥当性・信頼性も確認されている（葛西, 2006）ことである。IPRインタビュー以外の観点から補助的に面接における体験をクライアントに評価してもらうため本尺度を選択した。

(3) 倫理的配慮等に関する情報

倫理上の問題を配慮し、クライアントは、非臨床群を対象とした。ただし、架空の問題ではなく、クライアントが実際に少し気になっていることを話してもらうことを踏まえ、中断・中止の自由などのインフォームドコンセントに務めた。

(4) クライアントの視点の取り入れ

クライアントの視点を取り入れるため、クライアントに面接時の体験を尋ねるIPRイ

ンタビューを実施した。内容については、第3節 事例とインタビュー内容の提示に記載した。

(5) 背景情報（環境，条件等）の提示

クライアントは、面接での体験を探るという研究テーマを明示したうえで、試行カウンセリングを受け、その感想を話すことに同意する協力者を、一般の大学生から募った。面接は都内大学の相談室で計3回行われ、1回あたり約30分だった。

(6) スーパービジョンの有無

必要に応じ受けられる体制を設けた。ただし、実際の利用は無かった。

(7) 変化の測定

面接回毎のクライアントの変化に関しては、治療関係のみ測定を行った。

(8) 面接プロセスの記述

面接プロセスの詳細については、第3節 事例とインタビュー内容の提示に記載した。

2-3) IPR インタビュー

研究3, 4では、各面接を振り返るため、IPRインタビューを、計3回実施した。インタビューは面接後、約1~3週間の間隔をあけて行われた。通常IPRインタビューは記憶の劣化を防ぐため、面接直後に行われるのが望ましいとされる(岩壁, 2008)。ここでは次の2つの理由から、間隔をあけての実施となった。第1が、クライアントの予定を優先し日程を調整したためである。第2が、面接の逐語を作成したためである。この逐語作成には次のような利点があった。まず、研究者にとっては、面接の過程を十分に理解することとなった。それにより、インタビューのポイントを見落とすなどの事態を避けることが可能となった。また、クライアントにとっては、映像だけでなく、逐語という文字情報の助けを得ることとなった。そのため、記憶がより喚起され、面接での体験を述べたい箇所を具体的に特定することが容易となった。インタビューにおいて、クライアントからは、研究者の質問に対し「よく覚えていない」など記憶の劣化を窺わせる発言はなかった。よって、原則からは外れることとなったが、インタビューの質は確保できたと判断された。

第3節：事例とインタビュー内容の提示

3-1) 提示する事例

提示する事例は、第2節 2-2) で示した短期試行カウンセリングを受けたクライアントのケースである。20代の女性で、実家を出て兄と二人暮らしをしていた。その兄と、1年前からほとんど口をきくことがないことが主訴であった。本事例を選択したのは、まず、初回面接において、クライアントがカウンセラーとのズレを感じたためである。しかし、その後2回の面接を重ねる中で、カウンセラーとの関係は改善し、主訴となった状況は大きく変化した。このような事例の展開が、研究3の目的に適していると考えた。なお、次項に示す事例の概要と面接経過については、プライバシー保護のため、個性を損なわない範囲で、細部を調整した。3-2)～3-4)で面接経過を述べ、最後に面接回ごとのWAI得点(図7-1)を示す。

3-2) 1回目面接：同居の兄と口をきかない

(1) 面接概要

同居する兄と喧嘩をしたのをきっかけに、1年前からほとんど口をきいていない。できるだけ顔を合わさないよう、寝起きや食事の時間帯をずらしているため、面倒に感じている。親からは仲直りをするよう言われ続けている。しかし、このまま何もなかったことになるのが嫌なため、旅行先で買ったお土産も渡せないでいる。ただ、これまでの兄を避ける生活が、消極的拒絶とすると、お土産を渡さないのは、積極的拒絶になる。そのため、お土産を渡すかどうか迷っていることがクライアントから語られた。

(2) 面接場面の抜粋と IPR インタビュー

1回目の面接は、クライアントにとっては、初対面のカウンセラーに対しても、初体験の面接に関しても、手探りの回であった。以下に、その回で特徴的と思われる場面を3つ取り上げた。①カウンセリングでは何をするのかよくわからないまま、クライアントがためらいつつ話を切り出す場面、②状況をうまく説明できない場面、③面接中は感情的にならずに話せることに気づく場面である。そこでの逐語と IPR インタビューの対比を提示する。なお、カウンセラーの発言を Co, クライアントの発言を C1, インタビュアー(筆者)の質問を Q, 筆者の補足を () で示す。また、逐語やインタビ

ューでポイントとなる部分に、下線をした。

(2) -1 カウンセリングって何をするのか

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>Co: 何かお悩みのこととか (はい), 気になっていることとかありますか?</p> <p>C1: うーんと, 何か, . . . 何か, . . . すごい今, すごい今というかあの, 卒論で追われているので (中略) うーん, . . . うーん, そうですね, 何か, 何だろう, 何か, うーん</p> <p>Co: 卒論で日々厳しい生活に追われているなっている感じで</p> <p>C1: 感じ, ですが, 何か, うーん, 何だろう はあ, すごいでもあれですね, 何か, あの, 今, あの, うーん, うーん 兄と二人暮らしをしているんですけど, はい, してるんですけど, <u>それが, うーん, 何か, うーん, 何かだめですね, やっぱりそれを話そうかどうかすごく迷っていたんですけど, でも, 結局, それを避けては通れないのか, っていう感じなんですよ. 何かその, あのう, (兄と) しゃべらないんですね, 全然</u></p>	<p>C1: この辺, 気まづかった。</p> <p>Q: 気まづかった, どうしてですか?</p> <p>C1: 何だろう, 初めて, やっぱ初対面の, しかも同年代の人 . . . , に話をするっていうのかな, っていうのがありました。 <u>(中略) 私カウンセリングって何をするのかよく分からなかった</u>っていうのもある, いきなり話すのかあって, ちょっと思った (中略) (一方で) これは, 本当に困ってることなんだっていう風に話せるとは思いました。(中略) 初対面の人でもこういう話し方, 同じことはこの辺までは話せると思うんですけど, <u>でも, (面接では) それがすごく自分にとって, 今マイナスに働いてるんだって</u> <u>いうことを, ちゃんとそういう風に伝えて</u> <u>いいんだっていう気持ちは, あります。</u> (中略) カウンセリングの場合だから, 私は (普段とは) 違う気持ちで話しますが, いいですか? っていう感じ (笑)。</p>

(2) -2 状況をうまく説明できない

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1: (C1 が旅行のお土産を) お母さんには買ってきたのー?, お父さんには買ってきたのー?, 何か, 俺もらってないんだけどって (兄は思うのではないか)。一応買ってきてはいるんだけど, そう, 買ってきてないのって親から言われて (笑) そう, いや, 買ってきてるんだけどねえとか, 思うんですけどねえ, でも</p> <p>Co: (渡す) タイミングがちょっと</p> <p>C1: タイミングが</p> <p>Co: 逸してしまったというか</p> <p>C1: うーん, どうしよう</p> <p>Co: 何か期限があるものですか?</p> <p>C1: あ, うーん, そんなことはないです。</p>	<p>C1: 何かそれはすごくうまく言えないんだけど, 親が思ういい状態に変わることがやっぱりこの (面接の) 中でもいい状態であった気がして, <u>この中でもいい状態っていうのは, きょうだい仲良くみたいないい状態っていうのが, すごい大前提としてあったよう。</u>何かそうじゃないんだって言うのを, (Co に) 伝えたいんだけど, <u>それが, うまく伝わってないなって言うのを感じました (中略)。(お土産を) 渡せないって言うのは, 渡せなくて困っているっていうのは, 期限があって, (中略) 困っているんじゃないかって (中略) (でもそのことを) うまく説明できていなかったと思う。</u></p>

(2) -3 面接中は感情的にならずに話せることに気づく

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>Co : お兄様がそこ（同居する家の共有スペース）にいても、そこに居続けられるというか、作業が続けられるというか、前というのは、けんかした当初とかは、それも嫌というか・・・。</p> <p>C1 : うん、嫌だなあとと思うから、うーん、だから、うーん、どうなのかなあ、（共有スペースに居ることができるのは）回復の兆し（笑）。</p> <p>Co : （C1 の笑いに合わせ）回復（笑）。</p> <p>C1 : 前に比べたら回復の兆しなのかな、だから（兄は C1 がお土産を買うより以前に）お土産を買ってきてくれたのかもしれないし。</p>	<p>C1 : 「回復の兆し」（という C1 の言葉）を（Co から）笑われたりとか（中略）、<u>深刻そうな顔をされると、ん？って思うし、笑われると笑われるで、ん？って思って、何か、じゃあどうして欲しいのって話しながら（思って）（中略）。</u>すごく不思議なんですけど、親と同じ話をしたときは、こういう風に（冷静に）は話せなくて、それはだから、でもやっぱり、不思議だなあと。感情的になったりとかは、は、しないんですよ。笑ったりとか、でき、できるんですよ、別に、無理してるとかじゃなくって（後略）。</p> <p>Q : それは、不思議、何だろう、やっぱり、初対面っていうのもあったと思うし、何て言うんだろう、距離感みたいのもあって、自分を出すっていう感じでなかったっていうのはあるんでしょうか？</p> <p>C1 : ああ、うーん、でも逆に、友達とかで<u>なまじ知っている人よりも話はしやすくして</u>。</p> <p>Q : どうして？</p> <p>C1 : どうしてだろう、あ、それが多分、最初の時に、その話すのを迷っていたけど、にすごい近いと思う。でも話さないと、話した方が、話せるなら話そうかなと思った状態で来たので。</p>

(3) 1 回目の IPR インタビューから読み取れること

初回の面接は、クライアントにとって手探りの回であったことが、インタビューから窺えた。「カウンセリングって何するか」よく分からないまま、ためらいつつ話を始める。話したものの、親から言われて続けた「きょうだい仲良く」という「大前提」の存在を、面接の中に感じていた。これは、カウンセラーがそういった趣旨の発言をしたからではない。あくまで、クライアントの主観的な受けとめである。そして、「深刻そうな顔をされると、ん？って思うし、笑われると笑われるで、ん？」といった発言にあるように、カウンセラーのどんな態度にもしっくりこない感じを受けていた。その一方で、面接は、友人同士との日常会話とは違い「マイナス」な話をそのまま伝えてよい場であるとの認識も抱いていた。その結果、全面的に面接に満足したわけではいものの、部分的には「なまじ知っている人よりは話しやすい」という肯定的な意義を見いだしていた。

3-3) 2 回目面接：兄にお土産を渡す

(1) 面接概要

1 回目の面接のあとに、母親から電話がある。まだ兄にお土産を渡せないのかという内容。母親からのアドバイスで、直接ではなく、手紙をつけて部屋に置いておくというやり方で兄にお土産を渡す。翌朝、兄からも返事がある。それを読み、兄との関係について、大丈夫かもという感覚を得る。そして、喧嘩をしたから兄と話せなくなったのではないことに気づく。元々仲の良いきょうだいだった。しかし、喧嘩をきっかけに、兄のことを、家族を極端に重視する親の価値観を代表するような存在に感じるようになっていた。そして、自分は、その価値観から距離を置いているとのことがクライアントから語られた。

(2) 面接の抜粋と IPR インタビュー

2 回目の面接についても、特徴的な 3 つの場면을抜粋した。まずは、①カウンセラーに対し伝えることを、クライアントが日常生活でも意識していたことが語られる場面である。そこには、1 回目の面接が影響を与えていた。次に、②カウンセラーに分かってもらいたいとより自己開示をする場面である。面接を重ねることは、その後のカウンセラーとの関係に変化をもたらしていた。最後に、③クライアントが面接がなければ状況は違っていたと語る場面である。面接と日常生活とが互いに影響を与える回となった。

(2) -1 カウンセラーに伝えることを日常生活でも意識する

面接の抜粋	IPR インタビュー
Co：前回から何か変わりましたか？ C1：あ、渡せました。 Co：あ、ホントですか！良かったじゃないですか！	C1：うーんと、(お土産を) 渡すときに、渡したら多分、次のカウンセリングで (Co に) 渡したって言うんだらうなって思いました (笑)。で、渡せなかったら、渡せませんって言うんだらうなって思いました。 Q：ああ、そこは、意識してるっていうか。 C1：そうですね、その何か、 <u>カウンセリングで、話した内容を、実際の行動をするときに、逆に考える</u> というか、 <u>っていうのは、ありました。</u>

(2) -2 カウンセラーに分かってもらいたい

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1 : (兄と自分の考え方は) すごく違うんだなと思って, でも違っていいんだっていう風に, というか, 違っていいんだって主張しなくちゃいけないんだなって, おも, 思えるようになったというか。</p> <p>Co : ある意味お兄様に対抗できるようになったというか, それだけじゃないんじゃないのっていう風に言うというか。</p> <p>C1 : うん, そうですね。で, それをすごいその, <u>すごい好きだったし, 昔, すごい好きだったしお兄さんのことが, 昔, その, 何て言うんだろう, 一番尊敬みたいな感じだったから</u></p> <p>Co : ふーん, そうだったんですか。</p> <p>C1 : そうだったんですよ, そう, だから何か, その人が, 一旦違うって, 言ってることを, 堂々と違うって言えるのかなって, ずっと多分思ってた, でも, 距離的にも, その喧嘩をしたこと自体で, 彼に対する疑問みたいなのもすごく, 感じるようになったし, 今まで私はすごいとらわれていたんだって思ったんですよ。</p>	<p>Q : お兄様のこと, 「すごく好きだっただし」っていうのも, ことから辺も1回目だったら聞けない話じゃ?</p> <p>C1 : (中略) 今の状況を説明しようとしたときに, すごいだめなんだけど, すごいだめって言う言い方しかできなくて, でもそれって前の状況を抜きに考えると, (兄が) 嫌いとか, しゃべれないっていうマイナスイメージにしかならないんだけど。でもそれが自分の中では, (単純に兄のことを) 嫌いっていう風に行けないのは, 昔, すごい, あれ(好き) だったからっていうのがつながっているの, うーん, そっかそっかそっか, だから, そうですね, 何を話したいのかが, (Coに) 何を話さなきゃいけないのかが, すごいはっきりしたと思ったので, この問題を本当に話すんだったら, こっち(兄が好きだったこと)まで遡って全部話さない, 自分がここまで理解してるんだっていうことは, 分かってもらえない。</p>

(2) -3 面接がなければ状況は違っていた

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1 : 案の定なんか, 母から電話がかかってきて, そう, 何かもう予想をしてきたことを言われ, ハア, だからみたいな(笑)。</p> <p>Co : ああ, お土産渡せないの? みたいな。</p> <p>C1 : そう, いや何かもう, その話をすると, すごい私が感情的になっちゃうから。</p> <p>Co : その話っていうのは, お兄様の?</p> <p>C1 : そうですね, そうだから, まず, 今時間あるの? みたいな, 感情的にならないで聞いてよね, みたいな, (お土産) 買ってこなかったでしょって言われて(笑), いや買ってきてるんだけど, みたいな話しをして, そう, 何か直接渡さなきゃいけないって思っているけど, 何か, うーん, 直接じゃなくてもいいんじゃないかっていうことを言われて, ああ, じゃあ, 何かその, 部屋にそれを置いておいて, それと買って来たっていうのを紙に書いておいてっていうのをしました。</p>	<p>C1 : 何て言うんだろう, その, うーん, やっぱりその, さっきのカウンセリングでも言ったんですけど, 親から電話がかかってきたときに, <u>1回目のカウンセリングがなかったら, 多分また状況が違った</u>とっていて, うーん, 何だろう, 結構その, うーん, うーん, うーん, で, それ(母からの電話という出来事)が起こって(その後)にすぐ2回目(の面接)があったから, それは良かったとっていて, どこかにというか, 自分に, うーん, うーん, 何て, 自分の感情の方に, その, 偏る必要が, 偏らないで済んだと思うので, <u>カウンセリングがあったっていうのも, すごい必要だったと思うし, うーん, 何て言うんだろう, あと, 時間が, その, こういうことを考えるまで, 経ってたっていうのももちろんあるので, うーん, うーん, 両方だった</u>と思うんですけど(後略)。</p> <p>Q : それ, うまくタイミング良く両方, 並行して, 並行じゃないけど, あるかもしれない。</p> <p>C1 : そうですね, 冷静に, 話をする場があったっていうのは, すごいよかったとっていて。</p>

(3) 2 回目の IPR インタビューから読み取れること

1 回目の面接を終えたクライアントは、面接で話した内容を意識しながら生活をしてきた。実際に兄にお土産を渡したのは、時間の経過や母親からの電話が後押しとなったようである。しかし、「カウンセリングで、話した内容を、実際の行動をするときに、逆に考える」「1 回目のカウンセリングがなかったら、多分また状況が違った」という発言からは、面接の内容を日常で振り返ることも、少なからず渡すという行動に影響を与えていたことが窺える。また、そのような振り返りを通し、クライアントの中には、面接の間に起きた出来事を伝える相手として、カウンセラーを認識するようになっていた。このことは、カウンセラーとの関係を近づけることにもつながった。上記インタビューにはないが、2 回目の面接の感想として「すごく気が楽だった」「2 度目で知っている人だから」という発言があった。このような関係の進展があったからこそ「昔、すごい好きだったし、お兄さんのことが」といった自己開示につながったのであろう。ここから、より深く自分の状況を伝えたい相手にカウンセラーがなりつつあるという、クライアントの心の変化も読み取れた。

以上のように、1 回目の面接を受けることで、クライアントの日常生活の一部に、面接の内容やカウンセラーの存在が取り込まれることとなる。面接間は、面接とは無縁の単なる面接と面接の間の時間ではなく、主訴（この場合、兄とのこと）を軸に面接内と面接内とを結びつける時間であることが、インタビューから分かった。

3-4) 3 回目面接：生活が楽になる

(1) 面接概要

何かすごく状況が好転した。今は兄と普通に話せる。二人の仲が、元の状態に戻ったわけではない。それでも、好転したと思える。以前は、兄とは話せば分かりあえると思っていた。でも今は、お互いに譲れないところがあること、それを譲らなくていいんだということに気づいた。兄は長男という立場に縛られている。その立場から離れて、自分が本当は何を思っているのか、考える機会がなかったんだと思う。でも、自分にはそういう機会があって、縛りから抜け出せた。それに気づいたことで、すごく楽になったということがクライアントから語られた。

(2) 面接の抜粋と IPR インタビュー

3 回目は最後の面接であった。状況はクライアントにとって「劇的に変わった」。そのため、クライアントは、面接の意義を認識すると同時に、カウンセラーへの感謝を感じていた。3 つの面接場面と対応するインタビュー箇所を以下に示す。まずは、①事態の好転を、話す前からカウンセラーが分かっていると思いついでいた場面である。そして、②その変化は、カウンセラーとだからこそ共有できると考えていることが語られた箇所である。3 つ目は、③カウンセラーとの出会いに関し、特殊な会い方したと振り返る場面である。

(2) -1 話す前からカウンセラーが分かっていると思いついでいた

面接の抜粋	IPR インタビュー
Co : どうですか、先週から1週間ぐらい経ちましたけど、何か変わったこととか、ありますか？ C1 : うーんと、何かすごく、 <u>劇的に変わる、劇的に変わった</u> と言うか、 <u>回転、好転、はい</u> 。 Co : あ、そうなんですか。 C1 : はい、何かすごく（兄と）普通に（生活）できるようになりました。 Co : 普通にできるっていうのは、おしゃべりとかも、はあー。 C1 : とかも、何かすごく、自然にできるようになった（笑）。	C1 : この話をしたときに、あ、（前回のカウンセリングから）1週間しか経ってないんだって思って、その、私はすごく普通の気持ちで、生活が楽になったんですけど、でも、その先週の話しか知らない状態だとしたら、（Co にとっては）すごく劇的な変化なんだろうなって思って。（中略）この前の回の時に話したようなこと話しているのは、一応 Co さんだけなので、むしろこの1週間の変化みたいなのを説明するのに、何かむしろ何て言うんでしょう、（C1 が変化に関して報告する前から Co が） <u>分かっている、落ち着いたっていうことを分かっていると思</u> <u>ってた。</u>

(2) -2 カウンセラーとだからこそ共有できる

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>Co : よかったですね、私も3回しかお会いできないので、3回目に、そう、うまくまとまって、すごく楽しかったっておっしゃっていたので、すごくよかったですって思っ</p> <p>C1 : ねえ、すごい不思議です。</p> <p>Co : ねえ、何か、行動したのが大きかったのかな、しれないですね、分からないですけど、もちろんタイミングもあったり、色々あると思うんですけど。</p> <p>C1 : すごい不思議、不思議、本当に、何か、ね、うーん、でもそうですよね、でも良かった、親とかと話しをしたりしたときに、その、何か(カウンセリングで)話す機会があったってというのは、すごいいいことだと思います。</p>	<p>C1 : 良かったですねって言われるのも、楽しかったって言えるのも、その、この(面接の)場だけっていうのは、多分この場を離れたら、これよりいい状態っていうのが多分あると思うんですけど、そのもっとうる状態のほうが、(兄との仲が)元通りとか、(そちらの方が)いい状態なんじゃないかっていうのは、あると思うんですけど、自分にとって、今の状態がすごいいいものになったっていう、目標を設定するとしたら、<u>解決した状態っていうのを、自分が考えるのは、こういう状態だっていうのを(言葉に)出せている。私はこれでいいと思うんだっていうのを言えるのはすごく嬉しい。</u></p> <p>Q : ああ、でそれは相手も分かっている、良かったですねって言って貰えるっていうのは嬉しいっていう。</p> <p>C1 : で、しかもそれがいいんだっていうのをその、(Co が)分かってくれていて、その分かってくれてないなって思ったら、でも私にとってこれがいいんだっていうのを説明できるので、それも嬉しい(中略)例えば兄とか母とかだったら、認められないかもしれないんだけど、不満なのかもしれないけど、でも私はこれでいいんだっていうのが素直に言えるのですごくありがたい。</p>

(2) -3 特殊な会い方をした

面接の抜粋	IPR インタビュー
<p>C1：そうですね，そう，すごだから，良かったと思います，タイミング，すごい，その，関わる，その問題について関わっていることが，全部きちんと，何て言うんだろう，一定のこの期間に，集まって解決してくれたっていう感じがして，何か，多分，うーん，多分，うーん，そう，一時的に話ができるとかじゃなくて，それ，今の状態だったら多分，（兄と）お互いに距離を取りながら，ま，強制しあわないで，残りの一緒に暮らす期間は暮らせるし，でまあ，お正月もお盆とかあるんだろうけど，それも多分，普通に連絡を取ったりできる関係だと思うし，うーん，そうですね，だから，いい方向に，今，抜けられた感じがします。</p> <p>Co：まあ，これからどうなっていくかはね，分からないんですけど，このままいい方向にね，っていうのもまあ，ある種仲良くというか，いい関係を保ったままね，お兄様と，こう過ごして，まあ，半年しかね，あれで一緒じゃないので，して頂けたらいいなあと思います。まあ，最終回なので，何か，3回に渡って話を聞かせて頂いてありがとうございました。</p> <p>C1：ああ，いえいえ，ありがとうございました，こちらこそ。</p>	<p>C1：（面接が最後の回となり）寂しいなあって思ったときに，何か，あ，（Co とは）特殊な付き合い方をしたなあって思って，その，ああ，一気にこの話をしてしまった人なんだなあって思ったというか，それは，その，会えなくて，寂しいけど，でも，会い続けて，話をする関係じゃないんだろうなあっていうのも思ったので，でも本当に寂しかったんです。</p> <p>Q：いやだって，（C1 が最後にお礼を言う際に）こんなに立って挨拶されてて，ものすごい丁寧だなあて思って，気持ちが出てるよね，すごく。</p> <p>C1：なんか，そうですね。</p> <p>Q：あの，特殊な関係で，会い続ける関係じゃないっていうのは，もう少し詳しく，どんな感じなのかな？</p> <p>C1：うーん，何か，その，友達になるみたいな会い方をしたんじゃないっていうのは，その私はすごく親密に感じると，考え，ていうか，うーん，何て言うんだろう，踏まえておかないと，踏まえておいていいことだというか，私が，その，今一番悩んでたことで，<u>その時すごく支配されてたコアみたいなところを，一気にガッって話続けたので，やっぱり，そう言うところから知っていく人間関係ってないと思うので。</u></p>

(3) 3 回目の IPR インタビューから読み取れること

3 回目の面接内では，面接間にクライアントと兄との関係が「劇的に変わった」ことが語られた。そして，インタビューでは，そのような変化について，面接で伝える前から，カウンセラーが知っていると思っ込んでいたことが述べられた。また，母親や兄が考える良い状況とは異なるとしても，自分なりの改善に至ったこと，それをカウンセラーと面接内で共有できることは，クライアントにとっては「嬉しい」体験であった。ここからは，3 回の面接を重ねるなかで，クライアントにとってカウンセラーの存在が，しっかりと心の中に位置づけられたことが窺える。そして，そのことが，面接内と面接間の相互作用を促していたことが分かる。このようにカウンセラーは，クライアントにとって，重要な存在となったものの，主訴にまつわる話だけに限定された，そこで始まり，そこで終わる関係であった。クライアントは，その関係を「その時すごく支配されてたコアみたいなところを，一気にガッって話し続けたので，やっぱり，そう言うところ

ろから知っていく人間関係ってない」と評していた。回を重ねることで、クライアントはカウンセラーとの関係を深めるだけでなく、関係の特殊性にも思い至っていた。

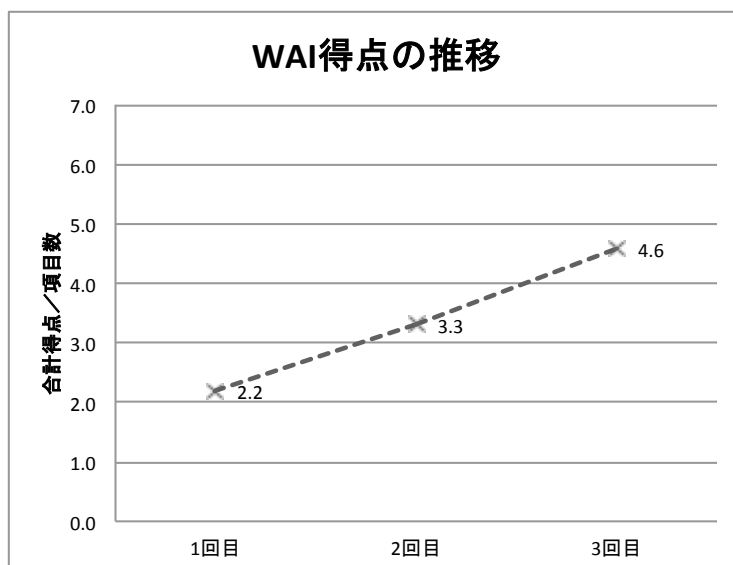


図 7-1 面接毎の WAI 得点（得点／項目数）の推移

第 4 節：考察

研究 1, 2 では、1 回の面接におけるクライアントの主観的体験に焦点を当てた。その結果、クライアントの話が深まるためには、自分の話がカウンセラーに伝わったという感じるだけでなく、それを受け止めてもらえたという感覚を得ることが必要であることが明らかになった。このようなカウンセラーとの良好な関係は、クライアントが問題理解を進めていくにあたっての基礎となる。

続く研究 3 では、面接を重ねることはクライアントにとってどのような体験であるかを面接間も含めて明らかにするため、体験・ナラティブ指向事例研究を行った。研究 3 で扱った事例では、1 回目の面接におけるカウンセラーとの関係は、必ずしも良好でなかった。クライアントは、「深刻そうな顔をされると、ん？って思うし、笑われると笑われるで、ん？って思って」といった発言にあるように、カウンセラーのどんな反応にも、しっくりこない感じを抱いていた。また、「きょうだい仲良く」という親の価値観と同じものが「大前提」として面接の場にも存在しているとクライアントは受け止めていた。カウンセラーはそのような趣旨の発言をしたわけではなく、これはある意味クライアントの誤解であると言えよう。このような状態で面接がスタートしたにもかかわらず、面接を継続し、クライエン

トなりの問題解決へと至ったのはなぜだろうか。そこには、「自然に形成される治療構造」（小此木，2004）と、面接間での体験の影響が関わっていると思われる。

まず、面接を重ねることを通し、クライアントの中に形成された治療構造が、治療関係の修復に貢献していたと考えられる。クライアントは、複雑な感情をカウンセラーに抱きつつも、面接の場では、友人同士との日常会話とは違い「マイナス」な話をそのまま伝えてよいという肯定的な意義を見出して1回目の面接を終えた。治療構造は、クライアントとカウンセラーの交流を規定する（小此木，2004）。これを、この初回面接に当てはめると、ネガティブな話であっても、面接の場でなら話して構わないという治療構造がクライアントの中に形成された。それは、ドロップアウトを防ぐだけでなく、カウンセラーとの関係をつなぎとめることにもなった。そして、面接間の体験もまた、カウンセラーとの関係維持や面接の継続に重要な役割を果たしていた。1回目の面接を終えたあと、クライアントは面接で話した内容を意識しながら生活していた。そのことは、面接の間に起きた出来事を伝える相手として、カウンセラーがクライアントの心の中に内在化されることへとつながった。また、面接間には、母親からの電話という偶然の出来事があった。母親に冷静に対処できたという経験は、クライアントに面接の意義を実感させ、面接の継続に寄与したものと考えられる。

最終的に3回目の面接において、クライアントと兄との関係は「元通り」ではないが、クライアントにとっては良い状態となった。そして、カウンセラーは「でも私はこれでいいんだっていうのが素直に言える」相手となっていた。しかも、たとえカウンセラーが分かってくれていなければ「でも私にとってこれがいいんだっていうのを説明できる」と、率直に違いを話し合える関係へと発展していた。

なお、このような関係の変化は、WAI 得点の推移からも示された。WAI は、①情緒的絆（bond）、②課題の一致（task）、③目標の一致（goal）の3つの側面から治療関係を測定する。初回の面接を振り返り、クライアントは、「改善する状態っていうのが、を、考える」ことが面接の場での課題であると思いつく。そして、「自分にとっての今の改善っていうのは、こういうことなんだっていうのを共有する」相手として、カウンセラーとの絆を深めた。それが最終的に「いい方向に、今、抜けられた」というゴールへと至った。

以上のように、たとえ、1回目の面接において、関係形成が不十分だったとしても、回を重ねることで、関係は進展した。そこには、「自然に形成される治療構造」（小此木，

2004) と、面接間での体験の影響が関わっていた。そして、クライアントなりのよい状態を唯一理解する他者であるカウンセラーの存在が、問題解決を後押ししていた。クライアントの誤解が解決するためには、良好な関係に基づく相互の修復努力が必要である (Rhodes et al., 1994)。しかし、関係があるから誤解が解決するのか、誤解が解決するから関係が修復するのかは、どちらとも言えないというのが実際であろう。今回の事例においても、カウンセラーに対する印象が変化した理由をインタビューの中で尋ねたところ「単純にその、一度会ったことがあるっていうのは大きい」「自分が話をしたい内容っていうのを知っている」からといった答えがクライアントから返ってきた。ここからは、関係修復には特段の理由がなかったことが窺える。もちろん、日常生活での出来事や、それに伴うクライアントの心境の変化などが影響を与えたことは十分考えられる。しかし、そのことはクライアントの中では意識されていなかった。このように、面接過程で生じるクライアントとカウンセラー間のズレは、何となく生じたり、何となく解消したりしするという無意識的な側面がある。クライアントの抱く面接やカウンセラーに関する不満は、表明されにくいものである。しかし、たとえ言葉にされなかったとしても、カウンセラーはクライアントの様子に何らかの違和感を感じるのではないだろうか。そうであれば翌回の面接で「前回話してみてどうでしたか」などの感想を尋ねてみるなどもひとつである。そして、面接を重ねながら、何か疑問や不満があった時に、自由に話し合える関係をクライアント共に築いていくことが重要ではないかと考える。

第 8 章 短期試行カウンセリングにおけるクライアントの主観的体験－面接内と面接間の双方に焦点を当てて－（研究 4）

第 1 節：問題と目的

研究 3 では、短期試行カウンセリングを受けたクライアントの 1 事例を検討した。そこから、クライアントは面接内での体験を、どのように日常生活へと浸透させていくか、また、面接間での体験は、面接内でのクライアントの体験にどのような影響を与えるのかを、クライアントの主観的体験から示した。そこからは、クライアントが面接を通し、何らかの変化へと向かうためには、自分なりに面接を使いこなすことや、カウンセラーとの良好な関係が必要であることが明らかになった。このように研究 3 は、従来カウンセラーや研究者の立場から述べられていた治療関係や治療構造の重要性を、クライアントの主観的体験から裏打ちした。

第 I 部第 2 章で概観したとおり、先行研究においては、クライアントが面接内だけでなく面接間においても積極的に問題に取り組んでいること（Levitt et al., 2006）、そしてそれが効果と関連すること（Perren et al., 2009）が明らかにされている。ただし、面接内と面接間が互いにどのような影響を与えているかについては、面接やカウンセラーに対するイメージが面接間にも持続するという内在化の観点（Knox et al., 1999）からしか明らかにされていない。しかし、研究 3 や先行研究をふまえると、内在化以外にも多くの要素が面接内と面接間の相互作用に関わっていることが想定される。

そこで研究 4 では、分析対象に、短期試行カウンセリングを受けた別の 3 人も加え、合計 4 人のインタビューデータを質的に読み解いた。これにより、研究 3 で得られた知見を検証・発展させ、クライアントの主観的視点から、面接内と面接間での体験、また、面接内と面接間の相互作用を、探索的に明らかにすることを目指した。

第 2 節：方法

2-1) 分析法の選択

第 7 章でも触れた通り、分析法には、M-GTA（木下，2003）を援用した。木下（2003）が挙げる M-GTA が適する研究として、ある特定の目的的な文脈で関係づけられた社会的相互作用がある。本研究では、ある個人の日常生活全般の中から、面接内／面接間とい

う特定の文脈におけるクライアントとしての体験に現象を絞り分析した。

2-2) 短期試行カウンセリングと尺度評価の実施

前述の通り、研究3、4では、研究1、2に参加した4人(C1.7~C1.10)のクライアントを対象に、追加で2回(計3回)の短期試行カウンセリングを実施した。クライアントには、日頃気になっていることを話してもらうこととした。3回共通のテーマを話すような教示は行わなかったが、全てのクライアントのテーマは3回を通し一貫していた。カウンセラーは、共感的に聴くことを基本とし、特定の技法や介入などは行わないことで統一した(表8-1)。

また、面接終了後に、治療同盟尺度(Working Alliance Inventory(WAI: Horvath & Greenberg, 1989)クライアント版を実施した。表8-2に短期試行カウンセリングの概要を示す。また、表8-3に面接回ごとの治療同盟尺度(WAI)得点を示す。

表 8-1 短期試行カウンセリングの枠組

回数(時間)		3回(約20~30分/回)
面接場所		都内大学内の個室となる面接室
設定	クライアント	クライアントが日常で少し気になることをカウンセラーに聞いてもらうことを目的とした。
	カウンセラー	クライアントの話を共感的に聴くことを基本とした。変化を促すことを目的とした意図的介入等を行わないこととした。

表 8-2 短期試行カウンセリングの概要

事例	属性		3回の面接の概要
	クライアント	カウンセラー	
1	大学4年 男性(CI.7)	博士課程 男性	卒業と就職を目前に控え、その2つについて整理したいという主訴。3回の面接で話すことで、自分が就職を決めた背景には、家族など身近な人の生き方からの影響があることに思い至る。そして就職して自立することが親との新たな関係を築くことになるのではないかとという展望が語られた。
2	大学3年 女性(CI.8)	博士課程 男性	テストやレポートで追われている。大学院進学を希望するも、勉強が手に付かず、睡眠も乱れがちという主訴。話を重ねる中で、院試についても、あまり自分を追い立てず、少しずつやっていけばいいと思うようになる。言葉にすることで、自分自身の変化に気付くことができたことが語られた。
3	大学3年 女性(CI.9)	博士課程 女性	部活で大きな試合を控えているがモチベーションが上がらないという主訴。幹部なので部活仲間に相談することもできなかった。面接で話すことで、自分が部活のことばかり考えていたことに気づく。そして部活以外のことにも目を向けることで、楽な気持ちを取り戻すことができたことが語られた。
4	大学4年 女性 (CI.10)	修士過程 女性	きょうだいと折り合いが悪く一緒にいることが苦痛という主訴。1回目の面接後に、偶然きょうだいと言葉を交わす。それをきっかけに、思いがけず普通にしゃべれるようになる。以前と同じ状態に戻ったわけではないが、自分としては良い状態であると感じられるようになったことが語られた。

表 8-3 面接回ごとの治療同盟尺度(WAI)得点 (合計得点/項目数)

	1回目	2回目	3回目	平均 (標準偏差)
CI. 7	4.7	5.7	6.4	5.6(0.7)
CI. 8	5.0	5.2	5.6	5.3(0.3)
CI. 9	4.2	3.9	4.4	4.2(0.2)
CI. 10	2.2	3.3	4.6	3.4(1.0)
全CI平均 (標準偏差)	4.0 (1.1)	4.5 (1.0)	5.3 (0.6)	

(注) WAIは「全くない」～「いつもそうである」の7段階で評定する36項目からなる質問紙である。上記の総合得点を項目数で割った値は、7に近いほど、治療同盟の強さを表す。

2-3) IPR インタビュー

これまでの研究と同様に研究4でも、クライアントに対し、面接に関する振り返りの

ため、IPR インタビューを毎回（計 3 回）実施した。

2-4) 分析の過程

(1) 分析テーマの設定

研究 4 は、試行カウンセリングに関する事例研究ではないため、分析対象は、試行カウンセリング後に行った 12（3 回×4 人）の IPR インタビューデータのみとした。面接の逐語は、研究者がインタビュー前に質問のポイントを予め把握したり、インタビュー回答の裏付けをしたりする際の参考とした。

研究 3、4 のインタビューにおいても、面接の映像を見ながら IPR インタビューを行った。教示は、下記の通り研究 1、2 と同様であった。

「録音を聞いて、その時思ったこと、感じたことが何か心に浮かんだ場合には、録音を止めてその内容をお話してください。ただし振り返ってみての感想や考えでなく、話している時にどうであったかでお話下さい」

しかし、インタビューの中でクライアントが、面接内の出来事を説明するための補足情報として面接間の出来事に言及することがあった。その際、インタビューの教示に基づき「話しているときにどうであったか」と区別するため、研究者が確認の質問を行うことがあった。以下にそのインタビューを例示する。

試行カウンセリングの映像：クライアントがカウンセラーに対し、前回の面接以降にあった出来事として、部活の先輩に「気楽にね」という言葉をもらったことを語る場面

C1.9 : (この場面は) あまりにも (部活のことを) 考えすぎてないだろうかとか、それしかないんじゃないかとか、気づいて、そこからうーん、こう悩んでいたら、こんな出来事があったっていう (話)。

研究者：それは話している、1 回目話している最中に気づいたのではなくて、話していた後に気づいて。

C1.9 : はい、カウンセリングが終わった後に。

このような確認の質問により結果的に、面接内に焦点を当てつつも副次的に面接間の情報を得ることとなった。その内容は、教示に影響を受けない分、より自

然なクライアントの面接間の姿を反映するものと思われた。また、面接内でカウンセラーに対して語られる面接間での出来事とは異なるものであった。よって、カウンセラーの視点からの研究では得ることのできない面接間のデータであると言える。

ちなみに M-GTA においては、データ収集後にデータ全体を見て、必要であれば分析テーマの調整を行うのは自然な流れであるとされる(木下, 2003)。研究 4 では、このようにして得られたデータを、面接間に関するものとして取り扱うこととした。

(2) 分析ワークシートを用いた概念の生成

分析にあたり、まず、試行カウンセリング後に行った 12 (3 回×4 人) の IPR インタビューデータを逐語化した。そして全体の概略を把握したうえで、次の 2 つの段階を踏んだ。最初にステップ 1 として、研究 3 で扱った C1.10 のインタビューデータを分析した。続くステップ 2 として、残りの 3 事例を加えた。

M-GTA では、分析テーマに基づきデータに注目しヴァリエーションを追加していく。そして、その意味を解釈し概念を生成する。その過程は分析ワークシートに記述される。

本研究においては、面接内/面接間双方におけるクライアントの体験に着目した。分析の手順として、まずデータの着目箇所を分析ワークシートのヴァリエーション欄に記入した。類似例をヴァリエーションに追加していく際には、反証となりうるものがないかなども確認した。そして、概念について新たな解釈可能性が考えうる場合は、分析済みのデータに立ち戻り検討した。木下(2003)は、このような、分析における継続的比較、特に対極例のチェック作業により、解釈が恣意的に偏る危険を回避できると述べている。

次に、解釈案を複数検討し、採用することとなったものを定義欄に記入した。定義を端的に表す言葉を概念名とした。なお、定義や概念名とはしなかったが捨てがたい他の解釈案や、疑問として残ったことなどを理論的メモ欄に残した。これにより、概念生成における思考プロセスの明示化に努めた。

(3) 概念生成過程の例示

本研究における概念生成の例として、研究 3 で示したインタビューデータを元に、概念名<面接ってどんなもの?と模索>と<面接と日常経験の比較>の生成過程を示す。

「」はクライアントの発言で、その発言が、何回目のインタビューでのものであるかは、

(C1.:○回目)で示す。例えば、「○○○(C1.10:1回目)」とは、「○○○」という発言が、C1.10の1回目のインタビューで得られたことを示す。

研究3で分析対象としたクライアントのインタビューを再掲する。これは、1回目の面接の出だしで、クライアントがためらいつつ話を始める箇所である。

カウンセリングって何をするのか(第7章3節3-2)再掲

面接の抜粋	IPRインタビュー
<p>Co:何かお悩みのこととか(はい),気になっていることとかありますか?</p> <p>C1:うーんと,何か,・・・何か,・・・すごい今,すごい今というかあの,卒論で追われているので(中略)うーん,・・・うーん,そうですね,何か,何だろう,何か,うーん・・・。</p> <p>Co:卒論で日々厳しい生活に追われているなっという感じで。</p> <p>C1:感じ,ですが,何か,うーん,何だろう・・・はあ,すごいでもあれですね,何か,あの,今,あの,・・・うーん,・・・うーん・・・兄と二人暮らしをしているんですけど,はい,してるんですけど,それが,・・・うーん,・・・何か,うーん,何かだめですね,やっぱりそれを話そうかどうかすごく迷っていたんですけど,でも,結局,それを避けては通れないのか,っていう感じなんですよ.何かその,あのう,・・・(兄と)しゃべらないんですね,全然。</p>	<p>C1:この辺,気まずかった。</p> <p>Q:気まずかった,どうしてですか?</p> <p>C1:何だろう,初めて,やっぱ初対面の,しかも同年代の人,に話しをするっていうのかな,っていうのがありました。</p> <p>(中略)私カウンセリングって何をするのかよく分からなかったっていうのもある,いきなり話すのかあって,ちょっと思った(中略)(一方で)これは,本当に困ってることなんだっていう風に話せるとは思いました。(中略)初対面の人でもこういう話し方,同じことはこの辺までは話せると思うんですけど,でも,(面接では)それがすごく自分にとって,今マイナスに働いてるんだっていうことを,ちゃんとそういう風に伝えていいんだっていう気持ちは,あります。</p> <p>(中略)カウンセリングの場だから,私は(普段とは)違う気持ちで話しますが,いいですか?っていう感じ(笑)。</p>

1回目の面接の出だしを「気まずかった(C1.10:1回目)」と振り返っていた。その理由を「私,カウンセリングって何をするのかよく分からなかった(C1.10:1回目)」と説明した。ステップ1の分析では,この箇所に着目した。それは,ここでのクライアントの体験が,日常会話とは異なり,面接という文脈に枠づけられていると考えたためである。そこには,初めての面接に臨むクライアントの戸惑いがあった。上記のインタビューの発言以外にも,このクライアントは,「うまく伝わっていない(C1.10:1回目)」感じや,カウンセラーの反応に「ん?(C1.10:1回目)」といった違和感も抱いていた(第6章3節3-2)のインタビューより抜粋)。そこからは,よく分からないなりに,面接に対する期待やイメージがあること,そして,それとのズレを感じていたことが読み取れた。このような,分からないなりに生じる違和感もヴァリエーションとして追加

した。概念名としては、＜初回ゆえの戸惑い＞、＜面接に対する事前のイメージとのギャップ＞などを候補とした。続くステップ 2 で、C1.7～C1.9 を分析対象として追加した。その結果、「カウンセリングを受けている序盤（中略）悩みながら、どう話したらいいのかなあっていう感じで、話してる感じ（C1.7:1 回目）」「最初はちょっとこう何か、どういう風に話したらいいのかなあとか、ちょっと手探り的な感じ（C1.8:3 回目にした 1 回目への言及）」「予想外に（カウンセラーが）明るくてびっくり、明るい方で（中略）元気っていう感じに圧倒されてしまった（C1.9:1 回目）」など類似の発言が確認された。

以上のように、クライアントは慣れない面接に戸惑い、期待や予想とのズレを感じていた。その一方、反証となるような発言も見いだされた。例えば、カウンセラーに話す気まずさを感じる一方で、「これは、本当に困ってることなんだっていう風に話せる（C1.10:1 回目）」と思ったことである。C1.10 は、面接では、日常会話と違い「マイナス」な話をそのまま伝えてよいのだとの認識を抱いた。このように日常との比較を通し面接の場の特徴をおぼろげに把握してくることが、ためらいつつも話を続けることを支えた。分析対象として追加した C1.7～C1.9 からも「昨日も何か、友達と（中略）話したんですけど、絶対こういう（面接で話すような）話にはなれ、ならないし、ああいう感じで（中略）カウンセリングを受けているときの自分を、彼らに出さない（C1.7:3 回目）」「普段の友達同士の会話なら、そんな感じ、何となくみたいところでこう、お互い交わしている部分を（面接は）考える場なんだな（C1.8:1 回目）」「部活って、こう、まあ見ようによっては遊びなので（中略）そんな辛いんだったら辞めればっていう世界、とかだと、人によってはそういう捉え方もあると思うので、何か、（面接では）そういうのがなかった（C1.9:1 回目）」といった類似例がヴァリエーションとして得られた。そこで、これらは別個の概念として独立させることとした。

ここまでの分析を通し、面接で話すということに関する 2 つのクライアントの主観的体験が抽出された。まずは、実際の面接に先立ち抱いていたイメージとの違いや、何をどう話せばよいか戸惑いつつ話をしていくというクライアントの体験である。これらを概念としてまとめ、＜面接ってどんなもの？と模索＞と命名し、[慣れない面接に戸惑いながら手探りで臨むというクライアントの体験]と定義した。もう一つは、面接内でのカウンセラーとのやりとりやを、日常生活での友人との会話などと比較する中で、面

接の場ならではの特徴を自分なりに理解していくというクライアントの変化である。これらを概念としてまとめ、＜面接と日常経験との比較＞と命名し、[面接で話すことと、日常で話す／考えることとを比較するというクライアントの行為]と定義した。以下に、分析ワークシートの抜粋（表 8-4，表 8-5）を示す。

表 8-4 <面接ってどんなもの？と模索>分析ワークシートの抜粋

概念名	<面接ってどんなもの？と模索>
定義	[慣れない面接に戸惑いながら、手探りで臨むというクライアントの体験]
ヴァリエーション (具体例) の抜粋	<p>最初は、何を話していいか分からなかった(C1.7:1回目) 最初の頃、カウンセリングを受けている序盤の時って何か、話してるのがつたない、(中略)悩みながら、どう話したらいいのかなあっていう感じで、話してる感じ(C1.7:1回目)</p> <p>ちょっとだけ、えっと、っていうところがあったかなあって(中略)普段の友達同士の会話ならそんなつつこんだ話しはしないので(C1.8:1回目) もうちょっと詳しくっていう質問とかも、こう、詳しく、詳しく、詳しく、詳しく、ええとって(C1.8:1回目) 最初はちょっとこう何か、どういう風に話したらいいのかなあとか、ちょっと手探り的な感じ(C1.8:3回目にした1回目への言及)</p> <p>緊張してたかもしれないんですけど(笑)。そうですね、確か、カウンセリングの部屋の雰囲気にびっくりしていた気がします。隣の待合室のほうで、何か、ああ、病院みたいって感じで(C1.9:1回目) (カウンセラーが)予想外に明るくてびっくり、明るい方で、あ、明るい、元気みたい、その時の私は元気がなかったので、その何か、元気っていう感じに圧倒されてしまった(C1.9:1回目)</p> <p>私カウンセリングって何をやるのかよく分からなかったっていうのもある(C1.10:1回目) 話すといっても、起こったことを話すっていう感じじゃなくて、何を話していいか分からない(笑)(C1.10:1回目) 何かそうじゃないんだって言うのを、伝えたいんだけど、それが、うまく伝わってないなって言うのを感じました(C1.10 1回目)</p>
理論的メモ	<p>定義とはならなかった他の解釈案(抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 初回ゆえの戸惑い ・ 面接に対する事前のイメージとのギャップ ・ 面接構造の模索→C1 は面接構造という専門用語は知らず、それを模索しているつもりはないと思われる。C1の主観からは離れる命名。 ・ 面接のあり方を模索/探る ・ 話しつつ面接ってどんなもの？と模索 <p>疑問, アイデア, 反証例, 類似例 etc</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 面接に対する事前のイメージと実際とのギャップに戸惑うことも。 ・ C1の中に面接で話すこと/話さないことに関し、自分なりの縛りを設けている。それは、口には出されないため、Coとは共有されていない。→話の深まりを阻害する可能性もある。 <p>概念と概念の関係など何でも</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <面接ってどんなもの？と模索>という戸惑いは、日常生活と面接との比較を重ねる中で<オリジナルな面接観の形成>につながっていく。戸惑いながらも、話が進むのは、次の2つの理由。1、<面接と日常経験との比較>などを通し、話す意義に気づくため。2、<自分の話だけ聞いてくれる相手>であるカウンセラーの存在、聞いてもらえる体験に後押しされるため。

表 8-5 <面接と日常経験の比較>分析ワークシートの抜粋

概念名	<面接と日常経験との比較>
定義	[面接で話すことと、日常で話す／考えることを比較するというクライアントの行為]
ヴァリエーション (具体例) の抜粋	<p>これ（面接で話した内容）は、家族にも話せないですし、その、友達にも話せない（C1.7:2 回目）</p> <p>昨日も何か、友達と映画を見た後に、3、4人で何か、喫茶店で話したんですけど、絶対こういう（面接ではなすような）話にはなれ、ならないし、ああいう感じで、ああいう感じの自分、何て言うんですかね、カウンセリングを受けているときの自分を、彼らに、出さない（C1.7:3 回目）</p> <p>普段の友達同士の会話なら、そんな感じ、何となくみたいなの、ところでこう、お互い交わっている部分を、考える場なんだなって思って（C1.8:1 回目）</p> <p>普段なら、例えば最近眠いんだよねみたいなの友達とかにしたら、その流れとかで、普段の会話ではつっこまないように、お互いにこう、何かさらっと流すような会話と、（面接でのやりとりは）対比されるのかなあと思いました（C1.8:2 回目）</p> <p>部内の人に相談するのは楽なんですよね。言葉で。でも部内の人分、何でしょう、な、なれ合いすぎちゃってというか、やっぱり外の人にも話しを聞いて欲しい（C1.9:1 回目）</p> <p>部活って、こう、まあ見ようによっては遊びなので、（中略）そんな辛いんだったら辞めればって世界、とかだと、人によってはそういう捉え方もあると思うので、何か、（面接では）そういうのがなかったって感じ（C1.9:1 回目）</p> <p>私にとってすごくマイナスのことを伝えますって感じが、他の、初対面の他の人だったら、それはちょっと申し訳なくて、できないけど、（カウンセラーに対しては）いいんですかっていう感じ（C1.10:1 回目）</p> <p>すごく不思議なんですけど、親と同じ話しをしたときも、こういう風に（冷静に）は話せなくて、それはだから、でもやっぱり、不思議だなあと。（面接では）感情的になったりとかは、は、しない（中略）（親と話す）涙が止まらなくて（中略）でも、（面接では）そういうことが、絶対起こらない（C1.10:1 回目）</p> <p>友達とかでなまじ知っている人よりも話はしやすくって（C1.10:1 回目）</p>
理論的メモ	<p>定義とはならなかった他の解釈案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日常との違いの意識 ・ 日常生活との比較→何との比較か分からない ・ 面接と日常生活の比較→生活より経験の方が近い <p>疑問, アイデア, 反証例, 類似例 etc</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ この比較は面接間だけでなく、面接内でも行われる可能性もあるが、話しながらそこまで日常との違いを意識しているか？振り返ってのことかもしれない。 ・ 面接間と面接内を切り分けてインタビューをしていないため、区別の難しさがある。 <p>概念と概念の関係など何でも</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日常生活での比較が<オリジナルな面接観の形成>につながる。 ・ <オリジナルな面接観の形成>との違いは、まだこの段階では、特徴を掴みつつも、それを使いこなすまでに至っていない点。

第3節：結果と考察

3-1) 生成された概念とカテゴリ

分析の結果、最終的に10の概念が生成された。さらに概念を整理した結果、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》の4つのカテゴリが生成された。表8-6に、カテゴリを構成する概念とその定義、インタビューの具体例を示す。なお本文では、クライアントの発言を「」，筆者の補記を（） ，概念を<>，定義を[]，カテゴリを《》 ，コアカテゴリを【】で示す。

(1) 《話すことで何かを得る過程》

《話すことで得る何かを得る過程》は、<何とか伝えて得た気づき>・<カウンセラーと話しながら築く>という概念のまとまりであり、面接内において、クライアントの話が進展していくことを示すカテゴリである。

事例2 (C1.8) のクライアントは、院試に向けた勉強をしなければならないのに、やる気の出ないことを主訴としていた。このような状況は「考えたことはあっても、言葉にして人に伝えるっていうことはない (C1.8:1回目)」というものであった。そのため、「ちょっとだけ、焦ったり、えーっとなって (C1.8:1回目)」なりながら話すこととなった。その結果、クライアントは「こういう (睡眠リズムが乱れている) 状況が続いているのは、どういう意味があるのかなあと、1個気づいた (C1.8:1回目)」。

このように、[普段は言葉にしない／できないことを、カウンセラーを相手に何とか言葉にしようとするからこそクライアントが得る様々な気づき] が<何とか伝えて得た気づき>である。

面接での<何とか伝えて得た気づき>の積み重ねは、やがてクライアントの中に新たな変化が生まれることへとつながった。最後の3回目の面接でクライアントは「何か次の試験 (院試) は、やるのもやらないのも自分の自由だなんていうのがあって、で受けるとしたら、やっぱりそれなりの援助を周囲からもらうわけで、って思うと、何か、何か、相応に、やらせてもらってるんだなんていうのを、で、だから、嫌々ながらやるのは、周りに対して失礼なのかなって」と語っていた。このように、[カウンセラーと面接を重ねる中で、クライアントの中に新たな変化が生まれること] があ

った。これが、＜カウンセラーと話しながら築く＞である。以上からは、面接を通し《話すことで何かを得る過程》が読み取れた。

(2) 《面接の場だからこそその関係を認識する過程》

《面接の場だからこそその関係を認識する過程》は、＜自分の話だけを聞いてくれる相手＞・＜安心して話してもいい相手＞・＜普段はしない話を土台とする関係＞というクライアントの視点から見たカウンセラー像に関する概念から成る。治療関係に関する認識の進展を示すカテゴリである。

事例 4 (C1.10) でクライアントは、「自分がしゃべりたいように、すごくしゃべった (C1.10:2 回目)」。このような体験を通し、クライアントの中にカウンセラーのイメージが形成されていった。＜自分の話だけを聞いてくれる相手＞とは、[自分の話だけを聞いてもらうという経験から形成されるカウンセラーに関する肯定的な認知] である。

面接でカウンセラーに話を聞いてもらう体験を重ねることで、カウンセラーは「自分が話をしたい内容っていうのを知っている (C1.10:2 回目)」相手となった。＜安心して話してもいい相手＞とは [前提となる話を共有している感覚などが生む、カウンセラーへの親しみと安心感、信頼感] を示す。

クライアントは、このような関係を、日常の友達関係とは異なる関係であると認識していた。それは、「今一番悩んでたことで、その時すごく支配されてたコアみたいところを、一気にガッって話し続けたので、やっぱり、そう言うところから知っていく人間関係ってない (C1.10:3 回目)」 「カウンセラーさんのことは全然何にも知らないし、他の話をしたわけじゃないから、人間関係としてはすごく特殊 (C1.10:3 回目)」などのクライアントの発言に表れていた。＜普段はしない話を土台とする関係＞とは、[面接を重ねる中で、カウンセラーとの関係が面接の場に限られた特別なものであることを知るというクライアントの気づき] である。

このように、治療関係に関するクライアントの認識は、まず、カウンセラーが自分にとってどんな人物であるかという印象が形成されるところから始まる。それがやがて、二者の関係がどのようなものであるかという、メタ的な理解へと進展していくことが分かる。

(3) 《面接を自分なりに使えるようになる過程》

《面接を自分なりに使えるようになる過程》は、〈面接ってどんなもの？と模索〉・〈面接と日常経験との比較〉・〈オリジナルな面接観の形成〉という概念から成る。面接に関するクライアントなりの理解が形成されることを示すカテゴリである。

事例1 (C1.7) のクライアントは、「最初は、何を話していいか分からなかった (C1.7: 1 回目)」と面接を振り返った。〈面接ってどんなもの？と模索〉とは、「慣れない面接に手探りで臨むというクライアントの体験」である。

模索する中で、クライアントは、日常会話との比較を通し、少しずつ面接の特徴を理解していった。あるクライアントは「家族にも話せないですし、その、友達にも話せない。で他に自分の考えをまとめるとしたら、日記をつけるとか、でも別に日記はつけないし (笑)、そうすると、何か誰かに聞いてもらうとなると、こういう所 (面接) で話をするしかないんじゃないか (C1.7: 3 回目)」との気づきを得ていた。〈面接と日常経験との比較〉とは、このような「面接で話すことと、日常で話す／考えることとを比較する」というクライアントの行為」である。

日常との比較は、面接の場で話すことの意義を自分なりに見出すことにつながっていた。それは、「何かここ (面接の場) が、日常から隔絶されているからいいのかなあっていうのがあって (中略) こういう話を例えば友達にしたら、後々の関係のことを考えてしまうんですね (中略) 重い男だよねとか言われたらちょっと心外だなとか思いますし (C1.7: 3 回目)」 「多分自分の中でどっかで、ここ (面接の場) は、日常と違う空間にしようとか思ってると思うんですよ (C1.7: 3 回目)」といった、クライアントの発言から窺えた。〈オリジナルな面接観の形成〉とは、「面接を重ねることで形成されるクライアントなりの面接理解」である。

(4) 《面接間に変化の兆しが見れる過程》

《面接間に変化の兆しが見れる過程》は、〈面接に触発された動き〉と、〈面接じゃない要素〉の2つからなる。面接で〈何とか伝えて得た気づき〉は、クライアントの日常生活に影響を与えた。クライアントは面接間に、面接の内容を一旦咀嚼したり、面接を意識した行動をしたりしていた。このような「面接で話したことで、主訴にまつわる事柄に対する感度が高まる。その結果起きる面接間における心の動きや、実際の行動」

が、＜面接に触発された動き＞である。面接間に起きる＜面接に触発された動き＞は、変化の兆しと言える。ただし、変化は面接の影響のみによって引き起こされるのではなかった。〔面接間に起きる偶然の出来事や、時間の経過など、面接間のクライアントの変化を触発したり、強めたりする面接外の要因〕もある。これが、＜面接じゃない要素＞である。

事例3 (C1.9) で、クライアントは「メジャーでない」部活について、初対面のカウンセラーに伝える難しさを感じる。それでも言葉にすることで、部活に対し日頃自分がどんな思いを抱いているかに気づいた。そして、面接間に面接の内容を振り返り、自分がこれまで「あまりにも部活のことしか考えていなかった」と思い至る。そのことが、日常生活で「美味しいものを食べる」など部活以外のことも行ってみるなど＜面接に触発された動き＞へとつながった。ただし、クライアントの部活への認識を変えたのは、面接間の振り返りだけではなかった。クライアントは面接の中で、遅くまで部活で過ごした帰り道に、OBに偶然会ったエピソードを語った。それによると「(そのOBから)『まあ気楽に』って言われて、あ、気楽でいいんだ」と気づいたそうである。このように＜面接じゃない要素＞と＜面接に触発された動き＞の双方が、《面接間に変化の兆しが現れる過程》を押し進めていた。

表 8-6 概念とカテゴリ

《話すことで何かを得る過程》

概念名	定義	具体例	
		面接場面	CI の発言
＜何とか伝えて 得た気づき＞	[普段は言葉にしない／できないことを、カウンセラーを相手に何とか言葉にしようとするからこそクライアントが得る様々な気づき]	クライアントが複数の内定先から最終的に1社に絞るプロセスの中で、父親の助言を参考にしていたと話す。自分で決定したつもりでいたものの、そこには他の人も思いもあったのではないかと語る。	自分の中でどうやって言葉にしているのかという感じだったんだと思います。(中略)ここら辺で見つかった感じがしました。話しているうちに(中略)親父と話したことかが段々イメージで浮かんで(C1.7:1回目)
＜カウンセラーと 話しながら楽しく＞	[カウンセラーと面接を重ねる中で、クライアントの中に新たな変化が生まれること]	初回に寝ても寝た気がしないと話したクライアントが、このところ睡眠リズムが整ったと3回目で語る。それに対し、カウンセラーが変わりましたねと返す。	(カウンセラーに)言われてみればそうだなあって(C1.8:3回目)

《面接の場だからこそその関係を認識する過程》

概念名	定義	具体例	
		面接場面	CI の発言
＜自分の話だけを聞いてくれる相手＞	[自分の話だけを聞いてもらうという経験から形成されるカウンセラーに関する肯定的な認知]	クライアントが部活がどのぐらいしんどいのかを、部活の動作を交えながら具体的に説明し、体力的にも精神的にも疲れちゃうと語る。	カウンセラーの方はいるんですけど、あとはひたすら自分でしゃべっている気分です、ひたすら自分でしゃべっている(中略)(C1.9:1回目)
＜安心して話してもいい相手＞	[前提となる話を共有している感覚などが生む、カウンセラーへの親しみと安心感、信頼感]	1回目は院試を控えやる気が出ないことが主たる話であった。それに関連し、2回目冒頭に、受験生なのに文化祭の準備に時間を取られた高校時代の話が、クライアントから持ち出される。	初回の時にセラピストさんに話を聞いて頂いて、なんか、その親身になって、自分の話を理解してくれようとしているという姿勢が感じて、で、嬉しいなあとと思って、でもっと話してみようかなと(C1.8:2回目)
＜普段はしない話を土台とする関係＞	[面接を重ねる中で、カウンセラーとの関係が面接の場に限られた特殊なものであることを知るとクライアントの気づき]	3回目の最後に、主訴であったきょうだいとの関係が改善したこと、それにはカウンセリングが必要だったとクライアントが振り返る。	その時すごく支配されてたコアみたいなところを、一気にガッって話続けたので、やっぱり、そう言うところから知っていく人間関係ってない(中略)人間関係としてはすごく特殊(C1.10:3回目)

表 8-6 概念とカテゴリ（前頁より続き）

《面接を自分なりに使えるようになる過程》

概念名	定義	具体例	
		面接場面	CIの発言
<面接ってどんなもの？と模索>	[慣れない面接に手探りで臨むというクライアントの体験]	1回目の面接の冒頭、カウンセラーから少し緊張されていますかと尋ねられる。	カウンセリングの部屋の雰囲気にびっくりしていた気がします。隣の待合室のほうで、何か、ああ、病院みたいって感じで（C1.9：1回目）
<面接と日常経験との比較>	[面接で話すことと、日常で話す／考えることを比較するというクライアントの行為]	カウンセラーから、院試の勉強をやらなきゃという気持ちと、眠れないことが関係しそうですか？と質問を受ける。	（Coが問いかけをすることについて）普段の会話ではつままないように、お互いにこう、何かさざっと流すような会話と（面接でのやりとりは）対比されるのかなあと思いました（C1.8：2回目）
<オリジナルな面接観の形成>	[面接を重ねることで形成されるクライアントなりの面接理解]	生き方や家族のことについてクライアントが面接内で語る。	そうですね、いつも何かこう、考えなければいけないことなのかなあと思っていることを、こう後ろに後ろにのけて、のけているのを一旦引きずり出してきて、考える場（C1.7：3回目）

《面接間に変化の兆しが現れる過程》

概念名	定義	具体例	
		面接場面	CIの発言
<面接に触発された動き>	[面接で話したことで、主訴にまつわる事柄に対する感度が高まる。その結果起きる面接間における心の動きや、実際の行動]	カウンセラーから前回から1週間たってどうですかと話を振られ、クライアントがその間、食べたいものを食べたり買い物に行ったりして自分をいたわったと話す。	前回のカウンセリングが終わった後に、自分の部活のことしか話さなくて、そして部活のことしか考えてないことにビックリ（中略）、そのことを言っている感じ（C1.9：1回目後）
<面接じゃない要素>	[面接間に起きる偶然の出来事や、時間の経過など。面接間のクライアントの変化を触発したり、強めたりする面接外の要因]	先週、母親から電話があった頃はまだ辛かったけれど、兄と自然な感じになったと今の心境をクライアントが語る。	（カウンセリング）じゃない要素もあって、お土産の話とか、あと、母から電話があったとか、その、その夜に、その兄と話をしたこととか、っていうことが、色々重なって起こった（C1.10：2回目後）

3-2) 概念間の関係

得られたカテゴリ・概念について、まず概念間の関係について検討した。検討にあたり、面接回毎に、概念に関わる発言数を整理した（表 8-7）。また、面接回数の違いからくる体験の質の変化なども考慮した。

表 8-7 面接回毎の概念に関わる発言数

カテゴリ	概念	1 回目	面接間	2 回目	面接間	3 回目
《話すことで何かを得る過程》	＜何とか伝えて得た気づき＞	25		7		6
	＜カウンセラーと話しながら築く＞	0		12		12
《面接の場だからこそその関係を認識する過程》	＜自分の話だけを聞いてくれる相手＞	9		6		1
	＜安心して話してもいい相手＞	0		14		5
	＜普段はしない話を土台とする関係＞	0		4		12
《面接を自分なりに使えるようになる過程》	＜面接ってどんなもの？と模索＞	27		2		0
	＜面接と日常経験との比較＞	12		13		3
	＜オリジナルな面接観の形成＞	6		13		22
《面接間に変化の兆しが現れる過程》	＜面接に触発された動き＞		16		10	
	＜面接だけじゃない要素＞		3		3	

(注) 網掛けは、面接回毎に、同一カテゴリ内で比較した場合に、最も発言数の多い概念。

(1) 《話すことで何かを得る過程》に関する概念間の関係

《話すことで得る何かを得る過程》は、＜何とか伝えて得た気づき＞・＜カウンセラーと話しながら築く＞という概念から成る。表 8-7 から、1 回目の面接でクライアントはカウンセラーを相手に話すことにより＜何とか伝えて得た気づき＞を得る。その後、2 回、3 回と面接を重ねるなかで、＜カウンセラーと話しながら築く＞という体験が生まれることが窺える。例えば C1. 7 は 1 回目の面接で「自分の中でどうやって言葉にしているのか」と話すなかで、自分で決めていたと思っていた就職のどこかに父親の意見が関わっていたことに気づいた。そして 3 回目の面接で、就職し経済的に自立することが親との関係を新たにするという事に思い至り「これを解決することが、僕の中の、

目標なのかな」という結論に至っていた。この一連の流れからも＜何とか伝えて得た気づき＞の積み重ねが、何らかの変化を＜カウンセラーと話しながら築く＞ことへとつながっていることが分かる。

(2) 《面接の場だからこそその関係を認識する過程》に関する概念間の関係

《面接の場だからこそその関係を認識する過程》に関する概念には、＜自分の話だけを聞いてくれる相手＞・＜安心して話してもいい相手＞・＜普段はしない話を土台とする関係＞の3つがある。C1.9は1回目の面接では、緊張しつつも「カウンセラーの方はいるんですけど、あとはひたすら自分でしゃべっている気分」を体験する。そして続く2回目では、「話しやすかったので、それで、何か、気楽に」話ができる安心感を得る。そして3回目には「普段話す時でも冗談交じりでないと話せないような、ちょっと恥ずかしいこと」まで話せる様になっていた。このような変化は、表8-7の面接回ごとの概念数の変化からも窺える。1回目の面接では、初めての面接に緊張しつつ話し始める中で、クライアントはカウンセラーが＜自分の話だけを聞いてくれる相手＞であることを徐々に認識する。その結果、続く面接では、カウンセラーはクライアントにとって＜安心して話してもいい相手＞となる。安心して話し続けることは、やがてカウンセラーへの信頼につながり、＜普段はしない話を土台とする関係＞へと発展していった。

(3) 《面接を自分なりに使えるようになる過程》に関する概念間の関係

《面接を自分なりに使えるようになる過程》には、＜面接ってどんなもの？と模索＞・＜面接と日常経験との比較＞・＜オリジナルな面接観の形成＞という3つの概念がある。面接に関するクライアントなりの理解が形成されていくことを示すカテゴリである。初めての面接にクライアントは＜面接ってどんなもの？と模索＞する。戸惑いや不安を感じながらも、＜面接と日常経験との比較＞も行う。それは、＜オリジナルな面接観の形成＞へとつながる。その結果、面接当初の不安や戸惑いはなくなり、面接を自分なりに使いこなすようになっていた。例えば、C1.8のクライアントは、「最初はちょっとこう何か、どういう風に話したらいいのかなあとか、ちょっと手探り的な感じ」で面接が始まった。それでも話すなかで普段の友人の会話と比較し「普段だと友達にぼろっと言っちゃったら、あ、広まってるとか、結構そういうことを感じることも多かったけど、

この場はそういう点で守られている」という面接の場の特徴に気づく。そして最終的に自分なりの面接のイメージ〈オリジナルな面接観の形成〉をしていった。このような面接観が形成されると、クライアントは自分の主訴にまつわる問題を解決するために、能動的に面接を使うようになった。C1.8のクライアントの〈オリジナルな面接観の形成〉には、カンセリングとは「双方向的」で「周知的、一見関係なさそうなことでも、話すとこういう（話がつながるといふ）意義がある」というものもあった。そのため、カウンセラーからの「普段だったら聞かれないような質問」にも、自分なりに考えを巡らしていた。このように、クライアントは独自の面接観を形成し、その面接観に基づき、カンセリングを自分の問題理解や解決にうまく利用しようと主体的に面接に臨むようになっていた。これが、《面接を自分なりに使えるようになる過程》である。C1.8は「（カウンセラーから、大学院受験と眠れないことは）関係しますかねって聞かれて、どうかなあって考えて、あ、関係してるじゃん！」という気づきを2回目の面接で得る。そして3回目の面接で「次の試験は、やるのもやらないのも自分の自由（中略）それなりの援助を周囲からもらうわけで、（中略）嫌々ながらやるのは、周りに対して失礼」「それなりに何とかやっていければいいんじゃないっていう姿勢がふさわしいのかな」と思うに至っていた。この発言からは、《面接を自分なりに使えるようになる過程》を通し、クライアントが、当初の主訴（大学院を希望するも勉強が手につかず睡眠も乱れがち）を肯定的な形で捉え直すことが窺えた。

（4）《面接間に変化の兆しが現れる過程》に関する概念間の関係

《面接間に変化の兆しが現れる過程》は、〈面接に触発された動き〉と、〈面接じゃない要素〉の2つからなる。C1.10は、1回目のカウンセリングの後に、クライアントと兄との仲を心配する母親からの電話を受けた。それについて「親から電話がかかってきたときに、1回目のカウンセリングがなかったら、多分また状況が違った（中略）自分の感情の方に、その、偏る必要が、偏らないですんだ」と振り返る。そして「カウンセリングがあったっていうのも、すごい必要だったと思う」と語った。これがクライアントにとって、面接内で話したことの影響を受けた心の動き、すなわち〈面接に触発された動き〉であった。しかし、事態が「好転」したのは、カウンセリングの影響だけではなかったとクライアントは捉えていた。「あと、時間が、その、こういうことを考えるまで、経っ

てた（中略），（母親からの電話が）すごいタイミングが良くて（中略）1回目と2回目の間にあってよかったなってすごい思う」とも考えていた。これが＜面接じゃない要素＞である。ここからは、＜面接に触発された動き＞と＜面接じゃない要素＞は、上記の他の概念のように時間的に前後する関係ではなく、「両方」が《面接間に変化の兆しが現れる過程》を押し進めることが窺えた。

3-3) カテゴリ間の関係

概念間の関係に続いて、カテゴリ間の関係について検討した。M-GTAにおいて、カテゴリの関係をもとめるにあたり重要となるのが、この分析が明らかにしつつあるのはどのようなプロセスなのかという点である（木下，2003）。つまり、単にカテゴリをまとめるだけでなく、カテゴリ相互の関係から何らかのプロセスを明らかにすることを目指す。このような観点から分析を行った。

まず、《話すことで何かを得る過程》と《面接の場だからこそその関係を認識する過程》との関係について述べる。《面接の場だからこそその関係を認識する過程》とは、治療関係が深まっていく過程である。その特徴は、単に親密になるのとは異なり、＜普段はしない話を土台とする関係＞である点にあった。それをクライアントは「カウンセラーさんのことは全然何にも知らないし、他の話をしたわけじゃないから、人間関係としてはすごく特殊（C1.10:3回目）」と感じていた。このような特殊な関係であるからこそ、普段であったら人にはしない話のできたのであろう。すなわち、話すことで、治療関係に関する認識が深まり、同時に治療関係に認識が深まることで、話が進展していた。

次に、《話すことで何かを得る過程》と《面接を自分なりに使えるようになる過程》の関係はどのようなものであろうか。クライアントは、日常と面接の比較を通しながら、自分なりに面接を使いこなすようになる。「日常から隔絶されている（C1.7:3回目）」面接の場で、「後々の関係のこと（C1.7:3回目）」を考えずに話せることは、クライアントの話を促していた。つまり、話すことで、クライアントは徐々に面接を使いこなすようになり、それが同時に、クライアントの話を促すこととなった。

このように、面接内では《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》が相互に作用し、クライアントの問題理解を進展させていた。続いて、面接内に関するカテゴリと面接間に

関するカテゴリ《面接間に変化の兆しが現れる過程》の関係について検討した。まず、《話すことで何かを得る過程》と《面接間に変化の兆しが現れる過程》の関係については、クライアントは面接後に「カウンセリングで、話した内容を、実際の行動をするときに、逆に考える（C1.10:2回目後）」ようになっていた。そして、兄にお土産を渡すよう促す母親からの電話という偶然の要素も加わって、渡すという行動を起こした。この一連の流れからは、面接内で得た気づきが面接内で留まらないことが分かる。それは、面接内での認識の変化が、面接間での主訴にまつわる出来事に対する感度を高めていたからではないだろうか。その結果、＜面接内に影響された行動＞が喚起された。また、＜面接じゃない要素＞を偶然で終わらせず変化へと結びつけることもあったのではないかと思われる。このように面接内は面接間に影響を与えていた。一方、面接間も次の面接へと影響を与えていた。C1.10のクライアントは「（お土産を）渡すときに、渡したら多分、次のカウンセリングで渡したって言うんだらうなって思いました（笑）。で、渡せなかったら、渡せませんって言うんだらうな」と振り返っていた。次に、《面接の場だからこそその関係を認識する過程》と《面接間に変化の兆しが現れる過程》の関係については、研究3のインタビューにあったように、面接で話す前からカウンセラーが面接間に起きた変化を知っていると思ひ込むほど、クライアントは面接間においてもカウンセラーを意識していた。ここからは面接内での関係深化が面接間にも持続し、面接間にカウンセラーを想起することが面接内での関係を深める相互作用が窺える。そして、《面接を自分なりに使えるようになる過程》と《面接間に変化の兆しが現れる過程》の関係については、クライアントは1回目の面接で、「（面接では）感情的になったりとかは、は、しない（中略）（親と話す）涙が止まらなくて（中略）でも、（面接では）そういうことが、絶対起こらない（C1.10:1回目）」という体験をする（研究3より）。そのような経験が、母親とであっても兄とのことを冷静に話すという選択肢をクライアントに想起させたのだろうか、面接間にかかってきた母親の電話に冷静に対処できることへとつながった。結果としては、母親との考えの違いは埋まらなかった。そのような面接間の体験は、クライアントに日常生活と面接は異なるものであることを意識させた。それが、面接の場は普段の会話とは違い「私にとってこれがいいんだっていうのを説明できる（研究3インタビューより）」自由な話し合いの場であるという＜オリジナルな面接観の形成＞へとつながった。

以上のように面接内において，《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこの関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》には相乗効果があった。また、それらは，《面接間に変化の兆しが現れる過程》との間でも相互に影響を与えていた。面接内と面接間は互いに影響を与えあっていた。その積み重ねが、やがて日常生活の変化へとつながっていった。カテゴリ間の関係の分析から、面接内と面接間の相互作用と、それがクライアントにとっての肯定的変化へとつながるプロセスが示された。

3-4) 結果図

以上の概念間・カテゴリ間の関係を踏まえ、結果図を示す（図 8-1）。クライアントは面接当初、カウンセラー相手に苦勞しながらも話すことで＜何とか伝えて得た気づき＞を得る。その積み重ねがやがて、新しい変化を＜カウンセラーと話しながら築く＞ことへとつながっていた。これが《話すことで何かを得る過程である》

また、面接を重ねる中で、クライアントにとってカウンセラーは、＜自分の話だけを聞いてくれる相手＞から＜安心して話してもいい相手＞へと変化していく。そして、最終的にカウンセラーとの関係を＜普段はしない話を土台とする関係＞であると理解する。面接を重ねる中で、クライアントの治療関係に関する認識《面接の場だからこの関係を認識する過程》はこのように進展していった。

そして、クライアントの面接構造に関する理解も変わる。面接当初クライアントは＜面接ってどんなもの？と模索＞しながら＜面接と日常経験との比較＞を行う。それらを通し＜オリジナルな面接観の形成＞がなされる。すると、クライアントは自分なりの面接観にもとづいて、カウンセリングを自分の問題理解や解決にうまく利用しようと主体的に面接に臨むようになっていた。

このように、面接を積み重ねる中で、クライアントの話は深まり、治療関係の認識が変化し、治療構造の理解は進展した。また、上記 3-3) カテゴリ間の関係で示したが、それらは相互に高め合うように影響を与えていた。

そして、それらは、面接間での考えや行動に影響を与えていた。このような、面接内に影響された、行動や考えは、クライアントの気づきを深めた。また、時間の経過や偶然の出来事も、変化を促すとクライアントは感じていた。これが《面接間に変化の兆し

が現れる過程》である。面接間に起きた出来事は、クライアントによって続く面接に持ち込まれた。このようにして、面接内と面接間は互いに高め合うように働いた。そして面接を重ねるなかで、日常生活における変化の兆しが徐々に強まり、その結果、クライアントの日常は、何らかの肯定的な変化へと向かっていった。それは、「これを解決することが、僕の中の目標なのかな(C1.7)」、「言われてみればそうだ(以前と違う)なあって(C1.8)」、「今回のカウンセリングの、何かこう、収穫みたいなの(C1.9)」、「自分に無理がないように、話せばいいんだって思った(C1.10)」などの発言から読み取れた。そこで、4つのカテゴリをまとめ、コアカテゴリ【日常生活の変化へと向かうベクトル】とした(表8-7)。面接内において、クライアントはカウンセラーと話すことを通し、カウンセラーとの治療関係に関する認識を深め、また自分なりの面接構造の理解を形成した。それらは、クライアントの面接間のクライアントの行動や考えに影響を与えた。【日常生活の変化へと向かうベクトル】とは、その相互作用の結果として、クライアントの日常生活に、変化に向けた兆しが現れることを示すコアカテゴリである。

表 8-7 コアカテゴリ【日常生活の変化へと向かうベクトル】

定義	具体例	
	面接場面	それに対する CI の発言
[面接内において、治療関係が進展し、また面接構造の理解が深まる。その結果、気づきが生まれる。その気づきは面接間のクライアントの行動や考えに影響をもたらす。面接内の要素だけでなく、偶然や時間の経過など面接外の要素も影響を与える。このようにして起きた面接間での変化が続く面接に持ち込まれる。面接を重ねるなかで、面接内と面接間は互いに高め合うように働く。その結果として、日常生活での変化に向けた兆しが生じること]	就職し経済的に自立することで、親との新たな関係ができるのではという展望を語る。	3回目、(中略)あ、これが、これを解決することが、僕の中の、目標なのかな(C1.7:3回目)
	睡眠リズムが整う。はかどらなかつた受験勉強も、やるもやらぬも自分次第と思えるようになったと変化を語る。	(最後の回は)そう言えば変わったなあと気付くが多かったと思います(C1.8:3回目)
	面接を通じ、部活以外の活動が増える。カウンセラーの言葉で、その時間にも意味があると思えるようになる。	あれが得られて良かったなっていう、単純に今回のカウンセリングの、何かこう、収穫みたいなの(C1.9:3回目)
	長らく会話のなかったきょうだいと話ができるようになる。これからは適度な距離を保てばいいと気づく。	自分に無理がないように、話せばいいんだって思った(中略)気を遣わないで実行しようと思った(C1.10:3回目)

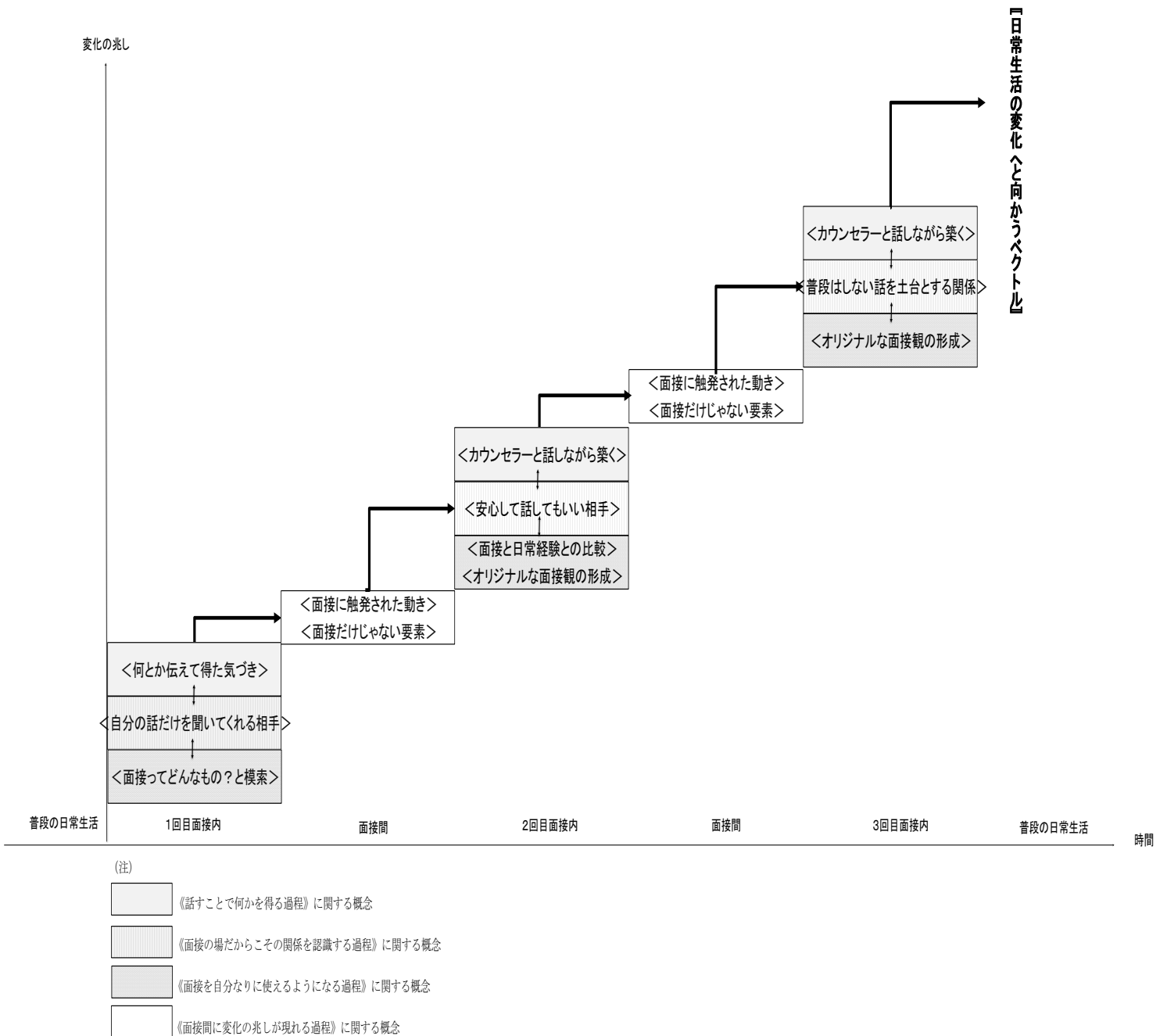


図 8-1 面接内と面接間におけるクライアントの主観的体験

第4節：総合考察

総合考察では、研究4で明らかになった面接内と面接間におけるクライアントの体験とそれらの相互作用について述べる。また研究4の意義をまとめる。

4-1) 面接内と面接間におけるクライアントの体験及びそれらの相互作用

クライアントにとって面接を受ける体験は、面接内と面接間が重なりあいながら、やがて日常生活での変化へとつながるであろう兆しが現れるというものであった。

《話すことで何かを得る過程》は、面接内でカウンセラーを相手に話すことにより、何らかの気づきを得るプロセスである。面接内で得た気づきが、〈面接に触発された動き〉を促す。また、そこに〈面接じゃない要素〉も加わる。それらが《面接間に変化の兆しが現れる過程》である。そしてこの過程が次の面接に影響を与える。このように面接内と面接間は相互に作用していた。先行研究では、「セッション外での整理」(Levitt et al., 2006) や、「面接以外の複数の試み」(Mackrill, 2007) 等の面接間の動きが、問題解決に向けて重要な役割を果たしていたことが指摘されている。これらは〈面接に触発された動き〉と類似の概念である。しかし、従来の研究では面接間での行動が、面接に影響を受けたものなのか、それとも面接とは無関係にクライアントがそもそも持ち合わせていたスキルによるものなのかが明らかでなかった。研究4は、面接内での変化が面接間での行動を生み、その動きが次の面接での話を進展させるという形で相互に高め合い、日常生活での変化に向けた話の進展を促すことを明らかにした。ここからは、カウンセラーに話すことで触発され、クライアントが自ら問題解決のために動き出すプロセスが示された。このような自発的に面接の内容を面接間に役立てようとする動きは、何らかの問題を抱えていれば当然のことなのかもしれない。しかし、実際の臨床では、カウンセラーが期待するようなく面接に触発された動き〉が起きず、面接が停滞することもある。この点は、臨床群との比較や、失敗事例の検討などにより、さらに心理面接における面接間の特徴を明らかにしていく必要があるだろう。

次に《面接の場だからこそその関係を認識する過程》においては、面接内と面接間はどのように関わっていただろうか。まずクライアントは、面接内でカウンセラーに話を聞いてもらう体験をする。それが、クライアントのカウンセラーに対する肯定的なイメージを形成した。そして、そのイメージは面接間にも維持され、面接間における出来事を

話す相手として内在化される。それはさらに、カウンセラーとの関係が面接の場に限定された特殊な関係であるとクライアントが認識することへとつながっていった。先行研究では、面接内／間におけるカウンセラーの内在化の程度が、治療効果と関連することが明らかにされている（Hartman et al., 2010）。しかし、そのプロセスは示されていない。研究4により、カウンセラーとの関係が、単なる親密なものではなく、普段はしない話を土台とした特殊なものであるとクライアントが気づく過程が、面接での話を促し、その結果、何らかの変化へと至るというプロセスを明らかにした。

そして、《面接を自分なりに使えるようになる過程》に関して、クライアントは面接と日常経験（面接間を含む）との比較を通し、心理面接という場を自分なりに理解していた。やがて、面接の場を使いこなすまでになっていた。この過程は、面接のイメージを自分なりに形成するという点では内在化と共通する。しかし、取り込むだけでなく、それをクライアントが能動的に使いこなすという点で相違する。その点では、小此木(1990)の示した「自然に形成される治療構造」と類似の概念であるため、それとの関連について整理する。小此木(1990)は、「どんな治療関係でも、治療者が意図しないにもかかわらず、いつの間にかその治療関係の中で永続的に存在し、それを患者と共有せざるを得ないような構造的な条件」「治療者・患者双方が半ば無意識的に、習慣的にそれに頼ったり、その枠組を心のよりどころにしたり、そこにさまざまな気持を投げかけたりするような条件」を「自然に形成される治療構造」と称した。本研究で得られた《面接を自分なりに使えるようになる過程》との概念的に重なる点と、相違する点は次の通りである。まず重なる点としては、カウンセラーの意図を越えて形成された条件ということである。相違する点としては、そのような条件がどのように形成され、かつ利用されるかについて示した点である。研究4から、クライアントは日常生活と面接とを比較することにより、徐々に条件を形成していくことが明らかになった。そして、クライアントは、ある一定時期から、その条件を無意識的でなく、意識的に心のよりどころとして利用するようになることも示された。そのように意識的に用いることが、クライアントの話を促すことにつながっていた。このように、研究4は、小此木(1990)が、カウンセラーの視点から提唱した「自然に形成される治療構造」を、クライアントの視点から裏付けた。そして、それがどのように形成され、なぜクライアントにとって重要であるかを示した。このように、治療構造には、場所や設備など動かない構造だけでなく、動く構

造(北山, 1990)としての側面がある。ゆえに, その構造は極めて曖昧である(大野, 1990)。面接が進むにつれ, クライエントは, 曖昧な中から, 自分なりの意味づけを見出すことが, 研究4で示された。また, この自然に形成される治療構造は, 日常の世界から治療の世界へ移行するための心的領域を形成するとされる(小此木, 2004)。すなわち, 橋渡しの機能(北山, 1990)を持つ。研究4から, この心的領域は面接と日常とを比較することで形成され, 面接と日常とをつなぐ役割を果たしていることが明らかになった。

以上をまとめると, カウンセラーを相手に話をすること, それに伴い治療関係が進展し, クライエントの中に独自の治療構造が形成されることが, クライエントの面接内での変化を促していた。また, それは面接間に影響を与えていた。そして面接間での出来事もまた, クライエントの変化を促していた。さらに, 面接間の出来事を持ち寄るようなクライエントの動きが, 次の面接内での新たな体験を引き起こした。このように面接内と面接間が折り重なり, 日常生活での変化へと向かう兆しが現れた。本研究では, 特別な技法や介入は行っていない。これら面接内と面接間をつなぐ動きはクライエントの主体的なものであった。クライエントの積極的関与やモチベーションは効果と関連する(Bohart et al., 1999)。先行研究の知見が本研究でも確認された。

4-2) 研究4の意義

研究4は, 試行カウンセリングを受けた非臨床群のクライエントの主観的体験を扱ったものである。カウンセラーも心理面接を訓練中の大学院生であった。よって, 得られた知見を一般化するには, さらなる研究が必要であろう。しかし, このような設定でありながらも, クライエントが何らかの変化を感じていたという点において, 一般の臨床にも活かせる示唆があると思われる。そこで, クライエントの変化について面接内と面接間の双方から考察する。

(1) 面接内プロセスと変化との関連

短期試行カウンセリングでは, クライエントの変容を促すための意図的な働きかけをカウンセラーは行わない設定とした。それにもかかわらず, 変化の兆しが見いだされたことには, 面接内における2つのプロセスが関与すると考えられる。第1は, 対人接触と自己内省の喚起という面接初期段階に一般的に生じるプロセスである。<何とか伝え

て得た気づき>からは、普段は言葉にしない／できないことを、何とか言葉にしようと内省を深めていたことが窺えた。そして、そこで重要であったのは、日記などで文字にしたためるのではなく、カウンセラーとの関わりの中で言葉にすることであった。カウンセラーの共感共鳴は援助過程を展開させる（Egan, 1990 鳴澤他訳 1998）。C1.8はカウンセラーの応答を「自分が話してきたことのほとんどの内容が、きゅっとまとめられて、そうっ！みたいな」と受け止めていた。だからこそ、「その中の内容から派生して、こういうこともあるんですって、つなげやすい」と感じていた。ここからは、カウンセラーの共感的な応答が、クライアントの自己内省のプロセスに弾みをつける様子が読み取れた。

第2が、傾聴によって形成された治療関係が、変化を喚起するプロセスである。Egan(1990 鳴澤他訳 1998)は、治療関係を、実行段階（目標達成のステージ）における変化を引き起こすための手段ではなく、全てのステージにおいて維持されるべきものであると述べている。そして、実行段階まで至らずとも、問題の明確化という最初のステージを経験するだけで十分なクライアントもいることを指摘する。その例として、カウンセラーに傾聴され理解されると、問題状況は変わらずとも、良くなったと感じるクライアントがいることを挙げている。例えば、C1.10の兄との仲は元通りになったわけではない。しかし、「自分にとって、今の状態がすごくいいものになった」と受け止めていた。そして、カウンセラーを相手に「私はこれでいいと思うんだっていうのを言えるのはすごく嬉しい」と感じていた。これは、カウンセラーに聴いてもらう体験を通し、状況の全てが変わらずとも問題はないと捉え直すクライアントの変化であった。もちろん、クライアント自身が行動を起こし、兄にお土産を渡したことなども、心境の変化に大いに寄与したであろう。しかし、それだけではなく、クライアントとカウンセラーが関わること自体が治療的であり、変化を促す場合があることが、クライアントの視点からも裏づけられた。

この治療関係については、治療同盟尺度(WAI)によっても評定しているため、この点からも考察したい（図8-2）。

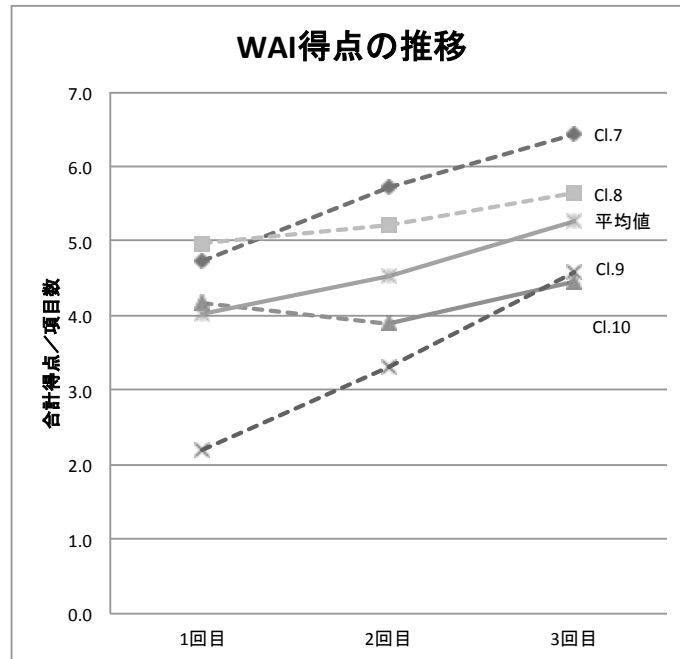


図 8-2 面接回ごとの治療同盟尺度(WAI)得点 (合計得点/項目数)

面接回毎の治療同盟尺度(WAI)の推移については次のような特徴があった。まず、C1.7 と C1.8 は面接を重ねるにつれ、値が増加した。このように C1.7 と C1.8 が安定的に治療関係を発展させていったのに対し、C1.9 は 2 回目で値が一旦低下した。また、C1.10 の 1 回目の値は、他のクライアントと比較し低い値であった。治療同盟尺度(WAI)に関する 2 名のフィードバックを踏まえながら考察すると、次のようなことが言える。まず、C1.9 は、点数の減少を「よく分からない」と前置きしつつも「部活のことを話終えて、もう一つ悩んでいるところまでいくのかっていうのも、途中までは決まっていなくて、そういう意味では何を話していいか分からない」からではないかと述べていた。しかし、3 回目に部活以外のことも話すことで、さらなる「解決の目処」を得た。そのような体験から「3 回目まで行って、2 回目と 3 回目のカウンセリングが、何か生きてきた」との気づきを得ていた。このようなクライアントの心の推移が、2 回目の治療同盟尺度(WAI)得点の減少と、3 回目の上昇への転換と関連していたと思われる。また、C1.10 については、1 回目は「(カウンセラーに) うまく伝わってない」という感じを抱いていた。このことが、得点にも現れていたと考えられる。しかし、2 回目以降の面接では、当初伝わらなかった体験を「説明しないのに、伝わらないなあって考えていた

から、（中略）、ズレがあるのは当然だと思う」と振り返っていた。このように C1.10 は、＜面接ってどんなもの？と模索＞し、自分なりに道筋を見いだした。そして、面接内で話すことにより、それを確認できたことが、得点の値の上昇にも反映されていた。研究 3 では、面接を重ねることの意義が指摘された。同様に、研究 4 においても、面接が継続され、それに伴い面接のあり方への認識が変わっていくことが、治療関係の深化だけでなく、修復にも貢献しうることが示唆された。

（2）面接内／面接間プロセスと変化との関連

以上のようなクライアントの変化は、面接内に留まらず、面接間の認知や行動に影響を与えた。そして面接間での変化は、面接内での新たな体験へとつながった。例えば、C1.9 は、1 回目の面接で話す中で、自分自身の部活へのとらわれに思い至った。それは単なる気づきに終わらず、面接間に部活以外のことをするという行動を促した。この時点では、クライアントは部活に対する気もちように関する変化については意識されていなかった。続く 2 回目の面接において、クライアントは面接間に買い物などをしたことをカウンセラーに報告する。それに対しカウンセラーは「何か変わった感じですか？」と尋ねた。その質問に答えることにより、部活に対し「気持ちが楽になった」ことがクライアントの中で初めて意識化された。このような面接内と面接間が相互に高め合うプロセスが【日常生活での変化へと向かうベクトル】を押し進める原動力となることが、研究 4 により明らかになった。なお、研究 4 で得られた知見は面接初期に関するものである。しかしながら、Perren ら（2009）は、面接内で得たスキルを、面接間においても用いることは、長期的効果につながることを明らかにしている。このような面接間の取り組みが、学習と行動変容を効果的に地固めするためである。よって、面接内と面接間の相乗効果を高めることは、面接初期だけでなく、長期的にも有効となる可能性がある。そのため、相乗効果を強める働きかけが、臨床実践において重要となると考えられる。本研究では、変化を促すような特別な介入は行わない設定としたが、臨床実践では目標を設定し、ホームワークなどの課題を課すことがある。それにより、次の 2 点のように効果を高めることが期待できる。第 1 に、＜面接に触発された動き＞を軸に、面接内と面接間との相乗効果がより強く、合目的なものとなる。第 2 に、【日常生活への変化へと向かうベクトル】は、目標に向け

明確な方向性を持つこととなる点である。ただし、実際の臨床実践においては、たとえばホームワークなどの課題を設定したとしても、必ずしも図 8-1 のような右肩上がりのプロセスを辿らないケースもある。臨床ケースなどの追加により、得られた結果図のさらなる検証が求められる。

第Ⅳ部 クライエントの主観的体験に焦点を当てた臨床事例研究 –面接 内と面接間の双方に焦点を当てて–

第Ⅳ部の目的と構成

研究4から、クライアントに何らかの肯定的変化が起こるために必要な要素として、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》という4つのカテゴリがあることが示唆された。ただし、これらの知見は、非臨床群を対象とした研究から得たものである。そこで、第Ⅳ部では臨床群を対象としたインタビュー調査を行うこととした。そして、臨床群においても、これら4つの概念が関連するのかどうかを検証することとした。第Ⅳ部は2つの章で構成されている。まず第9章（研究5）で、短期臨床事例を取り上げた。続く第10章（研究6）では長期臨床事例を取り上げた。長短2つの事例を取り上げることで、非臨床群で得られた知見の転用可能性の範囲を探ることとした。

第 9 章 短期臨床事例の検討 –原因不明の身体症状を抱えた女性の事例から– (研究 5)

第 1 節：問題と目的

1-1) はじめに

研究 4 により、面接を受けたクライアントの日常の中で、何らかの変化が生じるのは、次のようなプロセスであることが明らかになった。面接内で話すことで、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》は進展する。それらは《面接間に変化の兆しが現れる過程》に影響を与えた。面接間は面接内から影響を受けると同時に、次の面接内に影響を与えた。このように面接内と面接間が相互に影響を与える中で、やがて【日常生活の変化へと向かうベクトル】へとつながっていた。

1-2) 目的

第Ⅲ部までの研究は、非臨床群の大学生・大学院生を対象としたロールプレイ・試行カウンセリングに基づくものであった。しかし、臨床群と非臨床群とでは、健康度、話す問題の深刻度、面接に臨むモチベーションなど様々な点で違いがある。第Ⅰ部で述べた通り、本論文の目的は、クライアントの主観的体験を、面接内と面接間の双方から探索的に明らかにし、臨床実践における示唆を得ることである。そこで、第Ⅳ部では、2つの臨床事例を取り上げ、非臨床群で得られた知見が臨床群に適応可能かどうかを検証することを目的とした。

1-3) 取り上げた事例

事例の選択は、下記の条件で行った。

- ・ 終結ケースであること。
- ・ 終結後それほど時間が経過していないこと。
- ・ 事例全体を振り返り、言語化する能力があるクライアントであること。
- ・ 上記条件を満たしたうえで、研究同意が得られるクライアントであること。

上記の制約を満たした2事例を研究対象とした。まず研究5で面接期間が短期のものを取り上げた（以下、事例Aとする）。続く研究6で、長期のものを取り上げた（以下、事例Bとする）。事例Aはインタビューを含め5回で終結したケースである。第Ⅲ部の短期試行カウンセリングと比較を行うため、回数の近い事例を取り上げることとした。続く研究6では、約3年に渡る母子並行面接を行った事例Bを取り上げた。第Ⅰ部で述べた通り、本研究では面接初期に注目する重要性を踏まえ、研究1～研究5までは単発・短期の面接を扱ってきた。それは、面接初期がその後の過程をも予測しうる重要な段階であるためである。そこで、最後の研究6ではより長期で複雑な構造の事例を追加することで、面接初期を扱った研究から得られた知見の、転用可能性の範囲を探ることを目指した。

第2節：方法：インタビュー調査

第Ⅳ部では、上記目的に鑑み、臨床群を対象としたインタビュー調査を行うこととした。

2-1) 事例Aの協力者及びその概要

インタビューの協力者は、筆者が勤務する相談機関を利用したことのあるクライアントである。この相談機関は病院の付属のカウンセリング機関として発足し、現在は認知行動療法を中心とした心理療法を提供する独立機関である。協力依頼にあたっては、カウンセリングを受けた感想などをお伺いすることで、今後のカウンセリングに活かしたいという目的をお伝えした。目的を理解したうえ、協力に同意頂いた場合には、研究同意の任意性と撤回の自由、個人情報の保護の徹底、研究発表について説明し、書面にて了解を得た。

事例Aの協力者は、目のぼやけなど身体症状を主訴とした女性Aである。表9-1に協力者及びその事例について示す。

表 9-1 事例Aの協力者及びその概要

協力者	年齢（性別）	主訴	来談期間	面接回数※1	SDS※2
A	50代（女）	目のぼやけなどの身体症状	X+2年4月～ X+2年9月	5回	来談時：測定無 ↓ 終了後：39点

※1. 面接は1回60分。面接回数はインタビューを含む。

※2. うつ状態自己評価尺度(Self-rating Depression Scale)。20項目の質問からなる。一般臨床において50点以上でうつ傾向があると判断される。

2-2) インタビューの実施

(1) 事例の担当者及びインタビュアー

筆者は、事例Aをカウンセラーとして担当した。筆者は、ヒューマニスティック・アプローチを基本とした、統合的な臨床実践を行っている。来談当初から明確に認知行動療法の希望を持っていたAに対しては、共感的な態度をベースとしつつ、コラム法やアサーション・トレーニングなど、認知と行動に働きかけるアプローチを採用した。本研究に関わるインタビューも筆者が担当した。

(2) インタビューデータの収集と分析

インタビューデータの収集には、半構造化面接を採用した。インタビューは面接を終結してから、約9ヶ月経過したX+3年6月に、都内の静かな個室で行った。時間は約60分であった。質問のポイントとしては、①話の深まり、②治療関係をどのように見ていたか、③面接とはどのようなものであると考えていたか、また、④面接内と面接間はどのように関わり合うのかなどであった。表9-2にインタビューガイドを示す。なお、インタビューの内容は録音し、逐語化した。

表 9-2 インタビューガイド

導入：面接を受けてみた感想を教えてください。

◆話の深まりについて

- ・ ○○さんをご相談されたかった内容は、どのように変化しましたか？
- ・ また、そのようは変化に影響を与えたものが、何かありますか。
- ・ 面接で話しづらいことはありましたか？
- ・ あるとすると、なぜですか？
- ・ 面接で話したことで、役にたったことはありますか？
- ・ あるとするとどんなことですか？
- ・ 面接で話しても役にたつたなかったことはありますか？
- ・ あるとするとどんなことですか？

◆治療関係について

- ・ カウンセラーの第一印象は？
- ・ 自分が思っていたカウンセラーのイメージと実際が異なることはありましたか？
- ・ あるとするとどんな違いですか？
- ・ 最初に抱いたカウンセラーへのイメージは変化しましたか？どのように変化しましたか？
- ・ 面接間にカウンセラーのことを思い出すことはありましたか？
- ・ それは、どんな時、どんな内容でしたか？
- ・ 普段、自分で考えることと、カウンセラーに話すこととの違いはありますか？
- ・ あるとするとどんな違いですか？
- ・ 家族や友人と話すことと、カウンセラーに話すことには違いがありますか？
- ・ ある場合、どんな違いですか？
- ・ 日常生活で、カウンセラーとの会話を想像することはありましたか？

◆面接構造について

- ・ 初回の面接で、不安や戸惑いを感じることはありましたか？
- ・ それは、どんな時、どんな内容でしたか？
- ・ 自分が思っていた面接へのイメージと実際が異なることはありましたか？
- ・ あった場合、どんな違いですか？
- ・ 日常生活と面接では何か違いがありますか？ある場合どんな違いですか？
- ・ あなたは面接をどのように役立てようと思いましたか？
- ・ 面接に関して、自分なりに決めていたルールみたいなものはありますか？
- ・ あるとするとどんな内容ですか？

◆面接内と面接間の相互作用について

- ・ 日常生活のかなで、面接で話したことを思い出すことはありましたか？
- ・ どんな時に思い出しましたか？
- ・ 面接で話したことを意識してとった行動はありましたか？
- ・ カウンセラーが提案したことで、日常生活で何か試してみたことはありますか？
- ・ 逆に試さなかったことはありますか？

締めくくり：これまでに伺ったこと以外に、思いつくことがあれば自由にお話ください。

第 3 節：事例 A の面接経過とインタビュー

研究 5 の目的の 1 つは、面接内と面接間がどのような相互に作用するかを、臨床事例を通して見ることである。そこで、面接経過をインタビューの情報とともに示す。面接内の内容については、カウンセラー（筆者）の作成した当時の面接記録に基づく。なお、クライアントの主観を尊重するため、インタビューにあたり面接記録をクライアントに提示することはしていない。インタビューは面接回別に行ったものではないが、筆者の方で、面接経過とインタビュー内容との整合性を勘案しながら、各回別に整理した。以下、クライアントの言葉は括弧なしで、カウンセラーの言葉を<>で示す。#で継続面接の回数を示す。なお、面接経過については、プライバシー保護のため、個性を損なわない範囲で、細部を調整した。

3-1) 事例 A の概要

表 9-3 事例 A の概要

クライアント	A さん, 50 代女性
家族構成	夫 (50 代, 会社員), 娘 (20 代, アルバイト)
来談経路	ホームページを見て来談
主 訴	昨年 6 月から不眠, 気分の浮き沈み, 疲れやすさ, 目のぼやけなど様々な体調不良がある。メンタルクリニックに通い安定剤, 入眠剤などを処方してもらった。今も不眠と, 疲れると目のぼやけがある。眼科では異常がないと言われている。もう少し回復したい。鬱なのか更年期なのか自律神経なのか分からない。全てが一緒に来た感じがする。(本人記入の申込書より抜粋)
診 断	抑うつ状態
処 方	ドグマチール (50) 1 錠/隔日

3-2) インタビューと面接経過

インタビューと面接経過を, 面接回ごとに分けて示す。まず, インテークについて, 面接記録とともに, インテーク前後のことに関するインタビューデータを提示する。続いて 1 回目面接と, 1 回目面接に関連する言及のあったインタビュー箇所を提示する。同様に, 2 回目面接から, 第 4 回面接 (最終回) までも, 面接記録と, インタビューデータを対比させつつ示す。ポイントとなるところに下線を引いた。

(1) 来談前～インテーク～インテーク後

(1) -1 インタビューと面接記録

インタビュー	面接記録
--------	------

来談前

行動認知療法 (= 認知行動療法: クライエントの言葉のまま) という言葉は知っていたけれど, 受けたことはなかったので, どういうのかなと思って, やってみたいなと思って, 先生のところへ申し込みました

素人ながらも, 自分の中で, こう, 不眠

というのは身体のことだなと思ってたからだと思います。ここ（面接）では、多分自分の、凝り固まった考えしちゃうとか、あの、すぐ、結構わりと、ネガティブに考えちゃうとかの方をお話をするところだなと、自分でも思ったところがある。

だから、多分、行ったからすぐに寝れるようになるとは思っていませんでした。でも、自分のそういう考え方のあれを、少し変えれば、これからの人生が、ちょっと違うのかなと思って、行ってみようと思いました。

待合室とかで、他の方をジロジロ見ているわけじゃないんですけど、（中略）いろんな年代の方がいらっしゃるんだなって、心の中で思っていました。

なんか、私よりもっと、本当に大変な、深刻な人もいらっしゃるんじゃないかなって思いながら見てました。

インタビュー（X+2年4月）

（表出：ショッキングピンクのコートに同系色のバッグ。はきはきテンポよく話す）

昨年6月から。ドクターショッキングみたいに、血液検査や、眼科、婦人科。いずれも異常なしと。それで心療内科に。色々調べると、目のぼやけも、うつの症状にあるみたいで。そういう風に調べて行く中で認知行動療法というのを知って、これは試してないなあと思って（来た）。以前よりは随分よくなったけど、元々は元気が取り柄。なかなか前の自分に戻らない。＜昨年の6月に何か？＞その前から体調が悪くて、更年期とか年齢的なものかなと思っていたところに、6月に義父の介護。体調が悪く、病院に行き、仕事にも行く。夫も娘も病院に行ってはくれるけど、自分が頼まなければ行かない。9月には体調が悪化し、仕事も1ヶ月休職。12月に義父が亡くなって、葬儀も出して、今はようやくといったところ。義父のことは好きだったけど、肩の荷が降りたとは思っている。義父が亡くなってから、ずっと取れなかった肩の痛みが良くなった。ただ、思ったよりも良くなる。今は、義父が残した大量の

ものを片付けなければならない。それを見ると嫌な気持ちに。介護の時もそうだけど、夫は基本的に私に任せっきり。自分の父親なのになぜと思ってしまう。そういう考え方は見直したい。＜溜めてしまっている＞結構言う方なんですけど、言い方がヘタで、溜めて、つい嫌な言い方をしてしまう。＜年齢的なものに伴う体調の変化に、介護という心理的ストレスが加わったことが、身体的不調に影響を与えているかもしれない。介護負担がなくなったにも関わらず、症状が維持されている背景には、①介護から看取りまでに至る過緊張の状態が維持されていること、②遺品整理などの残務を1人だけで担うことへの不満の2つがあるのではないのでしょうか。①に対してはリラクセーションを。また、②に対しては、考え方の見直しや、自分の思っていることを上手に伝えるトレーニングをやってみましょう＞

面接を受けてみて

女子校出身だからか、あんまり、男性に聞いてもらうというより、女性の先生でよかったなと思った。最初に希望はありますかと聞かれて、特にないと答えたけれど、まず一番に、ああ、女性の人でよかったなと（思った）。で、その先生が、おいくつかどうか分からないけれど、年齢的に、すごい幅（差）が、あれじゃないし、先生も、主婦の方ですよ、だから、ちょうど話ができるというか、分かっていただけじゃないかと思って。

先生がすごく、柔らかい印象で、こちらの話をよく聞いてくださった。

(1) -2 インタビューと面接記録の対比から読み取れること

クライアントは、来談する以前から身体的不調に悩まされていた。ドクターショッピングのように多くの病院を回り、何とか原因を特定しようとするも異常は見つからなかった。色々と自分なりに調べていく中で、認知行動療法にたどり着いての

来談となった。認知行動療法を試してみたいという意欲は、面接当時から語られていた。インタビューの発言からは、すでに来談前から、クライアントの中には、ある程度認知行動療法に対するイメージがあり、面接とはどんなものか戸惑うことはなかったことが分かる。クライアントは「不眠というのは身体のことだなと思ってたからだと思います。ここ（面接）では、多分自分の、凝り固まった考えしちゃうとか、あの、すぐ、結構わりと、ネガティブに考えちゃうとかの方をお話をするところ」という認識をもってインテークに臨んでいる。そして、待合室で面接が始まるのを待ちながら、他の来談者を見て、様々な想像を膨らませている。ここからは、＜面接ってどんなもの？と模索＞する段階が面接で話す前から始まっていることが窺える。一方、カウンセラーに対しては、面接に対する認識ほどには、具体的なイメージを抱かずに来談しているようであった。そして、実際にカウンセラーと対面するなかで、「女性の人でよかった」安心や、「こちらの話をよく聞いて」もらうという体験を通し、カウンセラーのイメージを形成していった。ここからは、インテークの段階から、＜自分の話をだけを聞いてくれる相手＞、＜安心して話してもいい相手＞という治療関係に関する認識が進展し始めたのが分かる。

(2) 1回目面接～1回目面接後

(2) -1 インタビューと面接記録

インタビュー

面接記録

#1 (X+2年5月)

（表出等：更年期症状からか、汗を書きながら話す）

＜その後体調は？＞相変わらず、めまいは。これもゆっくり、身体から治していくしかないかな。ただ、仕事、去年だったら2日連続出勤だと、できるかなって不安で。でも今月は、そんなこと思うことすらなくなった。家事も去年までは、やりたくない、面倒くさい。おじいちゃんのおかゆ作るだけで精一杯。でも、最近は、食事も買い物も行けるように。＜随分変化、どうして？＞多分、時間のゆとりができたから。おじいちゃんの話は好きだったけど、大変だった。

今、あえて不満をあげるとすると職場に不快を感じる人。パートなのに社員の仕事

を手伝ってアピールしている。なんで私があの人からそんな不快な思いをさせられなきゃいけないのって(憤り)。でも、(言わない)。それは相手のためではなく、自分が言ったことで、後から、あんなこと言わなきゃよかったと後悔したくないから。よくはっきり言うって言われるし、実際そういう面もあるけれど、実はあまり言わない方だと思う。(コラム法※を使い、苦手な相手への対処を一緒に考える。あの人のために作成することすら癪だけれどと言いながら記録を作成する)

面接を受けてみて

なんか、私の性格なのか、友達とかに話すのと同じ内容を、同じように先生(カウンセラー)に話したと思う。

本当に親しい人とかには、言っていることと、同じことを多分、言葉遣いとかは違うけれど(話している)。もっと(友人には)砕けて(笑)言ってる。

(ただし)素人の友達の場合は、言って、発散して(終わり)(中略)で、より先生の場合は、その発散するっていうよりは(笑)、専門家の方の、こういう時は、こういう風な考え方もあるんだよというのを言っていたきたいがために、話したみたいのはありました。

※コラム法：認知行動療法で用いられる手法の一つ。まずは、ストレスフルな状況において、浮かんだ感情や思考を記録表に書き出す。次に、その思考に関する根拠と反証を挙げる。根拠と反証の両方を付け合わせることを通し、自分の認知の傾向を知り、より適応的な思考を取れるよう目指すもの。

(2) -2 インタビューと面接記録の対比から読み取れること

1 回目の面接では、時間のゆとりが生まれたこともあり、クライアントの日常生活に変化が生じたことが語られた。つまり、<面接じゃない要素>が面接間の変化を起こしていた。仕事への不安が減り、家事への意欲も取り戻すようになっていた。その中

で、あえて挙げられたのが同僚への不快感であった。面接当時のカウンセラーは知らなかったが、話す内容は、面接の場限りの話しではなく、親しい友人にも語られるものだった。だからこそ、面接の時間をその同僚のために割くことを「癪」と感じていたのだろう。それでもあえてテーマとして挙げたのは、友人に話して「発散」するのとは違ったものを期待していたからであろう。カウンセラーに対しては、「専門家」としてのアドバイスを求めている。＜面接と日常経験との比較＞をしながら、＜オリジナルな面接観の形成＞をしている様子が窺えた。

(3) 2回目面接～2回目面接後

(3) -1 インタビューと面接記録

インタビュー

面接記録

#2 (X+2年6月)

(表出：体の緊張が取れリラックスした感じがある)

例の苦手な人との話。たまたま同じシフトになってしまって、嫌だけれど、そういうのを表には出さずに普通にふるまったら、相手も私とその人のことを好きではないことは知っているだろうけど、私が普通にふるまっているので、相手も普通に<それは上手>そうですね。

(同僚のことは落ち着いたが)娘に対して弱すぎる。部屋が片付いていなくて、いつも不愉快。でも、片づけてと言っても忙しいとか言われてしまう。もっと厳しく言ったり、上手にやるように仕向けたりとか、いろいろあるとは思いますが、私はそんな風にできない。私自身はまじめ。でも娘は学校から呼び出されたり、その度に動揺。今もちゃんとした仕事についていない。そういうのが溜まっていたんでしょうか。確かに合わない親子ってもちろんいると思うけれども、かけ離れたタイプ<ちょっと受け入れがたいところが>そうなのかもしれないですね。そういうのがずっと溜まっていて、6年ぐらい。そこに更年期やらおじいちゃんの介護やらが重なって。娘のことはもうふっきれていると思っていたけれど、どっかで封じ込めているのかな。<嫁、妻、母親といった役割に自分を縛り、多くの思いを仕方がないで封じ込めている。それが積もり積もって、今に至るのか

もしれない。実生活でも自分の気持ちを伝える練習をしてみましよう（アサーション・トレーニング※について心理教育）

面接間について

なんか、もし、隣の人がうるさかったら（どうする）とかそういう（アサーションを実生活で試す）状況は、そんなになかったかな。

実際には言う機会はないけれど、仕事上で何かあったときとか、こういう風にすればいいじゃないのかなとか（そういう時に、カウンセラーだったらこういうだろうと思出すことはあった）。

※アサーション・トレーニング：自分も他者も両方を大切にする適切な自己表現を身につけるためのトレーニング。

(3) -2 インタビューと面接記録の対比から読み取れること

2 回目の面接では、前回の面接を受け、同僚に対する接し方が変わったことが語られた。これは、1 回目のカウンセラーの介入（コラム法の導入）による＜面接に触発された動き＞の 1 つであろう。しかし、娘との間では、思ったことを言えない状態が続いていた。そこで、カウンセラーは適切な自己主張に関する心理教育を行い、実生活で試してもらおう提案をした。クライアントは提案には応じていた。しかし、日常生活で思い出すことはあるものの、実際に試すまでには至らなかった。つまり、面接内のアサーションについての心理教育は、面接間に思い起こすといった程度の影響はあったものの、自己主張をしようという動機づけを高めるまでにはいたらなかった。結果的に、自己主張に関する行動面における変化は面接経過を通して見ても起きなかったように思われる。＜面接に触発された動き＞が起きるためには、時に行動を誘発するようなく面接じゃない要素＞も必要なことが分かる。

(4) 3 回目面接～3 回目面接後

(4) -1 インタビューと面接記録

インタビュー

面接記録

#3 (X+2 年 7 月)

(表出：髪を切ってスッキリしている。
体全体が軽くなった印象)

7 月上旬に 2 年 3 ヶ月ぶりに旅行。1 泊
だけれど、去年だったら考えられないこ
と。もちろん、若い時のように動け回れ
るわけじゃないけれど、何かあったらど
うしようという不安はない。精神的な不
安はなくなって、あとは体力の方かなど。
ジムが近くにオープンしたので、始める
ことに。今回報告しようと思ったのはそ
の 2 つ

(アサーションに関しては) ちょうど昨
日、夫に洗濯物の取り込みたのんだら、
なぜだかジーンズだけ残っていて。あい
にく雨に。なんでそれだけ取り込まない
の！てつい。夫にも言われるけれど、瞬
間湯沸し器みたいに怒っちゃう。でも、
夫が謝っているのを見て、これじゃ、認
知行動療法の練習しているみたいじゃな
いって (怒りを収めて) 笑ってしまった。
<自分を引きで見ることができている>
そうですか、本当は怒らないぐらいにな
りたい<そこは悟りの境地。まずは、怒
りを抑えず表現、次は怒っても時間は短
くと段階を踏んでいけば>

(娘のことに話が転じ) もっといい子
が欲しかった。でも自分の娘は違った。
学校から呼び出しとかかかるタイミン
グが、ちょうど友達とカラオケとか、旅
行とかの最中。今回の旅行では、そうい
うことないようにねと釘をさしておいた。

(過去の呼び出しを題材にコラム法。根
拠と反証をつけあわせることで、気持
の変化を体感する。クライアントの希望で、
作成した記録表を持ち帰る。)

面接間について

(面接のことを思い出して) 最初から
ちゃんと (怒らずに) 言えたこともあり
ますし、どうしても自分の性格が出ちゃ
って、言っちゃったあとに、こういう風
に言えばよかったなとか、そういうのは、

はい、そういうのは同じぐらいありますね。家族とは。

うわっと言っちゃった後に（面接のことを）思い出すというか、そういうのはありました。

（面接を役立てたい）そういう気持は、もちろんありました。はい。でも、実際は（笑）、ちょっと言っちゃったりとか、役立ててみたいなという気持は大いにありました。

(4) -2 インタビューと面接記録の対比から読み取れること

3回目の面接は、日常生活に認知行動療法が浸透していることが分かる回であった。旅行に行けたこと、ジム通いを始めたことなどは、カウンセラーに報告する内容として意識されいたことが、面接中の発言から分かる。また、夫が洗濯物を一つだけ取り込み忘れるという日常生活の出来事に、面接での内容を想起していた。また、娘のことを題材に面接内で作成した記録表を自宅に持ち帰っていた。面接内と面接間の相互作用が生じていることがここから面接記録から分かる。そして、そのことは「うわっと言っちゃった後に（面接のことを）思い出すというか、そういうのはありました」「（面接を）役立ててみたいなという気持は大いにありました」といったインタビューの発言から裏付けられた。

(5) 4回目（最終回）面接～終結後

(5) -1 インタビューと面接記録

#4（最終回）（X+2年9月）

（表出：初回のショッキングピンクで統一された装いから、シックな色合いの服に。気落ちの落ち着きを感じる）

1年前の9月を振り返って、あの時と明確に違うということを夫と話した。夫からは元気になったのはよいこと。頑張りすぎずゆっくり行けばいいよと言ってもらった。<その言葉を聞いてどう思った？>
（思いを嘯みしめるように）そういう風に

思ってくれているんだなど。そういえば、大変な時にも散歩に誘ってくれたりしたなどか<ステキな夫婦>そんなもんじゃないですけど(笑)あと、食事をしているときに、ふと娘が、自分も21歳。そろそろ、ちゃんとした仕事につこうかなと。あ、こんなこと考えていたんだなって。<Aさんの変化が家族にも影響を与えたのでは>見えない何かがあるんでしょうね。おじいちゃんが亡くなった後、お布団や部屋の整理をしていたのを見ていたのかも<背中を見て>ガミガミ言うより行動したほうがいいですね。おじいちゃんの介護をした6月からの数ヶ月は、人生の中での戻りたくない時の1つ。でも、それがなければ、自分がいつもキリキリしていることに気付けなかった。それが自分の自律神経を乱していた<これからは?>平凡な日常を元気に過ごせればいいかなと思っている。娘のこともまだまだこれからだけど、見守ってあげればいいのかなど。<(面接の振り返りをしたうえで) Aさんの真摯な取り組みが現在の幸せな生活を生み出したと思います>

面接終了後

すごく依存していたわけではないから、それ(面接)がなくなったから、日常生活(に影響)がっていうのはないかな。

(それでも、面接を思い出す例として)やっぱり単純なことで、あ、イラッとしちゃったときに、あ、そうだこれは、ストレートにイラッとしたことにあれ(反応)しないで、そういう時ですかね、やっぱり一番思い出すのは。

家族にはそうだ(イライラすることもある)けれど、でも、起こった状況には、あ、こうでよかったと思うようにしようとしています。対人間だと、どうしても頭に来ちゃうから。例えば、どんなことって言われると、あ、そうだ、なんか、(面接終了後の1月に)その母が亡くなる、前の日に、(中略)、(仕事が)こんなに早く終わっ

たんだったら、この帰りに母の病院に寄ろうと思って、寄ったんですね。で、次の日に、危篤だからと、妹から電話があったんですね。妹は近くだから大丈夫だったけれど、私は間に合わなかったんです。だから、前の日に1時間早く終わってたから、行けたんですね。だから、その、起きた出来事に対して、あ、こうだから、こういう風にできてよかったとか、そういうのは思うようにしている。（中略）対人だとできないけれど、何か起きた出来事に対して、最初はあれっと思って、あ、こういう風だから、こういう風にできてよかったと思う、思えるというか。

(5) -2 インタビューから読み取れること

4回目は最終面接であった。1年前の自分の状態を、夫と共に振り返り、元気になったことを噛み締めていることが語られた。面接当初は、義父を看取った後も過緊張が続き、様々な自律神経症状を引き起こしていた。また、日頃から非協力的な家族への不満もあった。そのような状態から、平凡な日常を元気に過ごすまでに回復した。家族との関わりかたも変化した。これが、クライアントにとっての【日常生活の変化へと向かうベクトル】だろう。インタビューでは、面接後の出来事として、実母の死に目に会えないという悲しい体験を、それでも前日には会えたと肯定的に受け入れているエピソードが語られた。そこからは、面接の中で行ったコラム法による物事の多面的に捉える練習が、面接後も活かされている様子が窺えた。面接で得たスキルは、面接が終了した後もクライアントの生活の中で役立てられているようだった。

第4節：考察

研究5では、クライアントに肯定的な変化が訪れるにあたり、臨床群においても、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》が関連するのかどうかを検証することとした。インタビューや面接経過を踏まえながら、これら4点について、非臨床群との違いという観点から考察する。最後に、研究5の限界と課題について

述べる。

4-1) 《話すことで何かを得る過程》について

《話すことで何かを得る過程》は、面接内で〈何とか伝えて得た気づき〉が、やがて新しい変化を〈カウンセラーと話しながら築く〉ことにつながることを示す。

事例 A のクライアントは、義父の介護負担が増した 6 月頃から様々な身体不調に悩まされていた。義父を看取った後も、思ったような改善はみられなかった。ドクターショッピングを重ねたものの、原因にはたどり着かず、心療内科に通うこととなった。その最中に、認知行動療法を試してみようと思いたち翌年 4 月に来談した。身体不調を感じるようになってから、数ヶ月が経過しての来談である。その間、数々の病院を巡るなかで、何度も経緯を繰り返し話していただろう。そのため、非臨床群で見られたようなく何とか伝えて得た気づき〉の段階は越えていたように思われる。つまり、非臨床群のように、普段は言葉にしない／できないことを、何とか言葉にしようと面接中に苦戦することはなく、ある程度、面接前に問題は整理されていた。そして、クライアントは、自分だけで整理するのではできない気づきを求め、専門家のもとを訪れていた。「専門家の方の、こういう時は、こういう風な考え方もあるんだよというのを言っていただきたい」とクライアントは語っていた。そこからは、インテークの段階から既に問題解決に向け〈カウンセラーと話しながら築く〉ことを目指していたことが伝わってくる。このように、事例 A のクライアントは、非臨床群と異なり《話すことで何かを得る過程》が、来談前から進展していることが分かる。そして、何かを得ようとする動機づけも強い。これは、非臨床群が話すテーマが、日頃気にはなっているものの流せるレベルの問題であったのに対し、その時のクライアントの状況が、長らく身体の不調に悩まされ続けているという、より深刻なレベルのものであったという違いから来るものであるだろう。

4-2) 《面接の場だからこその関係を認識する過程》について

研究 4 から、面接内でカウンセラーに話を聞いてもらう体験が、クライアントのカウンセラーに対する肯定的なイメージを形成した。それはさらに面接の場における特別な関係を認識することへとつながることが示唆された。これが、《面接の場だからこその関係を認識する過程》である。事例 A のクライアントは、インテークにおいて「こちら

の話をよく聞いて」もらうという体験をする。これは、非臨床群が第1回面接において〈自分の話だけを聞いてくれる相手〉としてカウンセラーを認知したことと同様であろう。非臨床群と若干異なるのは、〈安心して話してもいい相手〉に関してである。これは、非臨床群では2回目以降になってから出て来た認識である。それに対し、事例Aでは、インテーク段階で既に、カウンセラーが女性であることや、年齢的に大きな差がないという理由から、「よかった」という安心感や、「分かっていただけじゃないか」という期待を寄せていた。また、〈普段はしない話を土台とする関係〉という関係の特殊性に関する言及が、臨床群のクライアントでは得られなかったのも違いである。これは、非臨床群に比べ、臨床群であるクライアントは、カウンセラーをより「専門家」として意識していたからではないかと思われる。その意識が働いたために、深い根拠はなかったものの、非臨床群と比較して早く、カウンセラーに対する信頼が形成されたのではないだろうか。また、カウンセラーを「専門家」とみなすがゆえに、関係の特殊性は、Aさんにとっては自明なものであった。そのことは、カウンセラーに話す内容が、普段友人とする話と同じであるものの、友人を「素人」と称していることから窺える。そのため、〈普段はしない話を土台とする関係〉に関する発言が得られなかったのではないかと考えられる。ではいつ頃から〈普段はしない話を土台とする関係〉となったのだろうか。1回目までは、クライアントにとってはそれほど重要な存在ではない同僚の話で終わった。それが、2回目に、長年クライアントにとって悩みの種となっていた娘の話となった。このような面接での話の深まりを踏まえると、この辺りが、〈普段はしない話を土台とする関係〉へと発展した時期ではないかと思われる。

4-3) 《面接を自分なりに使えるようになる過程》について

研究4では、クライアントは面接と日常経験との比較を通し、心理面接の場を自分なりに理解し、面接の場を使いこなすようになることが示唆された。それが、《面接を自分なりに使えるようになる過程》である。事例Aのクライアントにおいても、〈面接と日常経験の比較〉を通し、自分なりに面接を使う様子が見られた。クライアントの話は「友達とかに話すのと同じ内容」ではあった。しかし、話す目的は、「素人」の友達に対しては、「発散」であったのに対し、カウンセラーに対しては「専門家」としてのアドバイスを期待していた。非臨床群との違いは、事例Aのクライアントの場合、すでに

来談前から、ある程度の面接に対する事前知識があったことである。クライアントは「身体のこと」は病院、「凝り固まった考え」のことはカウンセリングと、使い分けるつもりで来談していた。また、待合室で他の来談者を見て、面接のイメージを膨らませていたのも、臨床群ならではである。ここからは＜面接ってどんなもの？と模索＞する段階が面接で話す前から始まり、ある程度＜オリジナルな面接観の形成＞がなされてから、クライアントがインテークに臨んでいることが伺えた。

4-4) 《面接間に変化の兆しが見れる過程》について

《面接間に変化の兆しが見れる過程》に関しては、面接における介入の有無が、非臨床群と臨床群の大きな違いである。研究4の短期試行カウンセリングでは、変化を意図した特別な介入を行わない設定とした。それに対し、研究5で取り上げた事例Aでは、認知行動療法をベースとした介入を行っている。ただし、インテークの際には、見立てと対応を伝えるに留め、具体的な介入を行わなかった。その結果、インテーク後の面接間では、＜面接じゃない要素＞による変化しか見られなかった。しかし、2回目以降面接内でコラム法を導入したり、アサーション・トレーニングの心理教育をしたりした。また、面接内の介入だけでなく、面接で話したことを日常生活で試してみるよう提案するなど、面接間への働きかけも積極的にカウンセラーは行った。クライアント側も、面接内で作成した記録表を自発的に持ち帰るなどして、カウンセラーの働きかけに応じていた。その結果、非臨床群と比べ、＜面接に触発された動き＞は、よりクライアントの問題解決に向け具体的な方向性を持っていたと考えられる。もちろん、日常生活で思い出すことはあるものの、実際に試すまでには至らなかったこともあった。しかし、「うわっと言っちゃった後に（面接のことを）思い出す」などの機会を通し、面接は日常生活に浸透していた。そして、それは面接終了後も生活に活かされていた。そのことが、実母の死に目に会えなかったことを肯定的に受け入れているというインタビューの語りから窺えた。

4-5) 事例Aの結果図

研究5では、非臨床群を対象とした研究4で得られた知見が臨床群でも見られるかを明らかにすることを目指した。その結果、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だけ

らこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが見れる過程》の4つの過程が事例Aでも見られることが明らかになった。そこで、研究4の図8-1で示した結果図をもとに、事例Aにおける面接内と面接間におけるクライアントの主観的体験を図9-1に示す。結果図で示される通り、上記4つのカテゴリが存在する点で、【日常生活の変化へと向かうベクトル】へと至る過程は同様である。ただし、概念の出現のタイミングは臨床群ならではの違いがある。時間を追って説明すると、まず、インテークの前から＜面接ってどんなもの？と模索＞することや＜何とか伝えて得た気づき＞は始まっていた。そして、カウンセラーを専門家とみなす意識が、インテークから既に＜安心して話てもいい相手＞という認識を生んでいた。また、カウンセラーが変化を意図した介入を行うことで、面接間での＜面接に触発された動き＞は、非臨床群と比較して、面接内からより強い影響を受けたものとなっていた。

変化の兆し

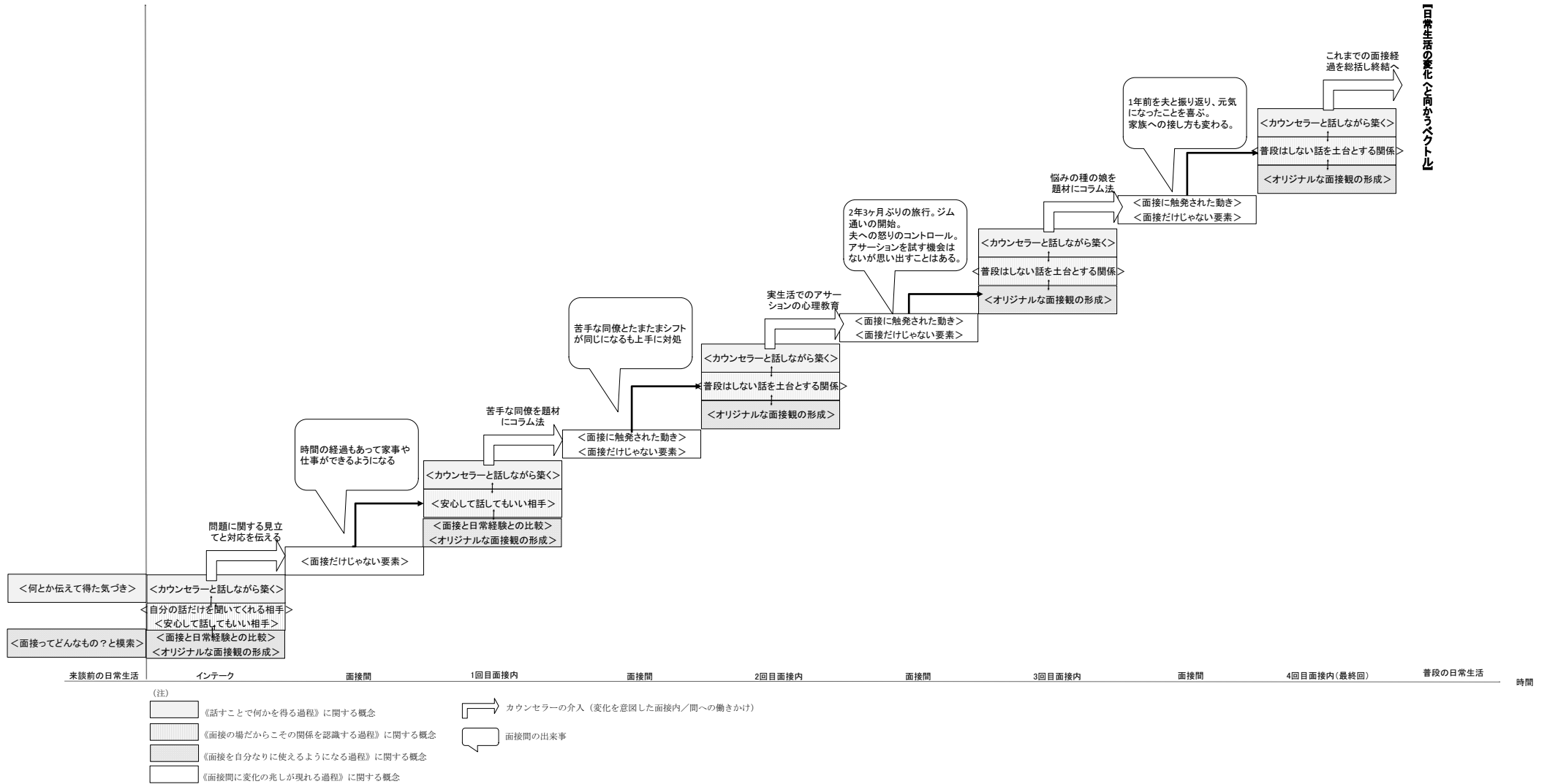


図 9-1 事例 A における面接内と面接間におけるクライアントの主観

4-6) 研究5のまとめと課題

ここまで、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》の4つについて、非臨床群と臨床群の違いという観点から、事例Aとクライアントのインタビューを考察してきた。非臨床群を対象とした研究4から得られた上記4つのカテゴリは、臨床群である研究5のクライアントにおいても同様に見ることができた。そして、4つの過程が進展するなかで、主訴にまつわる問題が変化する【日常生活の変化へと向かうベクトル】となることが明らかになった。さらに、臨床群においては次の4点が、問題解決の動きを加速させることも明らかになった。第1に、事例Aのクライアントの場合、初めて面接に訪れる前から、《話すことで何かを得る過程》に関し、問題の整理が行われていた点がある。第2に、病院や、友人など複数のサポート手段を持つ中で、面接をどのように役立てるかも、来談前からイメージされていた。つまり、来談前から《面接を自分なりに使えるようになる過程》は既に始まっていた点である。また第3に、カウンセラーの専門性に重きを置く姿勢が、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》の進展を促していたことも挙げられる。そして第4が、カウンセラーの介入と、面接を日常生活で役立てたいというクライアントの気持ちとが、＜面接に触発された動き＞を促進し、面接内と面接間の相乗効果を高めていた点である。これらの違いは、クライアントの問題解決を非臨床群と比べ、加速させたと思われる。

以上のように研究5はまとめられる。研究5の限界としては、次の3点が挙げられる。第1に、事例Aを担当したカウンセラーとインタビュアーは筆者であった。カウンセラーとインタビュアーが同一人物であることが、協力者であるクライアントの発言を肯定的なものに傾けた可能性もある。第2に、面接内容がカウンセラーの記録に基づくものであり、録画や録音などの生データがないことである。第3に、1事例による研究のため、これを非臨床群と臨床群の違いとして一般化できない点である。これらの限界を克服するために、今後の課題としては、研究のデータベースとして、数多くの面接データの蓄積すること、複数の研究者による合議などの対処が必要となるだろう。

第 10 章 長期臨床事例の検討 -不登校をきっかけに来談した事例から- (研究 6)

第 1 節：問題と目的

1-1) はじめに

研究 5 では、非臨床群を対象とした研究 4 から得られた知見が、臨床群であるクライアントにおいても同様に見られるかどうかを検証した。その結果、非臨床群と同様に《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》が、【日常生活の変化へと向かうベクトル】となり、問題解決へとつながっていくことが分かった。さらに、臨床群においては、次の 4 点が、問題解決の動きを加速させることも明らかになった。それは、①来談前から問題の整理が行われていた点、②面接をどのように役立てるかも来談前からイメージされていた点、③カウンセラーの専門性に重きを置く姿勢、④カウンセラーの介入とクライアントの動機づけの高さが、面接内と面接間の相乗効果を強める点である。

1-2) 目的

研究 5 では、以上のように臨床群のクライアントにおいても研究 4 で得られた知見が確認された。加えて、変化を促進させる要素があることも明らかになった。しかし、取り上げた事例は 1 事例であり、臨床群一般について言及するには限界がある。そこで、研究 6 では、新たに別の事例を追加することとした。取り上げた事例は、約 3 年に渡る母子並行面接を行ったケースである。より長期で複雑な構造の事例を追加することで、非臨床群で得られた知見の、転用可能性の範囲を探ることとした。

第 2 節：方法：インタビュー調査

2-1) 協力者及びその事例

研究 6 のインタビュー協力者は、研究 5 と同様に筆者が勤務する相談機関を利用したことのあるクライアントである。研究 5 と同様の手順を踏んで協力の同意を受けた。

事例 B の協力者は 2 名で、不登校を主訴とした 10 代の男子 B と、その保護者である。

保護者は厳密な意味では心理療法を必要とする臨床群ではないが、研究6におけるインタビューの対象者とした。その理由は次の通りである。保護者が面接に参加する目的は、クライアントの変化をサポートすることである。しかし、親としての変化が子どもに良い影響を与える場合があり、変化を期待される重要な関与者である。また、クライアント自身の変化を最もよく知る身近な第3者でもある。よって、インタビューの対象者としてふさわしいと考えたためである。表10-1に事例Bの協力者及びその概要について示す。

表 10-1 事例 B の協力者及びその概要

協力者	年齢（性別）	主訴	来談期間	面接回数※1	SDS※2
B	10代（男）	不登校	X年8月 ～ X+3年3月	88回	来談時：51点 ↓ 終了後：33点
B 母親	50代（女）	息子の不登校	X年8月 ～ X+3年2月	24回	

※1. Bの面接は、当初1回50分でスタート。X+1年4月より1回20分に変更。保護者の面接は1回50分。本人面接の88回には、保護者との合同面接7回、学校の先生との合同面接4回が含まれる。

※2. うつ状態自己評価尺度(Self-rating Depression Scale)。20項目の質問からなる。一般臨床において50点以上でうつ傾向があると判断される。

2-2) インタビューの実施

(1) 事例の担当者及びインタビュアー

研究5と同様に、事例Bについても筆者がカウンセラーとして母子双方を担当した。事例Bは、インテークでは不登校が主な相談内容だった。しかし、その背景に家族関係の問題があった。そのため、筆者は、ヒューマニスティック・アプローチを基本としつつ、家族療法的※な観点も取り入れた。また、インタビュアーも研究5と同様に筆者が担当した。

※不登校の問題をクライアント個人の問題と捉えるのではなく、家族全体の機能の問題として理解するアプローチ。

(2) インタビューデータの収集と分析

インタビューデータの収集には、半構造化面接を採用した。インタビューは、インタビューは面接を終結してから、約3ヶ月経過したX+3年6月に、相談機関の1室で行った。まず、Bの保護者に対しインタビューを行い、所要時間は約2時間であった。Bに対しては、保護者とは数日後に、同じく相談機関の1室で行った。所要時間は約1時間であった。主な質問項目は研究5と同様である。インタビューの内容は録音し、逐語化した。

第3節：事例Bの面接経過

事例Bは長期に渡るケースのため、まずは第3節にて面接経過を示す。続く第4節にて、この面接経過は、クライアント/母親にとってどのようなものであったかを、インタビューの結果にもとづきまとめる。その際のポイントは、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》の4点とした。面接経過はカウンセラー（筆者）の作成した面接記録に基づく。なお、内容については、プライバシー保護のため、個性を損なわない範囲で、細部を調整した。クライアントの言葉は括弧なしで、母親の言葉を「」、父親を『』で、カウンセラーの言葉を<>で示す。#で継続面接の回数を示す。回数の中には、（）内に、面接参加者を示す。例えば、本人面接は（本人）、保護者面接は（母親）などとする。

3-1) 事例 B の概要

表 10-2 事例 B の概要

クライアント	B 君, 10 代男子 (私立中学の 2 年生)
家族構成	父 (50 代, 会社員, 単身赴任), 母 (50 代), 姉 (20 代)
来談経路	ホームページを見て来談
主 訴	中 1 の夏休みの終わり頃, 宿題に追われ体調を崩す。その後学校を休みがちに。保健室登校をしながら 3 学期を終了。中 2 になり行事やテストにも出席したものの, 6 月の運動会を機に再び休むようになる。現在は, 父親と夏休みの宿題をしながら, 9 月登校を目指しているがうまくいっていない。(母親記入の申込書より抜粋)
診 断	パニック障害
処 方	メイラックス (1) 0.5 錠 / 1 日 1 回夕食後 ワイパックス (0.5) 1 錠 / 1 日 1 回朝食後 イリボー錠 (2.5) 1 錠 / 1 日 1 回朝食前 プリンペラン (5) 1 錠 / 1 日 1 回朝食前

3-2) 面接経過

以下に面接経過を示す。事例 B は 3 年に渡るケースであるため, 幾つかの期に分けて経過を示すこととする。事例を提示するにあたっての期の区切り方の 1 つの基準として「質的な転換点で区切る」(辻川ら, 2002)がある。ところで, 研究 5 では, 面接内でのクライアントの話に応じたカウンセラーの介入が, 面接内と面接間の相乗効果を高めることが示唆された。研究 6 でも同様に各回にも僅かずつでも変化があり, それらの積み重ねが, 大きな変化へとつながったと思われる。しかし, 事例 A のように 1 回毎に介入に応じ面接間での成果が得られたわけではない。簡単に結果のでない事例であったため, 同質の介入を繰り返すこととなった。そこで, 面接内での出来事に対するカウンセラーの主たる介入と, それに呼応した面接間における主要な出来事が, 質的に一貫している期間を一つのまとまりとした。そのまとまりを一期とし, 質的に転換する時点で区切った結果, 事例 B の展開は大きく 7 期に別れた(表 10-3)。第 1 期は, まずは家族に自分の気持ちを話せることを試す時期である。第 2 期は, 自分を主張できるようになったクライアントが, 父親に思いをぶつけ始める時期である。第 3 期は, 家庭内に滞った

エネルギーが社会への憤りに転じた時期である。第4期は、一時的に父親との対話が深まる時期である。第5期は、父親や姉と自分を切り離そうと葛藤する時期である。第6期は、父親や姉とは距離をおき前に進み出す時期である。最後の第7期は、フリースクールへの入学から、その後のフォローアップの時期である。

表 10-3 事例 B の期別の展開

		面接内での出来事とカウンセラーの主たる介入	面接間の主要な出来事
第1期	まずは家で自分の気持ちを話せるように試す時期 【インテーク(X年8月)～#12(X年11月)】	面接内：クライアントは、不登校の理由を姉のせいでは人に話しかけることができないためであると訴える。 カウンセラー：家で自分の気持ちを話してみるよう働きかける。	・姉に意思表示が徐々にできるようになる。 ・フリースクールへの転出を検討し始める。
第2期	父親に思いをぶつけ始める時期 【#13(X年11月)～#24(X年+1年3月)】	面接内：父親には一方的に自分の気持ちを押し付けるところがあるという気づきと不満が語られる。 カウンセラー：父親に自分の思いをぶつけることを支持する。	・クライアントの父親に対する関わり方が変わり、家族全体のパワーバランスにも影響を与える。 ・父・姉との関係は膠着している。
第3期	家庭内に滞ったエネルギーが社会への憤りに転じた時期 【#25(X+1年3月)～#33(X年+1年3月)】	面接内：クライアントが家では攻撃的な言葉で社会への憤りを表す。そのことへの懸念を母親が語る。 カウンセラー：行動範囲の拡大を提案する。	・家庭内で滞ったエネルギーがうまく発散されない。 ・行動範囲は拡大しない。 ・父・姉との関係は引き続き膠着している。
第4期	一時的に父親との対話が深まる時期 【#34(X+1年4月)～#54(X年+1年6月)】	面接内：クライアントは父親に自分の変化を知ってほしいという気持ちを語る。その一方、母親はクライアントと向き合うことへの疲れを見せる。 カウンセラー：来談頻度を増やす、1人での来談を提案する。	・父親との対話が一時的に増える。 ・母子分離の必要性が意識され始める。

		面接内での出来事とカウンセラーの主たる介入	面接間の主要な出来事
第5期	父親や姉と自分を切り離そうと葛藤する時期 【#55 (X+1年4月) ~ #75 (X年+2年1月)】	面接内：父や姉と縁を切りたいという思いをクライアントが繰り返し語る。 カウンセラー：家族の問題と自分を切り離す提案をする。	・父・姉と自分を切り離して前に進みたい思いと、父・姉に執着する思いとの間で葛藤する。
第6期	父親や姉とは距離をおき前に進み出す時期 【#76 (X+2年1月) ~ #92 (X年+2年3月)】	面接内：家の問題と自分のことを切り離しフリースクールに行く決意が語られる。 カウンセラー：父・姉と自分を切り離し前に進むことを支持する。	・父・姉に縁を切ると通告する。 ・フリースクールへの入学が決定する。
第7期	フリースクールへの入学から、その後のフォローアップの時期 【#93 (X+2年4月) ~ #112 (X年+3年3月) (終結)】	面接内：フリースクールでの登校の様子が語られる。 カウンセラー：フリースクールでの学校生活をサポートする。これまでの面接経過を振り返り終結へとつなげる。	・フリースクールへの登校を開始する。泊りがけのスクーリングにも参加できる。

(1) 第1期：まずは家で自分の気持ちを話せるように試す時期

(1) -1 第1期の面接経過

【インテーク (X年8月) ~ #12 (X年11月)】

【インテーク (X年8月)】

(表出等)

クライアント：目にかかるくらいの前髪を時折手でかき上げ話す。言葉少なくおとなしい印象。それでもカウンセラーの問いかけがあれば、しっかりと自分の考えを話せる。
母親：小柄でしっかりした体型。落ち着いた話ぶり。病理性はなく、親役割がしっかりとれそうな印象を受ける。

(内容)

<今、困っていることは？>人と関わるのが苦手。話しかけることができない。<どうして話しかけるのが苦手？>僕が小1とか小2の時に、お姉ちゃんに話しかけると、うるさい！と怒鳴られた。今、人に話しかけにくいのは、お姉ちゃんとのことがあるからだと思う。その頃のことを持ち出すと、私も中学受験で忙しかったから仕方ないと言う

だけ。詫びの言葉はない。お父さんに言っても理解してくれない。〈お姉ちゃんとの関係の中で、それ以外の人に対しても話しかけづらくなっちゃったと感じているんだね〉
 (頷く) 〈それでも、私を相手にしっかり説明してくれて、話す力があると感じたよ。今後はそれを学校でも発揮できるようにするにはどうしたらいいかここで一緒に考えてみるのはどう?〉 (本人の同意を得て面接を継続することとなった)

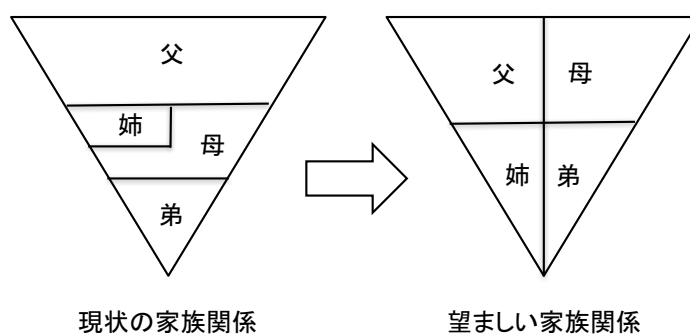
【#1 (X年9月) ~#12 (X年11月)】

#2 (本人) : お父さんが、お姉ちゃんのこと何も対応してくれないのに、学校には行け
 というのはおかしい。今、友だちと仲良くできないのはお姉ちゃんのせいなのにくそ
 したら、学校のことを考える前に、まずはお姉ちゃんに対して自分の気持ちを言えるよ
 うに練習してみる? > 言葉で言うのは難しい。自分の部屋の壁を蹴ることはできそう。

#3 (本人, 母親) : お姉ちゃん夜中の2時に携帯で電話。ドアをドンドンして、うるさ
 いから静かにしてと。スッキリとまではいかないけど、何もしないよりはいいと思った。

#4 (母親) 「姉にも心配なところ。以前、喧嘩をして、娘が家を飛び出した時に私にメ
 ール (見せて下さる)。お父さんは尊敬できるけれど、お母さんのことは馬鹿にしてい
 ると。これを見て凄くショック。言いたいことも言えなくなってしまった。そんな私の
 姉への態度を見て、息子は姉ばかり甘やかしてと思っている」

#11 (父親, 母親) : (父親は身体が大きく、押しの強いビジネスマンという印象。面
 接の最中にも携帯で仕事の指示) 『姉のことは、悪く言えば息子が学校に行かないこと
 の言い訳なんじゃないかと。以前は葛藤しているようだったが、今はそれすらない。恍
 惚の人って感じ。そうだろ (母親に同意を求める) 』 「うーん」 <どう? > 「私にはそ
 うは見えないですけど・・・」 『息子への対応どうしたら?』 <まずは、自分の気持ちを
 しっかり相手に伝えられるように。とっかかりとして、家族を相手に練習> (父親は仕
 事のため時間途中で退席。クライアントと母親に対し、下記のように家族の関係を示す)



<今日、ご家族お話を伺って、お母様が、ご主人の下にいるような関係に見えた。これまでのお話だと、お姉ちゃんにもお母さんを上から見るようなところも（現状の家族関係を図示する）。家族は対等であると同時に、役割としては適切な上下関係が必要。望ましい家族はこんな感じじゃないでしょうか（横に望ましい家族関係を図示する）>「本当にそうですね」

#12（本人）：学校については、進学とフリースクール（何らかの理由で学校に行けない子どもを対象とした民間の教育機関）への転出と両方考えるようになった。<メリット、デメリットは？>今の学校だとよく分かっている場所。でも友達関係、うまくやっていたら自信がない。フリースクールは一对一で勉強を教えてもらえるなどのメリット。ただ友達付き合いが少なくなるかも。<しっかり、自分の考えが話せている>

(1) -2 第1期のまとめ

クライアントは、来談時不登校の状態。その理由を姉のせいであると考えていた。姉の問題が解決しない限り学校には行かないとクライアントは決めていた。そこで、登校再開よりも先に、「人に話しかける」ということができることを目指すことにした。家族以外に人との接点がないため、姉を練習相手にしてもらった。その中で、クライアントは意思表示が徐々にできるようになってくる。フリースクールへの転出を考え始めたのも、このような流れに添ったものであろう。また、父親の来談から、家族のパワーバランスも、クライアントの状態に影響しているのではと思われた。第1期は、クライアントの問題をきっかけに、この家族の関係のあり方も明らかになってくる時期であった。

(2) 第2期：父親に思いをぶつけ始める時期

(2) -1 第2期の面接経過

【#13（X年11月）～#24（X年+1年3月）】

#13（本人）：お父さんには、自分の考えを押し付けるところがある。今回の誕生日も、赤いミニカーが欲しかったのに、お父さんはオレンジがいいと。でも、赤を押し通した。<どうして言えた？>自分の方が、ミニカーの知識があるし、自分の誕生日だし。<伝える練習を引き続きやってみて>学校はフリースクールを考えている。3者面談でも先生にそのことを伝えた。<すごい！自分できちんと決めて、考えを伝えられた>はい（嬉

しそう)

#15 (母親) : 「父親には以前から一方的なところがあって。中学受験も、息子の学力を考えず、こことここを受けさせろと。反対すると、最初から諦めてどうすると。そういう夫に私がずっと合わせてきたのもいけなかったと反省。それが息子に影響しているのかも」

#17 (本人) : フリースクールの候補先見つかった。お父さんにも理解してもらいたい。

#21 (本人, 母親) : 週末にお父さんが帰ってきていて、お母さんと僕と3人で話し合い。でも、どこかズレたまま終わった。お父さんが帰る日に僕に向かって、家の中の時間は止まっているけれど、外は動いているから注意しろよと捨て台詞を言い残していった。それがすごく頭にきた。それで、俺はお前を許さないとメール。<おお! 言った>以前から、そういう気持があったけれど、いい機会だと思って。きっと、その言葉にお父さんは反応するだろうと思っていたのに何もなかった。「メールを見た父親がすごく感情的になって、私(母親)に電話。(しばらく話すとトーンダウンして)父親失格かな? とか聞いてきた。いつでも相談に乗るよと主人に伝えて電話を切った」<お父さんは、B君と直接向き合うだけの強さがない。お母さんが介在役になる必要>

#22 (母親) : 「夫が週末に帰ってきて息子に謝る。でも、息子はなんで謝るのと。自室にこもってしまって食事も別」

(2) -2 第2期のまとめ

第2期は、姉との関係に目立った進展がないものの、父親との関係が変わってきた時期であった。父親には一方的に自分の考えを押し通す傾向があることに、クライアントも母親も気づき始める。そのような父親に対し、クライアントは、徐々に自分の考えを主張できるようになる。そんな息子に対し、父親はしっかりと向き合えず、母親に頼っていた。第2期は、クライアントの変化が、家族のパワーバランスに影響をもたらしたことを感じさせる時期であった。

(3) 第3期：家庭内に滞ったエネルギーが社会への憤りに転じた時期

(3) -1 第3期の面接経過

【#25 (X+1年3月) ~ #33 (X年+1年3月)】

#25（母親，担任の先生，養護の先生）：（この面接に先立ち，養護の先生よりお電話がある。先生は，あそこの家は，お母さんが B 君を抱え込んでいると懸念している）

（母親とカウンセラーの二人で学校訪問。クライアントも一緒の予定だったが，当日キャンセル。今後は学校にこだわらず，行動範囲の拡大をはかっていく方向で，参加者が同意する）

#26（本人）＜学校に行くのはまだハードルが高い。自分の好きなところから始めるのは？＞映画は，今はチケット買えないけど，お母さんの買うのを見れば，できるかもしれない。

#28（母親）：「最近 B は，10 代の子が巻き込まれるようなニュースを聞くと感情を高ぶらせる。スイッチが入るみたいで乱暴な言い方。なんて言ってもいいかわからない」

#30（本人）：＜お父さんの何が許せない？＞理解していないこと。＜お父さん手応えない。お父さんに向けていたエネルギーを外に向けては？フリースクールに行く前に外に慣れる練習。面接を週 1 から週 2 回に増やしてみるのはどう？時間は 20 分＞（B 君も同意）

#32（本人，母親）：外出，母親と一緒にだと恥ずかしい。＜4 月から 1 人で来てみる？＞はい。

#33（本人，母親）：（母親の希望で，本人面接の前に話をしたいとの希望）「これから 1 人で来るのは，この問題を解決することになるのか。主人は相変わらず理解がない，その程度の理解かと思うような言葉を聞くと不安に。周囲にも不登校は理解されない。甘やかしか言われてしまう」（母親の訴えの中心は，クライアントが 1 人で来談することではなく，夫や周囲の理解のなさにあることが分かる）

(3) -2 第 3 期のまとめ

第 3 期のクライアントは，面接中は比較的穏やかだったものの，家庭内では社会への憤りを，攻撃的な言葉で表すことが増えていた。母親はその対応に苦慮していた。攻撃性の高まりの背景には，回復に伴う気力の向上だけでなく，思春期という発達段階によるものも考えられた。父親は，クライアントのエネルギーを受け止める存在としては機能していなかった。このまま行くと，唯一の受け止め相手である母親に対し，

暴力という歪んだ形で表現されることも懸念された。第3期は家族内に淀みがちだったクライアントのエネルギーに対処する必要性が生じ始めた時期である。

(4) 第4期：一時的に父親との対話が深まる時期

(4) -1 第4期の面接経過

【#34 (X+1年4月) ~#54 (X年+1年6月)】

#34 (本人) : (今回から1人で来談) <大丈夫だった?> ちょっと不安だったけれど大丈夫。(その後の面接でも、何度か確認し、不安があれば対処法を伝授する)。お父さんと話した。自分は話したいけど、向こうが話しかけてこない。<以前は、話しかけられるの嫌だったけれど、今はなぜ?> 自分が変わったことを知って欲しい。<どんな風に?> うーん、自分の考えていること伝えられるようになった。<本当にそう思う?>

#44 (本人) : お父さん、勉強しろとか言わないようになった。その代わりに、自分の子どもの頃の話。中学で全部おもちゃ捨てられた話とか。<どう思った?> 厳しく育てられたから、子どもにもそういう育て方しかできないんだなって思った。<でも変わろうとしているのかも。50代の大人が子どもに歩みよることの重みは理解してあげて?>

#45 (母親) : 「このところ私、疲れている。Bには母親にくっつきたい気持と自分で対処したい気持、どちらもある。どうしたらよいか」<お母様には離れたくない思いがある?> (しどろもどろになりつつ) 「それはいいですね」<(まだ離れたくない気持を感じる) お母様にもB君と居ることへの迷いがある。少しB君と離れて、ご自分の息抜きの時間を持ってみては? B君も成長しつつある。いいタイミング> 「そうですね」

#54 (本人) : お父さんがドライブや食事に誘ってくる。<お父さんなりに変わろうと努力している。そのように変えたのはB君> (嬉しそうに頷く) 先に進みたいという気持、半分は自分のため、半分はお父さんのため<そうなんだね>

(4) -2 第4期のまとめ

第4期は、家族内に淀みがちだったクライアントのエネルギーの放出を図るため、面接回数を増やし、1人で来談してもらうこととした。この時期は、クライアントの中に、父親との対話を望む気持の高まりも見られた。変わった自分を知ってもらいたいという気持から来るものであった。父親の方も、息子に自分の子ども時代の話をする

など、歩み寄りを示していた。父親との関係が近づく一方、母親は息子の気持を受け止め続けることに疲れを感じていた。同時にまだ息子と離れたくない気持もあるようであった。第4期は、クライアントが成長してきたことから、母子分離の必要性も意識され始めた時期であった。

(5) 第5期：父親や姉と自分を切り離そうと葛藤する時期

(5) -1 第5期の面接経過

【#55 (X+1年4月) ~#75 (X年+2年1月)】

#55 (本人) : お姉ちゃんと縁を切りたい。一度話して、それから一生話さない。そうしたら居ても居ないのと同じに。<縁を切る前に、されて嫌だったこと伝えてみて>

#59 (本人) : 暇だと不安。つまんないし、寂しい。<気力が回復しつつあるからこそ>お姉ちゃんと縁を切っても(不安や寂しさが)変わらなかったらどうしよう。<お姉ちゃんとのことに区切りをつけたら、今の不安や寂しさはお姉ちゃんのせいにせずに、自分自身の問題として考えてみるのはいいかもしれない> (頷く)

#65 (母親) : 「Bは、自分の考えがしっかりしてきた分、父親に対して落胆しているように感じる。この2年間で差が父子に。父親は自分の意見だけ」

#68 (本人) 気分が良くない。疲れた。色々考えると体調が悪くなる。TVで戦争の話とか観ると、その人と同じような気持になってしまう。

#71 (本人) : 自分の進みたい方向、真逆な方向に2つ。世の中への怒りに向かう生き方。世の中を支配したい、お父さんみたいな人を取り締まり、罰したい。それとは別に、自分が幸せになれる生き方。フリースクールに行っている自分。<両者は対極にあるのではなく、B君だからこそ統合できるのでは?>良く分からない。<すでにお家は、成長したB君を受け入れるには不十分。外の世界も必要> (頷く)

#74 (本人) : (話したいことをメモしてくるように) お母さんと僕とで、お父さんと話した。お父さんが最後に「東京に戻ったら、家族のことを考えようと思っている」と。それに対して自分は「帰ったら絶対に考えるんだな」と。そしたら、お父さん、怒ってその場を離れた。痛いところをつかれて、追い詰められたからだと思う。<支配するか現実的でないことを考えるよりも、そうやって思いをぶつけるほうが、適切だと思う。ただ、お父さんも頑張っている。武士の情けもかけてあげて(笑)>はい(笑)。

(5) -2 第5期のまとめ

第5期に先立つ第4期では、父子が歩み寄りを見せた。しかし、それはクライアントが期待するほどではなかったと第5期にクライアントは感じる。落胆する中で、クライアントは父や姉を支配し罰したいという極端な思いにとらわれる。同時に、父や姉と自分のこととを切り離し前に進みたいという思いも出て来る。第5期は、クライアントにとって、父や姉へのとらわれの気持ちと、それを手放し前に進もうとする気持ちの間での葛藤の時期であった。

(6) 第6期：父親や姉とは距離をおき前に進み出す時期

(6) -1 第6期の面接経過

【#76 (X+2年1月) ~#92 (X年+2年3月)】

#83 (本人) : (年末最後の回) 4月以降はフリースクールに。家の問題は自分とは切り離していこうと。お父さんとの問題は、夫婦で話すとお母さんが言っていた。<来年はどんな年に?>自分の満足行く年にしたい。2年間で色々考えてきた。それを活かせるはず。

#84 (本人) : 年末に気付いたことが。お母さん、僕に依存しているところがあったのかなって。これまでは、僕とお母さんが夫婦みたいに、お父さんを良くしようと考えていた。でも、それは自分にとってメリットはない。自分の充実に専念した方がいいなと考えた。

#85 (母親) : 「夫、変わらない。過度な期待だったのかもしれない。いつしか息子を聞き役にしていた。それに気づいて、自分自身が(フリースクールの)親の会に入った。自分自身の気持ちを話す場として」<いいこと、B君の進学にもつながる>

#86 (本人) : お父さんと、お姉ちゃんに、縁を切るという話をした。だから話もしないと。なのに、普通に話しかけてくる。<二人のことは考えず自分のことを考えよう>

#87 (本人) : フリースクールの見学に行ってきた。自分の考えがまとまったところでタイミングよく進学。2年間かけて自分なりに考えてきたことが、今に結びついている。

#88 (母親) : 「フリースクールの見学に行った時、息子の様子違った。自分で行くと言い出し、面談中も自分で答えていた。私に助けを求めるようなこともなく。父親のことに関しても、自分と区別している。先日4人で話したあと、やれることはやったと。

あとはパパが考えること。自分が考えてもしょうがないと。家での様子も落ち着いている。自分の気持ちを相手に伝える、これは自分と息子の両方の課題だった。私も中学最後の保護者会で、思い切って近況を話した。周りからの反応もあり、足跡を残せた（感慨深げな様子）」

#90（本人、担任の先生）：担任の先生から、今は自分のことだけ考え、自分の人生を進んで欲しいとメッセージを貰う。それに対しB君は、自分の生きたいように生きると答える。カウンセラーからは、卒業式に出席しないB君にとって、よい卒業の場になったのではと感想を伝える。

#92（本人）：フリースクールの面接に合格した。＜不安は？＞電車に乗るの大丈夫かなと＜やりたいことは？＞友達と色々なことがしたい。まずは友達が欲しい。

(6) -2 第6期のまとめ

第6期に入り、クライアントは第5期での葛藤の状態から抜け出した。父や姉との問題を切り離し、進学に向け、本格的に前に進み始めた。また、母親との関係についても、「夫婦のようだった」という気づきを得たのもこの時期である。第6期は、家族関係が大きく変わり、前に進みだした時期である。

(7) 第7期：フリースクールへの入学から、その後のフォローアップの時期

(7) -1 第7期の面接経過

【#93（X+2年4月）～#112（X年+3年3月）（終結）】

#93（本人）：入学式を控えて不安はあるけれど、それほどでもない。家族とは引き続き縁を切りたいと思っている。でも、お母さんは切り離せない。お母さんを通してお姉ちゃんを感じる。最近、お姉ちゃんとお母さんの関係が近くなった。やめて欲しい。

#95（母親）：「フリースクールが始まった。知り合いがいない不安があるみたい。いつも今日は行こうかどうか、行く前に考え込んでしまう」＜考える前に行動したほうがいい。そのために、その日の気分で行く行かないを決めずに、固定スケジュールで＞

#96（本人）：週1のペースで行っている。行った時は、スタッフの人と話したりしている。まだ友達はできていない。友達がいないことを、自由時間とか、帰り道に感じる＜それでも気持ちが萎えずに、行き続けるためにはどうしたらいいかな？＞スタッフと話

すとか、部活やイベントに参加するとかくそれがお友達につながっていくといいね>

#97（母親）：「息子が授業に出席するのは、月1回のスクーリングだけ。保護者会でそのことを話すと、時間をかけて慣れていけばいいと。それを聞いて大丈夫だなと。保護者会は、自分の安心を息子に伝えることにもつながっている」

#99（本人）：授業に出席してみた。これからは毎週行こうと思っている。友達が欲しいから。そのためには行かないと。<行動できているのはどうして？>3年かけて考えてきた。そこで自分が成長してきたという自信があるから<本当にそうだね>

#100（母親）：「相変わらず寂しいなあ、つまらないなあとは言うけれど、ニュアンスは以前とは違う。前より暗くない。本人も、前向きに自分の状況を受け入れつつある。こうなってしまったというより、自分はこういうスタイルを選んで生きているという気持。7月には泊りがけのスクーリング。保護者が付き添うこともできるが、本人は1人で参加すると言っている」<おお、ドキドキします>

#102（母親）：「泊りがけのスクーリング参加できた」<中学のときと違う>「不安を口にしながらも、当日になって行かないということはなくなった。行ってダメなら考えようという気持になっている。随分成長した。私自身も、諦めずにできるところからやってきた」<本当にそうですね。その姿勢がB君と共有されたからこそその成長>

#103（本人）：泊りがけのスクーリング参加してきた。行く前は緊張。だけれど、スタッフの人とも仲良くなったし、フリースクールの雰囲気が分かって良かった。自由なところがいい。慣れてはいないけど、居辛くはない。<強くなったねえ>（はにかんだ笑顔）自分でもそう思う。1日1日しっかり生きることの強さ、自信に。

#104（本人）：9月から新学期。その前に、部屋を模様替え。小さい頃からそのまま。子どもっぽい。それを自分らしく落ち着いた感じに変えようと。親じゃなく自分が決める<内面の成長が部屋に象徴されている>（嬉しそう）何かしたいという意欲がある。

#105（母親）：「これまでと違って、家にいてもゲームばかりでない。部屋の模様替えを始めたので、そのための買い物に出るなど、今までよりも動けている」

#106（本人）：外に出るようになった。前はためらい。人に見られて、学生なのに学校行っていないと思われたらどうしようとか。でも、今は自信がついて行けるように。お姉ちゃんが一人暮らしを始めた。<どう？>家にしやすい。<前は消えて欲しいと。今は？>前ほど振り回されない。相手が変わるのを期待しない。変われる人、変わらない

人がいる<違いは？>自分の問題に気づいて向き合うかどうか。相手のせいにしない。

#109（母親）：「フリースクール、水曜のスタッフと話すのはいいけれど、スクーリングは面倒と言うように。足が重い」<2年近く、ほとんど家にしかいない生活から、フリースクールに。そろそろ疲れが出る頃。できる範囲でやればいと伝えてあげては>

#110（本人）：（1年を振り返り）今年は、大きな動きの年だった。フリースクールに入った。家の問題にもけじめをつけた。気持も落ち着いて、生活習慣も整った。そんな自分を見て安心。来年は、フリースクールの活動を増やしたい。行事やイベントにもっと参加して。場所を知る、人を知る機会を増やしたい。やりたいことを探したい。

#111（母親面接最終回）：（相談機関の移転に伴い、料金の改定。この辺りで終結という方向になる）「フリースクールは同じペースで行っている。まだ友達はいない。まだ自分をさらけ出せない。でも、苦しみつつも、その場に身を置き続けることができている」<お母さんとB君との間で、魂をぶつけるように話し合ってきたこと、そのおかげでここまできた。お母さんとしてきたような話を今度はお友達の間でできるよう願っています>

#112（本人面接最終回）<ここまでを振り返ってどう？>考えが変わった。中学校に行かなきゃいけないというところから、自分のペースでいいと思えるように。お父さんには理解してもらいたいけれど、自分は変わっても人は変えられない。お父さんが変わらないのは、お父さんが自分で自分のことを見ることができていないから。将来はまだ具体的にはないけれど、生活の中で見つけていければ。趣味を仕事にするのもいいし。ここまで考えてきたことを活かす仕事でもいい。カウンセリングに来て考えることの大切さを知った。

(7) -2 第7期のまとめ

第7期では、家の問題にもけじめをつけ、フリースクール通いが始まった。入学後の1年をフォローアップの期間とした。実際にフリースクールに入ってみると、すぐに友達ができるわけでもなく、寂しい思いもあったようである。それでも、その場に留まり続けるだけの強さがあり、あとは面接を離れても、クライアント自身でやっていけると思われた。そこで、フォローアップ1年を節目に事例Bは終結となった。

第4節：クライアント／母親の主観的体験から見た面接経過

上記のような面接経過は、クライアント／母親の視点から見てどのようなものであったのだろうか。本節では、インタビューの結果にもとづき、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》の4点からまとめる。インタビューは第1期～第7期別に行ったものではないが、筆者の方で、面接経過とインタビュー内容との整合性を勘案しながら、おおよその期別に整理した。「」はインタビューでの本人の発言、『』は母親の発言を示す。

4-1) 《話すことで何かを得る過程》について

《話すことで何かを得る過程》とは、〈何とか伝えて得た気づき〉・〈カウンセラーと話しながら築く〉という概念のまとまりであり、面接内において、クライアントの話が進展していくことを示すカテゴリである。事例Bは、不登校をきっかけに来談した。しかし、不登校の話はやがて、家族の問題へと移行していった。そして家族の問題に自分なりの解決を見出すこととなった。そのような経過の中、フリースクールへの進学という形で、不登校の問題は収束した。このような話の進展について、インタビューデータをもとに、本人／母親の視点から整理する。

(1) 本人

面接を始めた頃のクライアントは母親からみて、『初めのころは、本当にただ黙っている、ボソボソって言うだけ』で『つい代弁して言うてしまう』ような状態であった。それでも第1期には既に、学校に戻るのではなく、フリースクールへの転出を考えるようになる。面接は、「学校じゃなくてはいけないという考え方を、少しずつ変えていくというか、そういう感じで、ここ（面接）は関わっていた」そうである。それは、「（カウンセラーと）一緒に考えたりすることで、色々な意見と言うか、考え方が変わっていく」からであった。そのような中で、問題は家族のことへと移行する。そのことを「初めの学校どうしようというのは、あくまでも表面的なところで、家族の問題というのがやっぱり、問題の大事なところという感じがするので、そこの話になっていったのは、当然というか普通かな」と受け止めていた。このように、クライアントの語りからは、

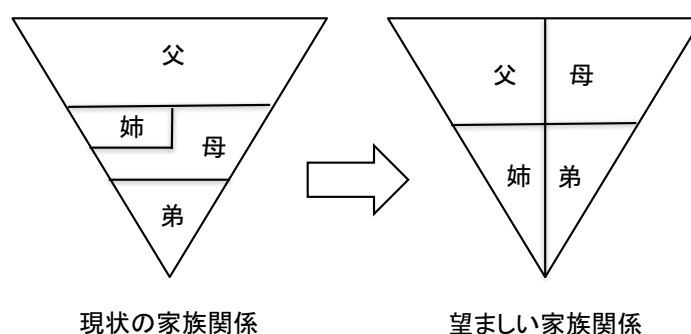
自分ひとりで考えるのではなく、カウンセラー相手に話すからこそ生まれる変化があることが読み取れた。ここからは、第1期において、＜何とか話して得た気づき＞を得て、＜カウンセラーと話しながら築く＞過程が始まっていたことが分かる。

しかし、第2期～第5期までは、父親や姉への憤りにとらわれる時期が続く。フリースクールについても、そのことがネックとなり、前へ進む決意がつかない。この時期に関するインタビューの語りはないが、ここでは、面接の中で、小さく何とか話して得た気づきや、＜カウンセラーと話しながら築く＞を積み重ねつつも、問題解決という点においては停滞していたのではないかと思われる。

それが第6期になり、「お父さんを変えたところで、結局、自分が変わるわけではないので、自分自身が変わる方に、考え方が変わった」という転機が来る。それは、「話していくなかで、少しずつ考え方というのが変わった」ためだそうである。そして「けじめをつけるという形で、（家族との問題は）終わった」。その結果、「自分のことを考える時間ができたということで、自分自身のしたいこととかを考えたりする」ようになった。そして、フリースクールへの入学が決まる。それが、クライアントにとっての【日常生活への変化へと向かうベクトル】であった。

(2) 母親

母親は、子どもの問題解決にあたっての協力者という位置づけで面接に参加した。しかし話していくなかで、子どもの問題としてではなく、自分自身の問題として、家族のことに取り組むように意識が変わっていった。そのきっかけとなったのは、第1期のクライアント、母親、父親を交えての#11の家族面接であった。そのときに、カウンセラーが示した家族関係の図（下記に再掲）を見て、『今のなってしまう状態を、何か客観的に気付かされ』、『こんなじゃいけない、子どもがいて、自分がここにいちや駄目なんだなど。もっと、自分がしっかりしなきゃなど』思うようになった。



そして、『主人に押され気味』で『優柔不断』な母親としての態度に、『子どもが、困惑したというか、どっちについていけばいいの?』となったことが、問題だったのではないかと考えるようになった。その結果、母親の中に『子どものこともそうですけど、半分以上は、自分がどうするかという、自分が今、どうするかという、テーマ』が生まれた。そして、『色々なやりとりを繰り返しながら、自分の姿勢をはっきりと伝えられるようになる段階が、初めの頃に比べると、自分の姿勢っていうものをきちんと、あの、一致はしなくても、自分の考えを相手（父親）にきちんと言うところに、今はなれた』というまでに変化をした。これが母親にとっての【日常生活への変化へと向かうベクトル】であった。この段階は第2期には見られていたのではないかと思われる。そのことは、#21で、クライアントから激しい口調のメールを受け感情的になる父親に、冷静に対応をしたエピソードから窺えた。もちろん、第2期以降も、クライアントの対応をめぐり『定期的に、自分自身の今の状況どうだろうかと、そういうのを考える』ことは続いていた。それでも、第1期には気づきを得て、第2期には既に父親に物申す存在へと母親は変化した。このような変化を促すきっかけとなったのは、家族関係を図にして提示したカウンセラーの積極技法（新たな観点の提供）であった。この点が、傾聴を基本とした非臨床群とカウンセラーの関わりとの違いである。時に積極技法を用いることが、《話すことで何かを得る過程を》促進することが、母親の変化から読み取れた。

4-2) 《面接の場だからこそその関係を認識する過程》について

《面接の場だからこそその関係を認識する過程》は、＜自分の話だけを聞いてくれる相手＞・＜安心して話してもいい相手＞・＜普段はしない話を土台とする関係＞というクライアントの視点から見たカウンセラー像に関する概念から成る。本人／母親はカウンセラーとの関係をどのように認識していたのか、インタビューからまとめる。

(1) 本人

クライアントにとって、インテークでのカウンセラーとの出会いは「やっぱり初めての人とかだと緊張する」体験であった。一方で、「しっかり聞いてくれるので、安心感というか、感じました」とも語っていた。そして面接を重ねるなかで「最初の頃の緊張みたいなのも、段々なくなってきて、まあ、話しても大丈夫かなって感じ」が生まれ

た。そこからは、第1期の段階で<自分の話だけを聞いてくれる相手>としてカウンセラーが認知されたことが窺える。しかし、十分には話しきれないこともあった。それは第3期に見られた社会への憤りである。このテーマについては、「これを言ったら、こう思われるんじゃないかみたいな、そういうのとかあって、なかなか言えなかった」「話しづらいことという感じなので、全部は話しきれなかった」とクライアントは振り返っている。つまり、この時期のカウンセラーはクライアントにとって完全には<安心して話してもいい相手>ではなかったのかもしれない。それでも、ようやく第5期になって、#68「TVで戦争の話を観ると、その人と同じような気持ちになってしまう」#71「世の中への怒りに向かう生き方」など話しづらいテーマも話せるようになってきた。それを、クライアントは「それも（以前はカウンセラーにどう思われるか不安で言えないようなことも）話したりしているうちに、段々言えるように」なると振り返っている。このように<普段はしない話を土台とする関係>へとなるには、約1年の時間を要した。人に話しかけることができないという主訴をもったクライアントにとって、自分のことを話すということは大変な作業であったであろう。「これを言ったら、こう思われるんじゃないか」という不安もあり、「深い」話をするには、それなりの時間が必要だった。その点が、非臨床群との違いであると思われる。それでも、面接を続けようと思った理由として「聞いてもらえるとというのが、あの、嬉しいというか、すごく良かった」ことをクライアントは挙げていた。そして面接を重ねるなかで「自分に自信がでてきた、これでいいんだって、改めて。ここで話すことで、これでいいんだって確認できた」と振り返っていた。聞いてもらい肯定されるという体験が、治療関係を形成するうえで大切である点は、非臨床群と同様である。しかし、非臨床群と比べ自己の問題を開示するかどうか慎重になっている臨床群のクライアントにとっては、より重要な意味を持つことが、クライアントの発言から窺えた。

(2) 母親

以上のようにクライアントは自己開示に慎重な部分があった。それに対し母親はインタビューで『ほっとした感じを得ていた』。その後の面接では『気がつけば色々なことをスーッと話していた』そうである。そして『思う存分話せるから、すごくそういう意味で自分が楽に』なる『唯一話せる場』と感じていた。ここからは、第1期の段階で、カ

ウンセラーは母親にとって<自分の話だけを聞いてくれる相手>であったことが窺える。当時の母親は『非難されたり，理解されないで，そんなのはって言われてもおかしくない状況』，『それでいいよって言ってくれる人がいないなか』にいた。そんな苦しい状況において，カウンセラーからだけは『今の状況下ではこれでいいのかっていう安心感を貰える』と感じていた。そのことは『いいんだこれでって，自分の状態を自分で肯定できる』ことへとつながっていた。このインタビューから分かるように，臨床群の置かれた状況は，非臨床群と比べ，周囲から理解されず，孤立したものである場合も多いだろう。そういう状況にあって，<安心して話してもいい相手>がいるということは，非臨床群以上に大きなものなのかもしれない。面接経過の何期からカウンセラーが母親にとって<安心して話してもいい相手>となり，<普段はしない話を土台とする関係>となったかは，インタビューからは明確にはならなかった。それでも，第1期から『気がつけば色々なことをスーッと話していた』とことや『唯一話せる』相手であったことを考えれば，早くからカウンセラーとのしっかりとした関係があったのではないかと想定できる。そして，そのような関係が母親の自己を肯定することにつながる大きな影響を持っていたことがインタビューから窺えた。

4-3) 《面接を自分なりに使えるようになる過程》について

《面接を自分なりに使えるようになる過程》は，<面接ってどんなもの？と模索>・<面接と日常経験との比較>・<オリジナルな面接観の形成>という概念から成る。面接構造に関するクライアントなりの理解が形成されることを示すカテゴリである。事例Bの特徴であり，これまで取り上げた非臨床群の試行カウンセリングや事例Aとの大きな違いともなっているのは，その面接構造の複雑さである。まず，面接形態としては，当初は母子合同面接から始まり，個別面接となっていく。その間に学校関係者を交えた面接も行われた。また，面接時間／頻度は，当初1回50分，週1回のペースでスタートした。それを，クライアントの外出機会を増やすという目的で，本人面接に関しては，1回20分，週2回のペースへと変更した。一方，母親面接に関しては，母子間の適切な距離を作るという目的で，月1回に頻度を減らした。フリースクールに入学してからは，フォローアップという位置づけで，本人，母親ともに，月1回の頻度の個別面接となった。また，面接形態や頻度とは別に，クライアントにとって大きな構造転換だった

のは、1人での来談である。ある時期までは、母親は、本人面接の際にも付き添い、クライアントの面接が終わるのを待合室で待っていた。しかし、頻度を増やすのを機に、1人で来ることとなった。

それでは、クライアント／母親は面接とはどのようなものであるとのイメージを持って来談し、このようなカウンセラーから与えられた面接構造の推移をどのように受け止めていただろうか。その点を中心にインタビューデータを読み解いた。

(1) 本人

母親は事前に面接とはどのような場であるかをクライアントに伝えてから面接に臨んでいた。母親は認知行動療法について事前に勉強をしており、『(認知行動療法を専門とする相談機関に)行ってみようと思うんだけどという話』はクライアントにしたうえでの来談だった。また、クライアント自身も、「(以前に)別のところ(相談機関)でやっていたというのもあったので、そんなに抵抗もなく」インテークを受けたそうである。このことから、事例Aと同様に、<面接ってどんなもの?と模索>する段階は面接前に完了していたものと思われる。

クライアント個人に関しては、「人に話しかけてくても話しかけられない」という主訴を抱えていた。日常生活において、話し相手として唯一機能していたのは母親であった。そのような状況を踏まえつつも、カウンセラーはインテーク時のクライアントのしっかりとした受け答えに手応えを感じ、第1期から、母子合同面接を併用しつつ、個別面接も導入することとした。そのことを、「お母さんに家で話していないこと、話しづらいことみたいなことも、外だと話せるというか、ま、秘密とかを守ってくれるということもあるので、そういうところで、話せる」「お母さんがいると言いつらい、恥ずかしかったりとかがあるので、自分的には、その一対一のほうが、話しやすい」と抵抗なく受け止めていた。人に話しかけることができないクライアントにとって、友達がいなかったということは繊細な問題であった。そして唯一の話し相手だった母親に対しても、「お母さん自身には友達がいるというか、まあ、学生の頃とかも、今も友達とかがいるので、やっぱり、あの、話しても、やっぱり、全部は理解してもらえない」と感じていた。そのため、友達がいなかったというテーマについては、家ではなく面接で話すという、面接の使い方がクライアントの中にできた。この点は、母親が『最初は不安だったでしょうね。その、自分の時間、自分が話さなきゃいけない』と個別面接への移行を心配し、『何を

話しているんだろうって気にはなっていた』と振り返っていたのとは対照的である。このように、クライアントの中には、第1期から＜面接ってどんなもの？と模索＞と戸惑うような段階はなく、＜面接と日常経験との比較＞し、＜オリジナルな面接観の形成＞がなされていたことが窺える。

それでは、第4期から始まった面接頻度の変更や、1人での来談はどのように受け止められていたのでしょうか。当時のクライアントは電車に乗ることに不安を抱えていた。母親によると当時のクライアントの状態は『周りで聞こえてくる話し声とか、そういうのがすごくしんどかった時期』であった。『子どもを叱っている親の声とか聞くのが嫌で、ヘッドホンとかで音楽を聞いて、あの、紛らわせたり』しなければ電車に乗れないほどであった。それでも、クライアントは頻度の変更を「まだフリースクールに行く前とかは、基本家の中にいたので、週1とか週2で行くというのは、あのちょうどいいペースになっていたの、そういう意味で外に出るといのに使っていた」と肯定的に受け止めていた。

以上のように、クライアントは、母親にも話せないことを話せる場として、面接を利用し、面接構造の転換に柔軟に適応していた。

(2) 母親

一方、母親は、面接をどのような場と捉えていただろうか。面接での話は母親にとって、子どもの問題にとどまらず、自分自身の問題へとつながっていった。その点で、面接は子どものための場であり、母親のための場でもあった。

子どものための場としては、前述の通り、母親は認知行動療法について事前に勉強をしておき、＜面接ってどんなもの？と模索＞する段階は来談前のものだった。面接が進むなかで、母子合同面接が、個別面接に移行したことについては、『親の前で、全て、全部言えるかという、なかなか、そういう風にはいかない部分もあつたりしたのかなって』想像し、『親ではなくて、きちんと、その話を聞いてもらえる場所』として面接の場を評価していた。

それでは、第4期から始まったクライアント1人での来談に関してはどう受け止めていただろう。開始当初は息子を1人で送り出すことに関しては、母親として不安を感じていた。それが次第に、1人で継続して面接に行っているという事実が、クライ

エントを励ます材料になっていった。『彼が自信がなかったりすると、あ、でも、行ってきてるよね』といった声掛けをしていたことから窺える。そして、母親と息子の間で面接は『他のことはなかなか新しいことを何かしてというのは難しくても（中略）一番ズーっと長く続けて来たことで、それに対して、ずっと頑張ってきたねという。そういう物』となった。そしてその自信を、『そこが土台にはあるかな。1人で通うように、なったことが、その先のフリースクールに行くことにもなったのかな』と評価していた。ここからは、1人で来るという治療構造に、行動力や行動範囲の拡大だけでなく、クライアントの自己肯定感を支えるという機能をも母親が付与してことが分かる。

子どもにとっての面接構造が以上のようなものであると母親は受けとめていた。それに対し、母親としては、また別の意味合いを面接構造に付与していた。当時母親は『普通の人で、話しても、同じこの状況がない人には、ああ、理解してもらえないだろう』『主人に話をしてても話を分かってもらえない』と感じていた。そのような孤独な状況において、母親は『子どもとガッツリ一緒に居ると苦しい』『自分の気持ちをどうしていいか分からない』と行き詰まりを感じていた。そして、『こういうところ（面接の場）以外だと（中略）自分を出すところがないというか、他にない』状況にあった。そのため、母親は面接の場を『自分の気持ちを出す場所がある（中略）結構苦しい時は（中略）話せるなって思っていたりとか、すごく、やっぱり大きな意味』があると感じていた。このように、＜面接と日常経験との比較＞をするなかで、母親は面接を唯一の『自分の気持ちを出す場所』として位置づけていた。それに加えて、母子間の距離を適切にするための機能も面接に見出していた。当時母親にとってクライアントは、自分のことを『一番理解してくれ』『つい甘えたくなる』相手でもあった。そのため『子どもにそういう自分の辛さが行きたくなっちゃう』こともあった。しかし、適切な距離を取ろうにも、母親は『家から出られない、（クライアント）1人おいてなかなか出られない』状態であった。それが、母子が別々に面接に来るようになることで、『家から出られる』『外の空気を吸う、そういう機会』を得ることとなる。そのことは、『親子でこうやってぎゅーっと煮詰まってしまうがち、そういうのが少し、温度を下げ』ることへとつながっていた。母子を分けた個別面接という面接構造には、クライアントの外出機会を増やすだけでなく、母子間の適切な距離をとるという意図がカウンセラー側にはあった。しかし、母親に対してはその目的は伝えていなかった。それは、母子間の近さを直面化するより

は、自然と離れていく形のほうが、母親にとって受け入れやすいと考えたためである。そのことを母親は「少しずつ一緒に始まったのが、ちょっとずつ、距離が、適度に、距離ができてきて(中略)じわーっと、段階踏んでなっていつているから、すごく自然に、こう今回の、初め一緒に来てというところから、最後に1人で来るの普通に、当たり前で」離れていったと感じていた。母子を分けることは、カウンセラーが意図して与えた治療構造であり、「自然に形成される治療構造」(小此木, 1990)とは異なる。しかし、その構造は、半ば無意識的に母親の中にとりこまれ、カウンセラーが意図する以上に、その構造は母親にとって「心のよりどころ」(小此木, 1990)となっていた。その点では「自然に形成される治療構造」と重なる部分があった。

4-4) 《面接間に変化の兆しが見れる過程》について

《面接間に変化の兆しが見れる過程》とは、＜面接に触発された動き＞と、＜面接じゃない要素＞の2つからなる。事例Bのクライアント/母親は、面接間に面接の内容をどのように振り返っていたのだろうか、面接を意識した行動はあったのだろうか。それらの点をポイントに、クライアントや母親の視点から面接間に焦点を当てた。

(1) 本人

面接経過からは、第1期から既に面接が日常生活に浸透していたことが分かる。第1期において、カウンセラーの提案を受け、姉や父に自分の考えを伝えるようと日頃から試みていたことから窺える。そこには姉が深夜に携帯電話で話すなど、クライアントが姉に感情表現をする必要性が生じる偶然の出来事＜面接じゃない要素＞も関わっていた。ただし、クライアントは単にカウンセラーの言うことの受け売りでなく、自分なりの考えを作っていたようである。例えば、「(父親との)話し合いの時は、うーん、なんというか、思い出すというよりは、自分の考えていることをストレートに言う感じ」であったことから窺えた。第4期に1人で来談するようになってからは、さらに面接を想起する機会が増えたことがインタビューから読み取れる。面接の帰り道は「帰り、結構まあ、今日話したこととか、考えたり」する時間になった。また、「終わった後、家に帰って、こんなこと話したとか、そういうことはお母さんと話したり今日話したこととか、話したり」することも面接を振り返ることになった。このように、面接間に「色々

となんか、考えたりする時の、考え方の方で、なんというか、ここで話したこととかを、まあ、なんというか、思い出す」ということが増えていく。また、1人で電車に乗る際にも、面接のことが度々想起されていた。母親の説明では、クライアントは来談当初『電車に乗れない、パニック症状というんですか、電車に乗って途中でどうにかなったらどうしようという、そういう不安』を抱えていた。そのためクライアントは「新しい何かを初めたりする時に、（カウンセラーが）こんなこと言っていたなとか、そういうのを思い出したりして、なんというか、安心させるというか、まあ、あの、そういう感じで（面接）思い出す」ことがあったそうである。例えば「電車とかだと、気持ち悪くなったりとかあるんですけど、そうなったらそうなったでいいかっていう感じで、そういう風に考えたりとか、まあ、なんとかなるんじゃないかって考えたりして、あんまり変になんか、不安になるようなことを考えないようにしたり」する際に面接を思い起こしていたそうである。このように、外出時の不安に喚起される形で、＜面接に触発された動き＞が生じていた。

以上のように、面接に影響を受け「お父さんとかに話すとか、あとは外にでるとか、そういう意味での行動は結構しました」とクライアントは振り返る。それは「自分に必要な感じというか、まあやってみよう」というしっかりした動機づけに裏打ちされたものであった。面接に触発された行動は、フリースクールへの通学につながっていった。＜面接に触発された動き＞が【日常生活の変化へと向かうベクトルの】礎となっていることが窺えた。

（2）母親

母親にとっての＜面接に触発された動き＞は第1期の後半#11に家族関係の図を見てから始まっていた。『もっと、自分がしっかりしなきゃなと』と思い至る。その結果、夫との関係が変わった。面接を重ねるなかで『相手に伝えるということが、それも（面接に）来てから』できるようになった。それまでの母親は夫に対し『付録のように我慢だけする』ことが多かった。しかし、『（面接に）来て話して、じゃあ、家で話してみようって、そういう気持ちになったのが、それを多分ちょっとずつ、実践』するようになった。前述の通り、それは第2期くらいからであったのだろう。夫が単身赴任先から帰るといふ＜面接じゃない要素＞をうまく機会として使い、夫との話し合いを重ねた。そ

の結果、夫との関係は『最終的に自分が今まで思っていたこと、疑問とか、落とし込めなかったことを伝えることができて』『今は何でも言えますもんね。言えないことない』関係となった。さらに面接の内容を振り返るの機会が増えたのは、クライアントと同じく第4期である。母親、クライアントそれぞれが1人で来談することで、内省の機会ができた。『帰るまでの間の時間に、1人での時間に（中略）今の息子の状況、（中略）出てきた帰りによく考えたりしていました。それで、何か思いつくことを紙に書いたりとか。そう、紙に書いたりというのはしょっちゅうして』いたそうである。さらに『それ（面接）以外の時は、どうすればいいかなとか。色々なものを読み漁ったり』することを通し『時間かけて消化』していった。このような時間は、母親にとって『自分を取り戻していく』ことにもつながっていた。それにより、子ども達への接し方も『ぶれない姿勢で、彼女、彼に会うこと』ができるようになった。そのことは、『ある意味の信頼をしてもらっている』関係へと母子関係を変えた。これは、第7期の#93でのクライアントの話「最近、お姉ちゃんとお母さんの関係が近くなった」という言葉からも分かる。ここからは、面接間の振り返りや実践という＜面接に触発された動き＞が、家族関係を変えたことが窺えた。

第5節：研究6の考察と今後の課題

5-1) クライアント／母親の主観的体験から見た面接経過とは

第4節で、インタビューの結果にもとづき、クライアント／母親の主観的体験を、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》の4点から整理した。本節では、その結果を研究4で得られた結果図と照らし合わせながら考察したい。第4節の順番とは異なるが、まずは母親の面接経過について述べ、次にクライアントの面接経過について述べる。

(1) 母親の面接経過

《面接を自分なりに使えるようになる過程》に関しては、母親は、事前に認知行動療法について学んできたうえでの来談であった。そのため、既に＜面接ってどんなもの？と模索＞する段階は済ませインテークに臨んでいた。第1期には、＜面接と日常経験の

比較>を行いながら、<オリジナルな面接観の形成>をしていた。自分なりに面接を使おうという態度は第1期から一貫していたと思われる。ただし、第4期の面接形態の転換時には、改めて自分なりの面接のイメージを再構成していたであろう。

次に、《話すことで何かを得る過程》においても、第1期から、子どもの問題に関係する自分の行動に気づき、そのことに主体的に向かい合おうとしていた。そこからは、どうやって言葉にすればよいのか苦戦する<何とか伝えて得た気づき>の段階を済ませ、以降は<カウンセラーと話ながら築く>ことを、面接のたびに繰り返していたものと思われる。

また、《面接の場だからこそその関係を認識する過程》においても、カウンセラーが自分の問題を唯一話せる相手であると認識するなど、<自分の話だけを聞いてくれる相手>以上の存在であると受け止めていた。よって、早期から、カウンセラーは<安心して話していい相手>であり、<普段はしない話を土台とする関係>であると認識していたものと思われる。

そして、母親の主体的に問題に取り組む姿勢は、面接経過の一貫した<面接に触発された動き>に現れていた。<面接じゃない要素>が生じた機会をうまく使いながら、《面接間に変化の兆しが現れる過程》は進展していった。

以上のように、面接経過において母親は、第1期の段階から、研究4の3回目面接に見られるような、<カウンセラーと話ながら築く><普段はしない話を土台とする関係><オリジナルな面接観の形成>の備わった状態にあった。それゆえに、第2期では、すでに夫との関係に変化を起こす【日常の変化へと向かうベクトル】となっていたのだと思われる。以下、母親の面接経過の概要を表10-3に示す。

表 10-4 母親の主観的体験から見た面接経過の概要

	来談前	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期
<面接ってどんなもの？と模索>	→							
<面接と日常経験の比較>		→						
<オリジナルな面接観の形成>		→	→	→	→	→	→	→
<何とか伝えて得た気づき>		→						
<カウンセラーと話しながら築く>		→	→	→	→	→	→	→
<自分の話だけを聞いてくれる相手>		→						
<安心して話してもいい相手>		→	→	→	→	→	→	→
<普段はしない話を土台とする関係>		→	→	→	→	→	→	→
<面接に触発された行動>		→	→	→	→	→	→	→
<面接じゃない要素>		→	→	→	→	→	→	→
【日常生活の変化へ向かうベクトル】			→					

(2) クライエントの面接経過

《面接を自分なりに使えるようになる過程》に関しては、母親と同様に、来談前に<面接ってどんなもの？と模索>する段階は済ませインテークに臨んでいた。第 1 期には、<面接と日常経験の比較>を行いながら、<オリジナルな面接観の形成>をしていた。第 4 期の面接形態の転換時にも、柔軟に対応していたことがインタビューから窺えた。恐らくこの期には、母親と同じようにクライアントの面接のイメージも再構成されたと思われる。

次に、《話すことで何かを得る過程》においては、第 1 期において、<何とか話して得た気づき>を得て、<カウンセラーと話しながら築く>過程が始まっていたことが分かる。しかし、第 2 期～第 5 期では、父親や姉への憤りにとらわれる膠着状態となっていた。この点で、<カウンセラーと話しながら築く>ことにおいても停滞していたので

はないかと思われる。第6期に、父親のことは自分の問題と切り離すという結論に至るという転機が訪れる。ここで<カウンセラーと話しながら築く>ことが再開していた。

また、《面接の場だからこそその関係を認識する過程》においては、第1期の段階で<自分の話だけを聞いてくれる相手>としてカウンセラーが認知されたことが窺える。しかし、第3期に見られた社会への憤りに関するテーマについては、なかなか話すことができなかった。それでも、ようやく第5期になって「話したりしているうちに、段々言えるように」なった。このように<安心して話してもいい相手>、<普段はしない話を土台とする関係>へとなるには、約1年の時間を要した。

そして、《面接間に変化の兆しが現れる過程》は、「自分に必要な感じというか、まあやってみよう」というしっかりした動機づけに裏打ちされたものであり、第1期から一貫してみられた。しかし、第2期に始まるクライアントの膠着状態に対応するため、第3期は行動範囲の拡大をカウンセラーは意図したもののうまくいかなかった。そのため第3期は<面接に触発された動き>は一時的に止まっていたと言える。それが、再開するのは第4期の1人での来談が始まったことによる。それに続き、第5期、第6期には《話すことで何かを得る過程》、《面接の場だからこそその関係を認識する過程》が再び進展し始める。そして最終的にフリースクールへの進学を決める。このように、研究4の結果図と比較し、事例Bのクライアントの面接過程には停滞や遅延もみられた。そうではあったものの、臨床群と同様に【日常生活の変化へと向かうベクトル】があることが明らかになった。以下、クライアントの面接経過の概要を表10-4に示す。

表 10-5 クライエントの主観的体験から見た面接経過の概要

	来談前	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期
<面接ってどんなもの？と模索>	→							
<面接と日常経験の比較>		→						
<オリジナルな面接観の形成>		→	→	→	→	→	→	→
<何とか伝えて得た気づき>		→						
<カウンセラーと話しながら築く>		→	→	→	→	→	→	→
<自分の話だけを聞いてくれる相手>		→	→	→	→			
<安心して話してもいい相手>						→	→	→
<普段はしない話を土台とする関係>						→	→	→
<面接に触発された行動>		→	→	→	→	→	→	→
<面接じゃない要素>		→	→	→	→	→	→	→
【日常生活の変化へ向かうベクトル】							→	

5-2) 事例 B の結果図

研究 6 では、非臨床群を対象とした研究 4 で得られた知見が長期臨床事例でも見られるかを明らかにすることを目指した。その結果、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが見れる過程》の 4 つの過程が事例 B でも見られることが明らかになった。母親の場合は、表の 10-3 で示した通り、第 1 期の段階から、研究 4 の 3 回目面接に見られるような、<カウンセラーと話ながら築く>・<普段はしない話を土台とする関係>・<オリジナルな面接観の形成>の備わった状態にあった。研究 4 の臨床群や研究 5 の事例 A と類似のステップを辿ったと言える。一方、クライアントの場合は、表 10-4 で示した通り、概念の出現のタイミングは臨床群ならではの違いがあった。大きな流れは、研究 4 の図 8-1 と共有しつつも、途中で停滞や遅延などが見られるという特徴が

あった。このプロセスを結果図に示す。事例 A は長期事例であるため、第 1 期～第 3 期を図 10-1 に示す。この時期は第 2 期に始まった父親や姉への憤りのために、面接が一時期膠着する時期を含む。第 4 期～第 7 期を図 10-2 に示す。この期間は膠着状態から抜け出し、【日常生活の変化へと向かうベクトル】へと至った時期である。研究 6 で扱う事例は、研究 4, 5 で扱った短期事例とことなり、面接間は各回ごとには示さず、各期の面接間におきた出来事をまとめて示すこととする。このような形式をとったが、面接間にく面接に触発された動き>や<面接じゃない要素>が見られる点では、研究 4, 研究 5 と同様であった。

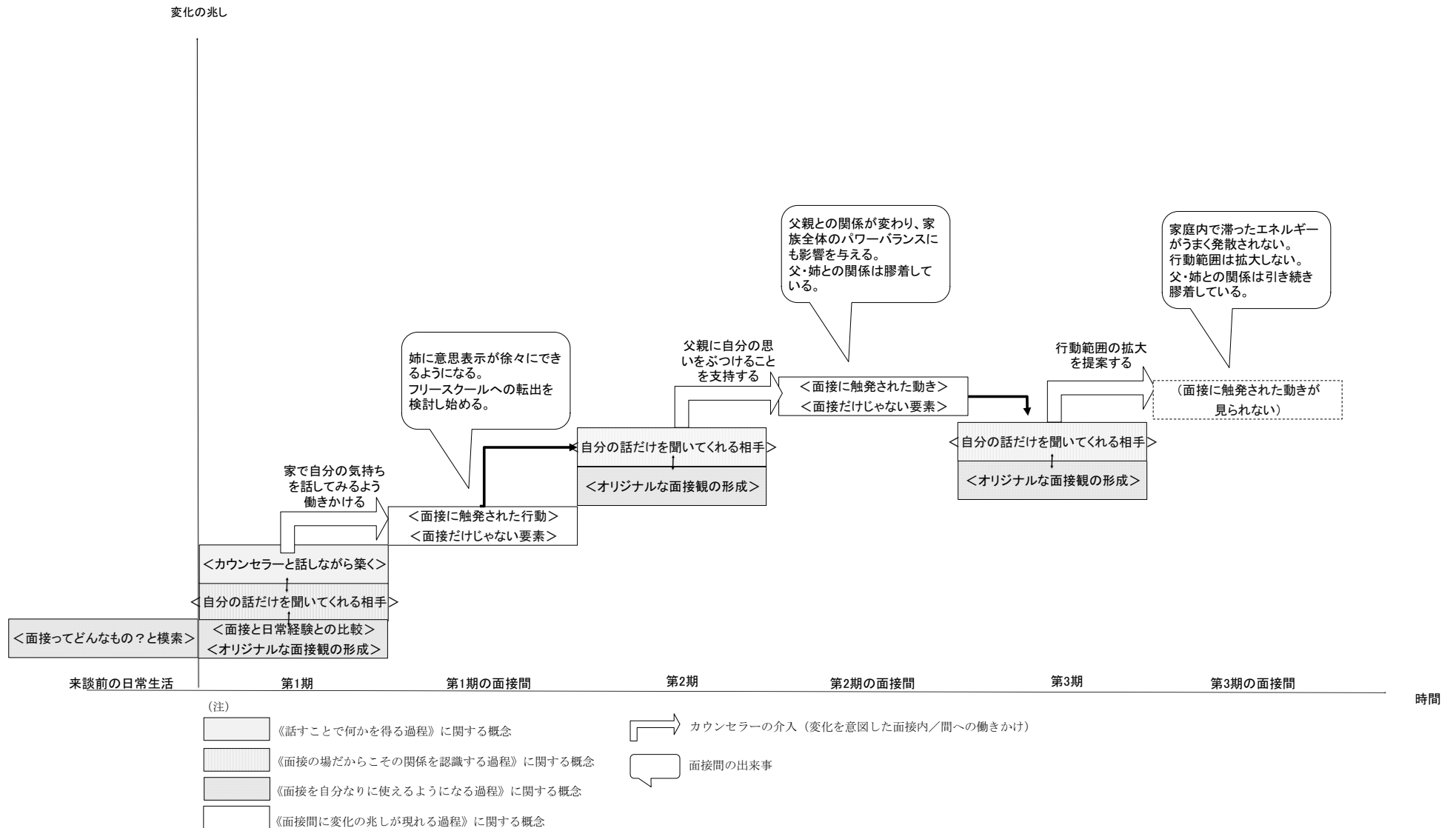


図 10-1 事例 B における面接内と面接間におけるクライアントの主観的体験
(第 1 期～第 3 期)

5-3) 研究6のまとめと今後の課題

研究6では、研究5に続き、非臨床群を対象とした研究4から得られた知見が、臨床群であるクライアントにおいても同様に見られるかどうかを検証した。その結果、これまでの研究と同様に《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》が見られ、問題解決へとつながっていくことが分かった。さらに、母親とクライアントの面接経過の対比から分かったことは、《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》が、面接経過の中で、必ずしも直線的に進まない場合があるということである。母親は研究4の結果図で示すところの、3回目の面接に近い状態に第1期からあった。それに対し、クライアントは面接経過の段階によっては、停滞や遅延の状態にあることもあった。これは、母親が厳密な意味では臨床群でないのに対し、クライアントは投薬も受けるような心身の状態にあったことによるのだろう。このような違いはあるものの、事例Bにおいても、研究4で見られたような【日常生活の変化へと向かうベクトル】を生み出すステップが確認された。それではなぜ停滞や遅延がありつつも、同様のプロセスをたどったのだろうか。そこには、第4期に行った面接構造の転換という介入があったからではないかと思われる。面接の頻度を上げたことで、カウンセラーとは週2回会うこととなった。それは、家族以外とは人との接点がないクライアントにとっては、特別な体験だったのではないだろうか。このことは、カウンセラーとの距離を近づけたのではないかと思われる。そして、関係が近づいた結果、これまで話せなかったテーマも面接の中で話せるようになった。また、回数が増えるということは、クライアントの行動を増やす効果もあった。さらに、1人で来るということはクライアントの自信にもつながった。その自信はフリースクールへの進学を支えた。このように第4期の面接構造の転換が、《面接の場だからこそその関係を認識する過程》、《話すことで何かを得る過程》、《面接間に変化の兆しが現れる過程》を押し進めたことが、停滞や遅延がありつつも【日常生活の変化へと向かうベクトル】へと至った要因ではないかと思われる。臨床実践で扱うケースは多種多様であり、研究4の結果図と全く同じ経過をたどるケースはないだろう。それでも、どこか差が生じたときに、何が遅延や停滞に関連しているかを、クライアントの問題状況と関連づけて査定し、対処していくことで、クライアント

の問題解決を早めることができるのではないかと考える。

本研究の限界と課題としては、次の5点が挙げられる。第1に、研究5と同様にカウンセラーとインタビュアーが同一人物であったことである。協力者であるクライアントの発言を肯定的なものに傾けた可能性もある。第2に、研究5と合わせても2事例のため、どのような事例に転用可能であるかは、さらに事例を積み重ね、検証していく必要があるだろう。第3に、研究6からは、研究4,5の結果図で示されたような右肩上がりのプロセスだけではなく、遅延や停滞があることは示された。しかし、後退や中断などのケースについては検討できていない。失敗事例などとの比較研究も求められる。第4に、研究6で示した面接間は、各回の面接と面接の間の時間ではなく、面接間の主要な出来事でまとめたものである。そのため、研究3~5でとりあつかった面接間とは異なる。よって、他の長期事例においても、同様の期分けで結果図の適用が可能であるかはさらなる検証が必要だろう。最後に、研究4で得た4つの概念と心理療法の効果がどう関わってくるか、条件を統制した研究も必要となる。これらの点を踏まえ、今後の研究につなげたい。

第Ⅴ部 クライエントの主観的体験から見た心理面接のプロセスとは

第Ⅴ部の目的と構成

第Ⅴ部では、本研究のまとめと、今後の課題を示す。まず、第11章で、結論として、本研究で明らかにしたことを示す。その上で、臨床的示唆を述べる。最後の第12章にて、本研究の限界と今後の展望を挙げる。

第 11 章 本研究のまとめ

第 1 節：本研究で明らかにしたこと

本論文は、クライアントの視点から見た心理面接のプロセスはいかなるものであるかを、面接内と面接間の双方に焦点を当て明らかにすることを目指した。

本論文は I～V 部で構成した。第 I 部は、本研究の目的と方法に関して述べた。まず、心理面接のプロセスについて理解するための重要な観点として、①クライアントの主観的体験からの理解、②面接初期段階への注目、③面接内と面接間の双方への注目を挙げた。面接過程において、その初期段階は効果を予測しうる重要な段階である。しかし、面接の進展に関するクライアントとカウンセラーの理解は必ずしも一致しない。そのようなギャップは面接内に留まらず、面接間にも及んでいる場合も考えられる。そこで、クライアントの主観的体験から見た面接プロセスを、面接間まで含めて明らかにすることを目的とした。本目的に鑑み、主要な研究法としてプロセス研究を採用した。

第 II 部～第 IV 部はクライアントを対象とした研究につき示した。第 II 部では、ロールプレイ／試行カウンセリングを受けたクライアントに対し、IPR インタビューを行い、面接内におけるクライアントの体験を明らかにした。第 III 部では、試行カウンセリングを受けたクライアントの、面接内と面接間の双方における主観的体験に焦点を当てた。ここまでは、非臨床群のクライアントを対象とした研究であった。そこで、第 IV 部では、臨床群を対象としたインタビュー研究を行った。

本研究で明らかにしたこととして以下の 2 点が挙げられる。まず第 1 に、面接内におけるクライアントの主観的体験である。第 2 に、面接内と面接間の双方におけるクライアントの主観的体験である。それぞれについて以下に述べる。

1-1) 面接内におけるクライアントの主観的体験

面接内でのクライアントの主観的体験として、第 II 部では次の 2 つを明らかにした。①話が深まる場合のプロセスの特徴、②話が深まる場合と、深まらない場合の違いである。クライアントの話が深まるためには、自分の話がカウンセラーに伝わっていると感じることに加え、それがカウンセラーに受け入れられているという感覚を持つことも必要であった。そのため、たとえ話が伝わったとしてもそれが受け入れられたと感じなけ

れば、クライアントの話は深まらないことも分かった。従来、伝え返しや受容はカウンセリングの基本技法として並列に扱われてきた。しかし、これらは単独で働くのではなく、合わせて体験されることで初めて促進的に働くことが本研究により明らかになった。カウンセラーが考えている以上に、クライアントは、伝え返し単独と、伝え返し+受容の組合せの違いを繊細に感じ取っていたのである。このようなカウンセラーとクライアントの感じ方の違いを見出したのは、クライアントの視点に焦点を当てた本研究独自の成果と言えよう。クライアントが伝わったと感じるためには、カウンセラーは話の内容を正確に理解していることを、クライアントに伝えることが必要である。そのため、カウンセラー初学者は、クライアントの言葉をそのまま繰り返すことが推奨される。それが、オウム返しであると批判されることがある。しかし、そのオウム返しですら簡単なようで難しい。例えば、長々と話すクライアントの場合、話を遮るのも難しく、どこを伝え返せば正確なのか頭を巡らせながら、話を聞くこととなる。そんなカウンセラーの困惑は、雰囲気としてクライアントに伝わる。そのため、仮にカウンセラーの伝え返しが、クライアントの使った言葉と同じであったとしても、クライアントは受け入れられたという感じを得ることができないだろう。つまり、伝え返しにおいては、言葉が正確かどうか以上に、その伝え返した言葉を、クライアントがどう受け止めるかが重要である。伝わった感覚と、受け入れられたという感覚がセットでないと、話を促進させないという問題は、何も初学者に限った問題ではない。経験を積んで、クライアントの話のある程度正確に理解できるようになったとしよう。しかし、それが、カウンセラー自身の価値に反する内容であるなど、簡単に受け入れられないものである可能性もある。そう考えると、クライアントの話を受容するという事は、単に経験を積み上げればできるというものではない。その一方で、自らの状況を、周囲から、そして自分自身ですら受け入れられずにいる多くのクライアントが存在する。ここでならもしかしたら受け入れてもらえるかもしれないという期待を抱き、カウンセリングの戸を叩くクライアントもいるであろう。そのような期待にどう応えるか、自らの価値観や倫理観を問い続けることが、カウンセラーの専門性の1つであることを、今回の研究に参加したクライアントは教えてくれた。

次に、話が深まる場合に対し、話が深まらない場合には次の3点の特徴が見られた。第1が、自分の話がカウンセラーに伝わっているという感覚を得られない場合、第2に、

たとえ伝わったと感じたとしても、伝わるのがクライアントを脅かすような体験である場合、第3が、カウンセラーとの関係形成が不十分な場合である。特記すべきは、このように話が深まらずに面接やカウンセラーに対し不満を抱いたとしても、それが直接的にカウンセラーに表明されることはなかった点である。このような表明されないクライアントの不満は、I部の冒頭で述べた通り、筆者が修士の学生の際に参加した心理臨床面接での実習でも存在した問題である。クライアントが自分の感じたこと、考えたことを表明していい場であるはずの面接で、なぜ、そのような不満が表明されないのかという疑問が、この研究の出発点となっていた。本研究の結果、クライアントは失望や諦めゆえに、不満を表明しないことが明らかになった。このような表明されない不満は、試行カウンセリング場面だけでなく、一般の面接でも起きうる。今回の研究から明らかにされた表明されない不満の存在を知ることは、筆者が臨床実践を行う上で役に立っている。不満が表明されないことを頭の片隅に、クライアントの反応を見ると、実は表明されないのではなく、カウンセラーが気づいていないだけではないかと思えるようになった。カウンセラーの言葉が、クライアントの思いとずれるような時には、クライアントの反応には、ちょっとした間ができる。また、すぐに返答があっても、「まあ、そうです」と濁したような表現になる。そこに気づき、カウンセラーが「ちょっと今の言葉は違いますかね？」といった問いかけをすることで、逆にクライアントの話が展開していくことも多々ある。このように、研究成果を臨床実践に当てはめてみると、ずれは無ければよいというものでなく、あるのを前提に、どう治療的に扱えるかが重要であることが分かる。本研究の分析法で採用したGTA、M-GTAの特徴の1つが、実践的活用を指向する点にある。木下（2007）は、M-GTAは、「研究結果が応用されて、つまりデータが収集された現場と同じような社会的場に戻されて、試されることによってできばえが評価されるという立場」に立つという。本研究で得られた示唆を、臨床実践に活かし、そこで得られたものを、研究でまた示すという「臨床と研究のストロークをいかに構築するか」（岩壁，2013）が今後も求められる。

1-2) 面接内と面接間の双方におけるクライアントの主観的体験

以上のように、第II部では、面接内でのクライアントの主観的体験に関し、話が深まるプロセス、話が深まらない場合との違いを明らかにした。そして、話が深まらず面接

を終えたとしても、それに伴う不満はカウンセラーに表明されることはないことも分かった。とすると、このような面接内での体験は、面接間でのクライアントの体験にどのような影響を与え、その後の面接はどのような展開を辿るであろうかとの問いが生まれてきた。そこで、第Ⅲ部では面接内と面接間の双方におけるクライアントの主観的体験を明らかにすることとした。研究3では事例研究を行った。その結果、たとえ初回面接において関係形成が充分でなかったとしても、面接が継続されることで、カウンセラーとの関係は改善することが明らかになった。それを後押ししていたのが、クライアントの中にできた「自然に形成される治療構造」（小此木，2004）であった。「自然に形成される治療構造」とは、クライアントが面接やカウンセラーに抱く独自のイメージである。よって、クライアントによって百人百様である。本研究のクライアントの場合は、日常会話と違い「マイナス」な話をそのまま伝えてよい場であるというイメージを、面接の場に持っていた。そのことは、カウンセラーの態度に疑問を抱くことがあったにもかかわらず、クライアントが話を進めることを助けた。そして、1回目の面接を終えたあと、クライアントは面接で話した内容を意識しながら生活していた。それは、面接間に起きた出来事を伝える相手として、カウンセラーがクライアントの心の中に内在化されることへとつながっていた。いつしかカウンセラーは、クライアントにとって「自分が話をしたい内容っていうのを知っている」相手となっていた。これまでも、心理療法における治療関係や治療構造の重要性は指摘されていた。ただし、それらはカウンセラーや研究者の観点から述べられたものであった。研究3は、クライアントの主観的体験から、治療関係や治療構造が、相互に強め合うように影響し、クライアントの肯定的な変化を生み出す要素となっていることを明らかにした。

続く研究4では、分析対象に、短期試行カウンセリングを受けた別の3人も加え、合計4人のインタビューデータをM-GTAを用い分析した。これにより、研究3で得られた知見を検証・発展させ、クライアントの主観的視点から、面接内と面接間での体験、また、面接内と面接間の相互作用を、探索的に明らかにすることを目指した。その結果、面接を受けたクライアントの日常の中で、何らかの変化が生じるための重要な概念として《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》の4つの概念があることが明らかになった。各概念の内容とそれらが変化へとつながるプロセ

スは次のようなものであった。クライアントは面接当初、何とか自分の思いをカウンセラー相手に言葉にすることで気づきを得る。その積み重ねがやがて、新しい変化を生み出すことへとつながっていった。これが《話すことで何かを得る過程》である。また、面接を重ねる中で、クライアントは、カウンセラーに肯定的な認知を抱く。そして、最終的にカウンセラーとの関係を、普段はしない話を土台とする関係であると俯瞰的にも理解する。これが《面接の場だからこそその関係を認識する過程》である。そして、クライアントの面接構造に関する理解も進展する。面接当初クライアントは慣れない面接に戸惑いを覚える。それでも日常と面接を比較することを通し、自分なりの面接観を育む。これが《面接を自分なりに使えるようになる過程》である。そして、面接内における《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》の進展は、面接間における認知や行動に影響を与えた。これが《面接間に変化の兆しが現れる過程》である。面接間では、面接内での気づきが主訴にまつわる出来事に対する感度を高め、面接に触発された動きが生じる。また、面接じゃない要素も面接間の変化に寄与するようになる。そして面接間は面接内から影響を受けると同時に、次の面接内に影響を与えた。このように面接内と面接間が相互に影響を与える中で、日常生活における変化の兆しが徐々に強まる。その結果、クライアントの日常は何らかの肯定的な変化へと向かっていった。これをコアカテゴリ【日常生活の変化へと向かうベクトル】とした。

第Ⅲ部までの研究は、非臨床群の大学生・大学院生を対象としたロールプレイ・試行カウンセリングに基づくものであった。しかし、臨床群と非臨床群とでは、健康度、話す問題の深刻度、面接に臨むモチベーションなど様々な点で違いがある。そこで、第Ⅳ部では、2つの臨床事例を取り上げ、非臨床群で得られた知見が臨床群に適応可能かどうかを検証することを目的とした。事例としては、研究5で面接期間が短期のものを取り上げた。続く研究6で、長期のものを取り上げた。研究5の結果、非臨床群と同様に《話すことで何かを得る過程》・《面接の場だからこそその関係を認識する過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》が、【日常生活の変化へと向かうベクトル】となり、問題解決へとつながっていくことが分かった。さらに、臨床群においては、次の4点が、問題解決の動きを加速させることも明らかになった。それは、①来談前から問題の整理が行われていた点、②面接をどのように

役立てるかも来談前からイメージされていた点、③カウンセラーの専門性に重きを置く姿勢、④カウンセラーの介入とクライアントの動機づけの高さが、面接内と面接間の相乗効果を強める点である。続く研究6の結果においても、「話すことで何かを得る過程」・「面接の場だからこそその関係を認識する過程」・「面接を自分なりに使えるようになる過程」・「面接間に変化の兆しが現れる過程」が同様に見られることが確認された。基本的には同様であるものの、面接経過の中で、必ずしも直線的に進まない場合があることも明らかになった。臨床実践においては、そのことを念頭に、面接がうまくいかない場合には、本研究で得られたプロセスのどこに遅延・停滞が発生しているかを、クライアントの問題状況と関連づけて査定し、対処していくことで改善を図れる可能性があることが示唆された。

第2節：臨床的示唆

第I部で述べた通り、本論文の目的は、クライアントの主観的体験を、面接内と面接間の双方から探索的に明らかにし、臨床実践における示唆を得ることである。クライアントの主観的体験から、日常生活において何らかの変化が起きるためには、「話すことで何かを得る過程」・「面接の場だからこそその関係を認識する過程」・「面接を自分なりに使えるようになる過程」・「面接間に変化の兆しが現れる過程」が必要であることが明らかになった。よって、カウンセラーには、これらの過程や動きを阻害することなく促進することが求められる。そこで、そのための具体的な姿勢を臨床的示唆として述べる。

まず、「話すことで何かを得る過程」を援助することに関しては、「聞いてもらう」という体験が、クライアントの話を促すうえで非常に重要であることが分かった。しかし、傾聴だけでなく、積極技法（新たな観点の提供やアドバイス）も、「話すことで何かを得る過程」を加速させる効果があることも明らかになった。傾聴技法と積極技法を適切に用いることが、カウンセラーに求められること、これらがクライアントの視点から改めて確認された。

次に、「面接の場だからこそその関係を認識する過程」についてである。上記の積極技法も、治療関係がしっかりとなければ、単なるカウンセラーの押し付けとなって、「話すことで何かを得る過程」の促進を阻害することもあるだろう。治療関係は効果においても重要な役割を果たしており、面接の基礎となる部分である。臨床家の間では「関係ができて

いる／できていない」などの表現がされ、できていることが大前提となる。しかし、クライアントの特性、カウンセラーの経験、相性などによっては、関係を作ることが難しい／時間がかかる場合もある。本研究の結果、クライアントの中に、カウンセラーに対して表明しづらいものがあることが明らかになった。そこで、臨床実践においては、その可能性を常に念頭におくことが重要である。そして、クライアントが何か疑問や不満を抱いた時に、いつでも自由に話し合える態度を示すことがカウンセラーに求められる。

そして、《面接を自分なりに使えるようになる過程》についてである。クライアントの中に形成される、自分なりの面接イメージは、クライアントの中で暗黙裡に形成されるため、明確に言語化されることがない場合もある。しかし、本研究の結果、クライアントの中に自然に形成される治療構造を、カウンセラーが理解することは、面接を促進することにつながるということが明らかになった。それを踏まえ、臨床実践においては、クライアントが面接をどのような場であると考えているかを聞くように心がけることが大切だろう。また、できるだけカウンセラーの持つ治療構造も伝えることも必要である。例えば、筆者の臨床実践においては、クライアントに対し、時に応じて「何でも話したいことを自由に話していいですよ」とあえて伝えることがある。このカウンセラーにとっては自明な構造を、意外と感じるクライアントもいる。「関係ないことは、話しちゃいけないと思っていました。じゃあ」と言って話し出したものが、実はクライアントの主訴にとって重要なものであり、面接が展開することもある。あ・うんの呼吸は日本人独特の文化であり、何でもかんでも言語化してすり合わせる必要はないかもしれない。しかし、自然に形成される構造に関しては、なんとなく分かったつもりで曖昧にせず、クライアントと率直に話し合ってもよい領域なのではないかと考える。

最後に《面接間に変化の兆しが現れる過程》である。本研究における非臨床群と臨床群の違いのひとつは、＜面接に触発された動き＞を促すカウンセラーの介入の有無であった。そして、カウンセラーの介入があることで、面接内と面接間の相互作用を高めることが明らかになった。このように臨床実践において＜面接に触発された動き＞を促進するために用いやすいのがホームワークである。ホームワークとは、面接内でクライアントとカウンセラーが協働して設定する、面接間の作業課題である。ホームワークを実践することは、面接内と面接間の相互の交流を高めるだけでなく、クライアントの問題解決に具体的な方向性を与えることが、本研究から示唆された。

以上の観点は、個人面接と、その面接に関連した日常生活に焦点を当て得られたものである。されている。実際の臨床では、さらに視点を拡大させていく必要がある場合もあるだろう。例えば、女性の社会的立場に配慮するフェミニズム的視点、地域の社会制度や経済状況等の背景要因を広く捉えるコミュニティー心理学的視点などである。カウンセラーは、これらの大きな文脈と、面接内／面接間の文脈との双方を意識しながら、面接を進めていくことが求められる。

第3節：先行研究との関係

第I部では、心理面接のプロセスについて理解する観点として重要なものとして、①クライアントの主観的体験からの理解、②面接初期段階への注目、③面接内と面接間双方への注目を挙げた。そこで、本研究のまとめにあたり、先行研究との関係に関して、上記3点から整理する。

3-1) クライアントの主観的体験に関する先行研究との関係

心理面接のプロセスをクライアントの主観的体験から検討する研究として、面接において役立つ／妨げとなる重要な出来事(significant events)に関する研究がある。そこにはいくつかの共通する知見があるとされる(Elliott, 2008)。まず、クライアントにとって役立つものとして、治療関係、傾聴・共感・肯定などのカウンセラーの態度、問題解決のための具体的な手段の提供などがある。一方、妨げとなるものとして、カウンセラーによる考えの押し付けや、決めつけ、価値の否定などがある。そしてこれらの知見は、属性の異なるクライアント群を対象とした研究であるにもかかわらず、一貫性があることも指摘されている。

先行研究での「役立つ」に当たるものが、本研究で見出した「話が深まる」という体験であろう。本研究では、類似の概念を抽出するだけでなく、話が深まるプロセスを明らかにした。前述の通り、伝わる感覚だけでは話は深まらず、そこに加えて、受け入れられる感覚をクライアントが抱く必要があることを示した。カウンセリングのテキストの中には、伝え返しや受容などの基本技能をチェックリスト形式で確認するものがある(例えばEagan(1990 鳴澤他訳 1998)など)。本研究では、それらの技能は単体で確認するだけでは事足りず、技能の組み合わせや技能を用いるプロセスも重要であることを

示唆した。

次に、先行研究での「妨げ」にあたるものが、本研究で見出した「話が深まらない」という体験であろう。詳細については第5章でも述べているが、改めてここに、先行研究との位置づけをまとめておく。先行研究（Rennie, 1994a）と同じように、そのようなネガティブな体験をしたにもかかわらず、それに伴う不満等はカウンセラーに表明されることはなかった。Rennie（1994a）は、表明されない不満があることを知っていることがカウンセラーの感受性を高めると述べている。それに加え、本研究では、不満に気づくサインがあることを明らかにした。それは、〈とりあえず肯定する〉という反応である。クライアントが肯定の返事をしたにもかかわらず、その後続く言葉がカウンセラーの発言を正すものであれば、それはあからさまには表明されないクライアントとのズレを調整できるチャンスである。このようなサインがあることを知ることは、経験の少ないカウンセラーが臨床実践を行っていくうえでの助けとなるだろう。

3-2) 面接初期段階に注目した先行研究との関係

Klee et al.（1990）や Harvath & Greenberg（1989）によれば、面接初期における治療関係は、その後の面接過程をも予測しうるとされる。治療関係は、本研究で言うところの《面接の場だからこその関係を認識する過程》である。本研究では、治療関係だけでなく、《話すことで何かを得る過程》・《面接を自分なりに使えるようになる過程》・《面接間に変化の兆しが現れる過程》も面接初期に見られることを研究1～4で明らかにした。そして、それらがクライアントの日常生活における肯定的な変化に関わることが示唆された。さらに、研究6により、短期臨床事例だけでなく、長期臨床事例においても同様の過程が見られることを明らかにした。面接初期がその後を予測しうる重要な段階であるという先行研究の知見が、本研究からも確認された。

3-3) 面接内／面接間の双方へ注目した先行研究との関係

クライアントの主観的体験については、面接内に焦点を当てたものが中心であり、面接内／面接間の双方に着目した研究は多くはない。先行研究では、面接間においてクライアントが、面接内での取り組みとは別にセルフヘルプ的に問題解決に取り組む姿が明らかにされている（Perren et al., 2009; Mackrill, 2007; Mackrill, 2008）。

しかし、その中では面接内と面接間がどのように相互に関わっていくかは明らかにされていない。本研究では、その面接内と面接間の相乗効果を明らかにした。まず、面接とはこんなものというイメージや良好な治療関係が、面接内でのクライアントの話を促す。そこで話したことを面接間に振り返りながら、新たな体験を重ねる。それが、次の面接内での展開に影響を及ぼす。このような形で、面接内と面接間が折り重なるように、問題可決へと向かう道筋を本研究では示した。

第4節：本研究の特徴

本研究の特徴としては次の3つを挙げることができる。①面接過程をクライアントの視点から検証したこと、②面接過程を面接内だけでなく面接間にも焦点を当て扱ったこと、③実践的活用を指向する研究であることである。

まず、①については、本研究の発端となった問題意識にもあったように、サービス業であれば一般的に行われるような顧客（クライアント）の声を聞くための調査が、従来の研究、特に国内の研究においては行われてこなかった。多くの熟練カウンセラーは、おそらくカウンセラーとクライアントの視点を両方持っているのだろう。しかし、初学者にとってそれは難しいものである。また、ある程度経験を積むと、今度は専門性ゆえにクライアントの視点から乖離していくかもしれない。本研究は、カウンセラーとは違う、クライアントの独自の感覚を描き出した点に特徴がある。

次に、②に関しては、従来の研究は面接間に焦点をあてたものは少ない。その理由として、方法論的な難しさもあるのではないだろうか。面接間は、クライアントの日常生活そのものであり、面接とは関係のない出来事も多く溢れている。その中から、どのように研究対象を切り出すかを考えなければならない。先行研究では、クライアントに日記を書いてもらう、面接間に関する質問紙を用いるなどのやり方をとっていた。本研究ではまず、IPR インタビューという技法を用いた。そもそもは、面接内での体験に焦点を当てたインタビューであったため、そこから面接間に関する情報を得たことは、偶然の副産物であった。当初のインタビューの教示からは離れるが、捨ててしまうには惜しいデータであり、分析対象とすることとした。その結果、面接内に深く関与する行動・認知に特化して、面接間のクライアントの体験を抽出することができた。さらに、これらを臨床群に対するインタビュー調査で検証した。これが、本研究の第2の特徴である。

最後に、③に関しては、臨床心理学においては、実践と研究の循環が、社会的にも求められる。研究から得たクライアントの感覚を、臨床実践に還元するという形で、そのような社会的要請に応えている点が、第3の特徴である。前述の通り、本研究で得られた示唆は、筆者の臨床実践につながっている。クライアントの表明されない不満を汲み取ること、治療関係が重要であること、クライアントが面接やカウンセラーに持つイメージを共有すること、面接内と面接間の相互作用を高めること、常にこれらのことを頭の片隅におきながら、面接を行うことが、実際に役立っている。実践と研究の循環という観点からは、このような研究結果を反映した現在の実践に関し、次はその実践を研究対象とすることが目指される。

第 12 章 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界は、各研究の章にも言及したが、ここで改めてまとめる。として、Ⅱ部、Ⅲ部の研究においては次の3点が挙げられる。第1が研究対象者である。クライアントは、非臨床群の大学生・大学院生であった。実際のクライアントを対象としなかったのは、進行中の心理療法過程に影響を与える可能性に配慮したためである。しかし臨床群と非臨床群とでは、健康度・話す問題の深刻度・面接に臨むモチベーションなど様々な点で違いがある。また、カウンセラーは訓練途上にある大学院生であった。そのため経験や技術の点で実際のカウンセラーとは異なる。第2は、面接場面の設定に関してである。試行カウンセリングでは共感的関わりを基本とし、目標の設定や介入は行っていない。また面接回数も1~3回であった。これらは実際のカウンセリングとは異なる。第3がIPRに関するものである。クライアントは面接と同じ回数のインタビューを受けた。通常のカウンセリングでは、面接後にその面接を振り返ることは行わない。インタビューが、面接プロセスや話すテーマに関するクライアントの自己理解を深め、何らかの変化を促進した可能性もある。対象者が非臨床群であるという上記の限界に対処するため、第Ⅳ部では臨床群を対象としたインタビュー調査を行った。しかし、2事例であるため、どのような臨床ケースに転用可能であるかについては十分明らかになっていない。岩壁（2013）は、事例研究の知見は、広く多くのクライアントに適応されること（一般化可能性）よりも、クライアントとセラピストの特徴、および臨床状況にマッチさせることによって適切に応用できること（転用可能性）に意義があるとする。上記課題を踏まえ、さらに事例を追加し、今回得られた知見がどのような範囲で転用可能であるかどうかを精査していくことが求められる。今後も、さらに研究を発展させ、より臨床現場に直結するような知見を得ていきたい。

引用文献

- 青木 みのり (2013) . 「心理療法によって問題の捉え方はいかに変化するか」に関する質的研究-解決指向アプローチによる時間制限面接を用いて- 心理臨床学研究, 31(1), 129-140
- Anderson, H. & Goolishian, H. (1992) . The client is the expert: A not-knowing approach to therapy. In. S. McNamee & K. Gergen (Eds.), *Social construction and the therapeutic process* (pp. 25-39). Newbury Park, CA: Sage.
- (アンダーソン, N. J.・グーリシャン, H. (1997). クライアントこそ専門家である-セラピーにおける無知のアプローチ- 野口 裕二・野村 直樹 (訳) ナラティブ・セラピー - 社会構成主義の実践- (pp.59-113) 金剛出版)
- Bedi, R. P., Davis, M. D., & Williams, M. (2005). Critical incidents in the formation of the therapeutic alliance from the client's perspective. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 42(3), 311-323.
- Bohart, A. C., & Tallman, K. (1999). How clients make therapy work: The Clients as a common factor: Clients as self-healers. In Duncan, B. L., Scott, D. M., & Hubble, M. A. (Eds.), *The heart and soul of change: What works in therapy*, (pp.91-120). Washington: American Psychological Association.
- Egan, G. (1990). *The Skilled helper a systematic approach to effective helping* (イーガン, G. 鳴澤 實・飯田 栄 (訳) (1998). 熟練カウンセラーをめざすカウンセリング・テキスト 創元社)
- Elliott, R. (1986). Helpful and nonhelpful events in brief counseling interviews: An empirical taxonomy, *Journal of Counseling Psychology*, 32(3), 307-322.
- Elliott, R. (1991). Five dimensions of therapy process. *Psychotherapy Research*, 1, 92-103.
- Elliott, R., James, E., Reimschuessela, C., Cisloa, D., & Sacka, N. (1995). Significant events and the analysis of immediate therapeutic impacts, *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 22(3), 620-630.
- Elliott, R. (2008). Research on client experience of therapy: Introduction to the special section, *Psychotherapy Research*, 18(3), 239-242.

- Greenberg, L.S., & Pinsof, W. M. (Eds.). (1986). *The psychotherapeutic Process A Research Handbook*. New York: Guilford Press.
- Hartmann, A., Orlinsky, D., Weber, S., Sandholz, A., & Zeech, A. (2010). Session and intersession experience related to treatment outcome in bulimia nervosa, *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 47(3), 355-370.
- 日笠 摩子(2011). 過食嘔吐からの回復のためのフォーカシング指向心理療法の試み-クライアントの評価による検討- 心理臨床学研究, 29(2), 197-208.
- Horvath, A.O. & Greenberg, L.S. (1989). Development and validation of the working alliance inventory, *Journal of Counseling Psychology*, 36, 223-233.
- Horvath, A.O. & Symonds, B.D.(1991). Relation between working alliance and outcome in psychotherapy: A meta-analysis, *Journal of Counseling Psychology*, 38(2), 139-149.
- 岩壁 茂(2005). 臨床心理学の最新知見(24)心理療法の効果測定-初回面接の実践効果研究- 臨床心理学, 5(1), 123-128.
- 岩壁 茂 (2007). カウンセリング・心理療法の過程 金沢吉展(編) カウンセリング・心理療法の基礎 (pp.121 -159) 有斐閣
- 岩壁 茂 (2008). プロセス研究の方法, 下山 晴彦 (編) 臨床心理学研究法 新曜社
- 岩壁 茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究 岩崎学術出版
- Iwakabe, S. (2011). Extending systematic case study method: Generating and testing hypotheses about therapeutic factors through comparisons of successful and unsuccessful cases, *Pragmatic Case Studies in psychotherapy*, 7(2), 339-350.
- 岩壁 茂(2013). 臨床心理学・最新研究レポート (第1回) 研究と実践の橋渡し 臨床心理学, 13, 145-150.
- Kagan, N., & Schauble, F.G. (1969). Affect simulation in interpersonal process recall, *Journal of Counseling Psychology*, 18(4), 309-313.
- 葛西 真記子(2006). セラピスト訓練における治療同盟, 面接評価, 応答意図に関する実証的研究 臨床心理学研究, 24, 87-98.
- Klee, M. R., Abeles, N., & Muller, R. T. (1990). Therapeutic alliance: early indicators , course , and outcome, *Psychotherapy*, 27(2), 166-174.
- Knox, S., Goldberg, J. L., Woodhouse, S. S. & Hill, C. E. (1999). Clients' internal

- representations of their therapists, *Journal of Counseling Psychology*, 46(2), 224-256.
- 木下 康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い 弘文堂
- 北山 修 (1990). 構造と設定-小此木の「構造」- 岩崎 徹也他(編) 治療構造論 (pp.217-231) 岩崎学術出版
- Levitt, H., Butler, M. & Hill, T. (2006). What clients find helpful in psychotherapy: Developing principles for facilitating moment-to-moment change, *Journal of Counseling Psychology*, 53, 314-324.
- Mackrill, T. (2007). Using a cross-contextual qualitative diary design to explore client experiences of psychotherapy, *Counselling & Psychotherapy Research*, 7(4), 233-239.
- Mackrill, T. (2008). Exploring psychotherapy clients' independent strategies for change while in therapy, *British Journal of Guidance & Counselling*, 36(4), 441-453.
- 無藤 隆(2004). 質的研究とは何か 無藤 隆・やまだ ようこ・南 博文・麻生 武・サトウ タツヤ (編) 質的心理学 (pp.1-30) 新曜社
- 村井 亮介・岩壁 茂・村岡 晶子(2013). 初回面接における訓練セラピストの困難とその対応-継続事例と中断事例の比較検討- 心理臨床学研究, 31(1), 141-151.
- 野田 亜由美(2015). 研究方法としての事例研究：系統的事例研究という視点から お茶の水女子大学新臨床相談センター紀要, 16, 45-50.
- 能智 正博(2005). 質的研究がめざすもの 伊藤 哲司・能智 正博・田中 共子 (編) 動きながら識る関わりながら考える-心理学における質的研究の実践- (pp.21-31) ナカニシヤ出版
- 岡野 憲一郎 (2008) . 治療的柔構造-心理療法の諸理論と実践との架け橋 岩崎学術出版社
- 小此木 啓吾 (1990) . 治療構造論序説 岩崎 徹也他(編) 治療構造論 (pp.1-44) 岩崎学術出版
- 小此木 啓吾 (2004) . 心の臨床家のための精神医学ハンドブック 創元社
- 大野 裕 (1990) . 治療的柔構造-共有錯覚から心的現実へ- 岩崎 徹也他(編) 治療構造論 (pp.232-248) 岩崎学術出版
- Perren, S., Godfrey, M., & Rowland, N. (2009). The long-term effects of Counseling: The process and mechanisms that contribute to ongoing change from a user perspective,

- Counseling and Psychotherapy Research*, 9(4), 241-249.
- Rennie, D.L. (1994a). Clients' accounts of resistance in counseling: A qualitative analysis, *Canadian Journal of counseling*, 28, 43-57.
- Rennie, D.L. (1994b). Clients' deference in psychotherapy, *Journal of Counseling Psychology*, 41, 427-437.
- Rhodes, R. H., Hill, C. E., Thompson, B. J., & Elliott, R. (1994). Client retrospective recall of resolved and unresolved misunderstanding events, *Journal of Counseling Psychology*, 41(4), 473-483.
- Rice, L.N., Elliott, R., & Greenberg, L. S. (1996) *Facilitating Emotional Change The Moment-by-Moment Process*, New York: The Guilford Press. (ライス L.N.・エリオット, R.・グリーンバーグ, L. S. 岩壁 茂 (訳) (2006). 感情に働きかける面接技法 誠信書房)
- 斉藤 清二 (2013) . 事例研究というパラダイム-臨床心理学と医学を結ぶ- 岩崎学術出版社
- 佐藤 郁哉(2008). 質的データ分析法 新曜社
- 島本 淳子(1996). カウンセラーの応答の指示性と来談者の心的状態との適合性に関する実験的研究 *カウンセリング研究*, 29, 9-18.
- 下田 節夫(2000). 防衛のメカニズムの諸相 佐治 守夫・水島 恵一 (編) 臨床心理学の基礎知識 有斐閣ブックス
- 下山 晴彦(2000). 心理臨床の発想と実践 岩波書房
- 下山 晴彦(2007). カウンセリング・心理療法とは 金沢吉展 (編) カウンセリング心理療法の基礎 (pp.107-118) 有斐閣アルマ
- Strauss, A. & Corbin, J. (1998). *Basics of Qualitative Research :Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, Newbury Park, CA: Sage. (ストラウス, A.・コービン, J. 操 華子・森岡 崇 (訳) (2004)質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 医学書院)
- Swift, J. & Callahan, J. (2009). Early psychotherapy process: An examination of client and trainee clinician perspective convergence, *Clinical Psychology and Psychotherapy*, 16, 228-236.

- 高山 由貴(2013). クライエントの主観的体験から見たカウンセリング初期のプロセス-試
行カウンセリングにおける話の深まりに注目して- 臨床心理学, 13(5), 689-699.
- Talmon, M. (1990). *Single Session Therapy*, San Francisco: Jossey-Bass Inc., Publishers
(タルモン, M. 青木 安輝 (訳) (2001). シングル・セッション・セラピー 金剛出版)
- 玉瀬 耕治(2004). 動機づけ 無藤 隆・森 俊昭・遠藤 由美 (著) 心理学 有斐閣
- 鑪 幹八郎(1970). 試行カウンセリング 誠信書房
- 辻河 昌登・辻河 優・夏野 良司・中西 美奈・古好 佳代・月岡 万里子・橋本 知子・松井 由
嘉里(2002). 心理臨床訓練としての事例研修論文の作成に関する一試論 兵庫教育大学研
究紀要, 22, 41-46
- 山本 眞利子(1996). クライエントのレディネス状態の違いにおける解釈がクライエント反
応の評定に及ぼす影響 カウンセリング研究, 29(1), 1-8
- 横溝 亮一(1983). クライエント中心療法 佐治 守夫・飯長 喜一郎 (編) ロジャーズクライ
エント中心療法 (pp.63-96) 有斐閣
- Wachtel, P, L.(1993). *Therapeutic communication -Knowing what to say when*, New York:
The Guilford Press. (ワクテル, P, L. 杉原 保史 (訳) (2004). 心理療法家の言葉の
技術 金剛出版)